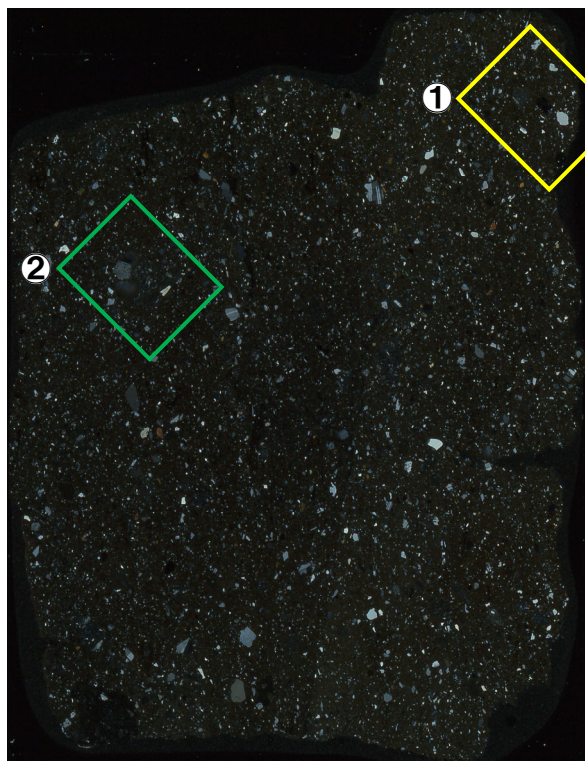


1.4 【敷地近傍(Ⅲ)】積丹半島西岸における洞爺火砕流堆積物の有無に関する検討

④-4 古宇川右岸地点(神恵内M-2ボーリング)(17/22)

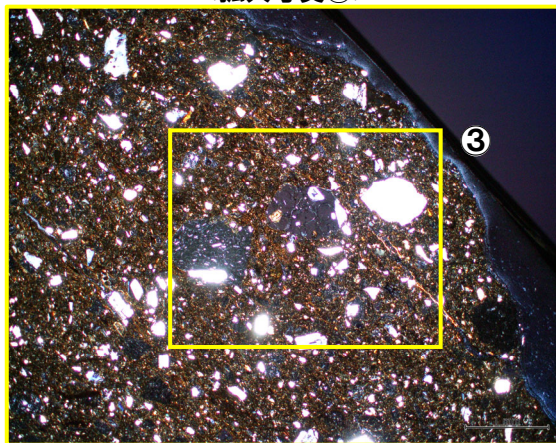
再掲(R5/1/20審査会合)



クロスニコル

10mm

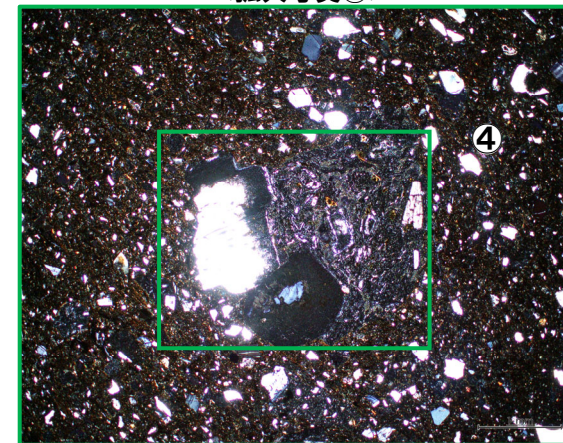
<拡大写真①>



クロスニコル(左方向に45°回転)
<拡大写真③>

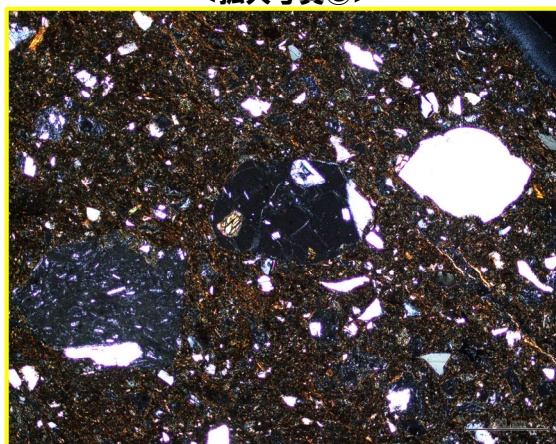
1mm

<拡大写真②>



クロスニコル(左方向に45°回転)
<拡大写真④>

1mm



クロスニコル(左方向に45°回転)

0.5mm



クロスニコル(左方向に45°回転)

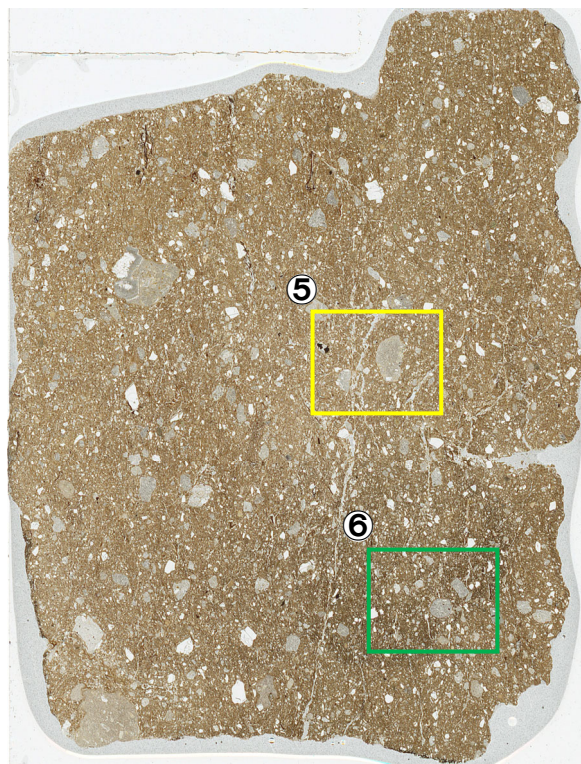
0.5mm

④-4 古宇川右岸地点(神恵内M-2ボーリング)(18/22)

再掲(R5/1/20審査会合)

Rf:岩片

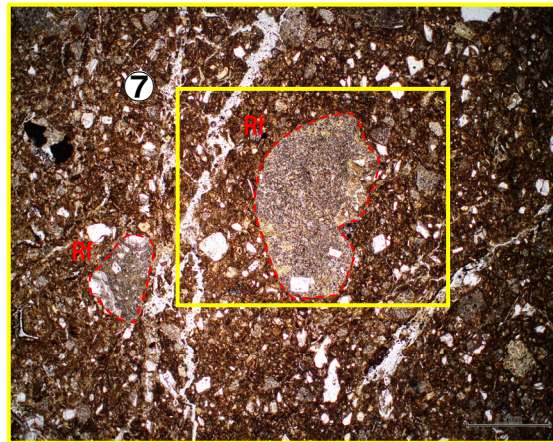
- 拡大写真⑤の約0.2cmの白色粒子に対応する粒子は、外形が明瞭であり、斑状組織が認められることから岩片であると判断される。
- 拡大写真⑥の約0.1cmの白色粒子に対応する粒子は、外形が明瞭であり、斑状組織が認められることから岩片であると判断される。



オープンニコル

10mm

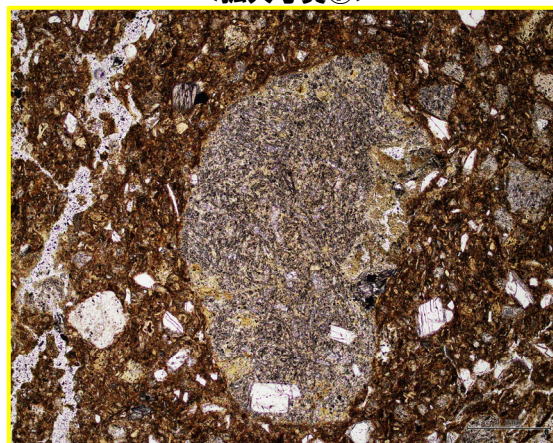
<拡大写真⑤>



オープンニコル

1mm

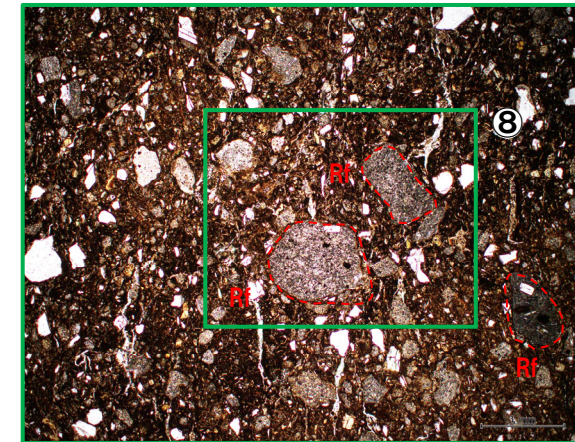
<拡大写真⑦>



オープンニコル

0.5mm

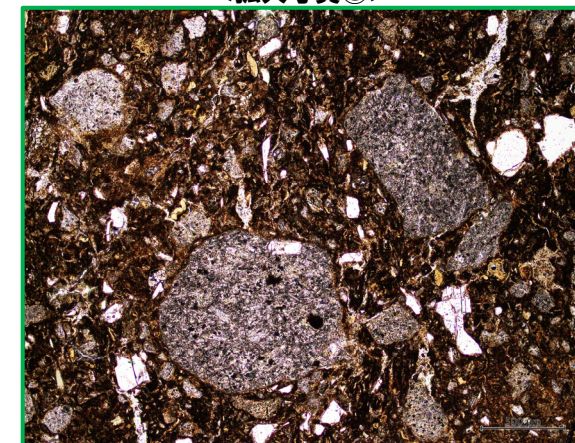
<拡大写真⑥>



オープンニコル

1mm

<拡大写真⑧>



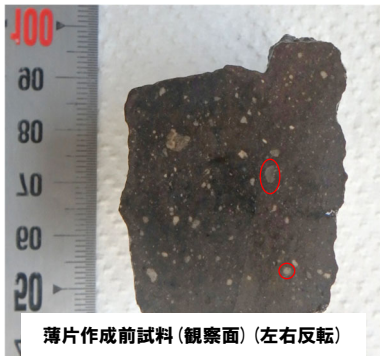
オープンニコル

0.5mm

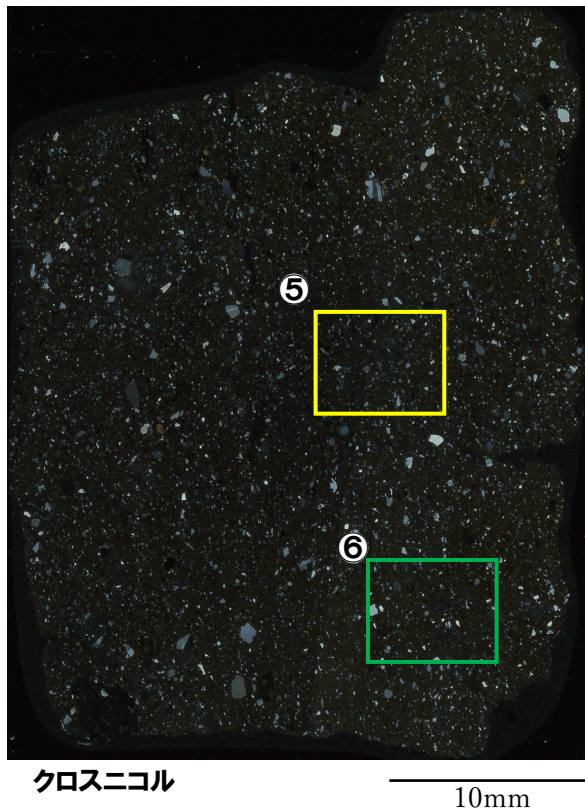
1.4 【敷地近傍(Ⅲ)】積丹半島西岸における洞爺火砕流堆積物の有無に関する検討

④-4 古宇川右岸地点(神恵内M-2ボーリング)(19/22)

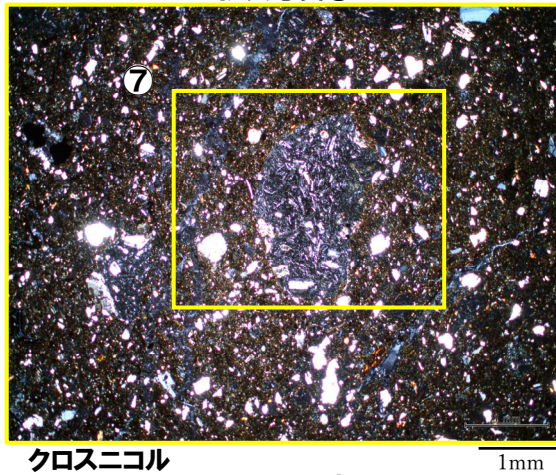
再掲(R5/1/20審査会合)



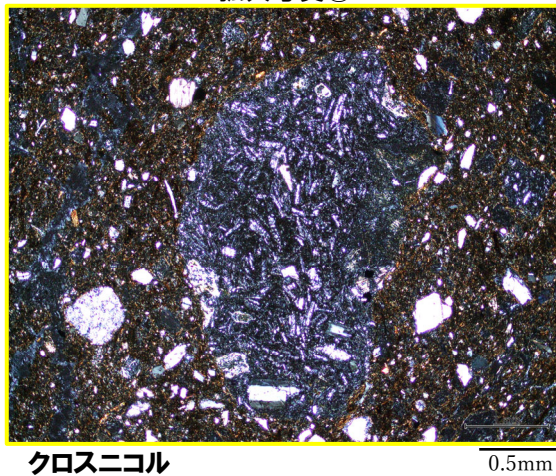
凡例
○:白色粒子



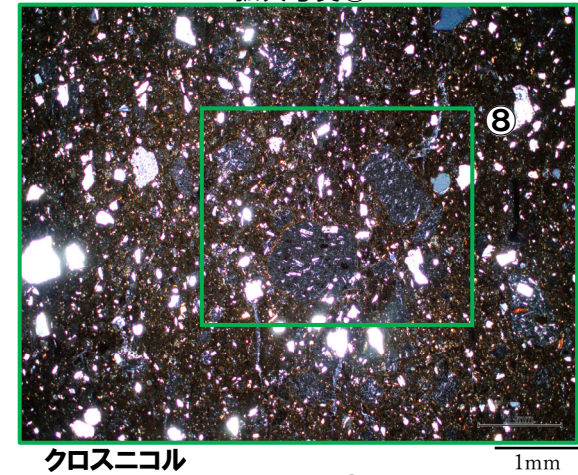
<拡大写真⑤>



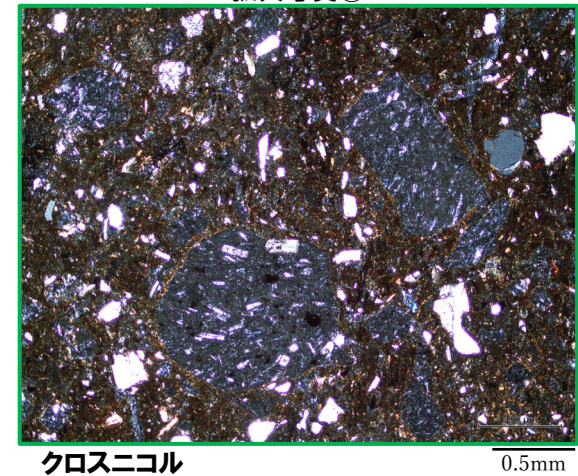
<拡大写真⑦>



<拡大写真⑥>



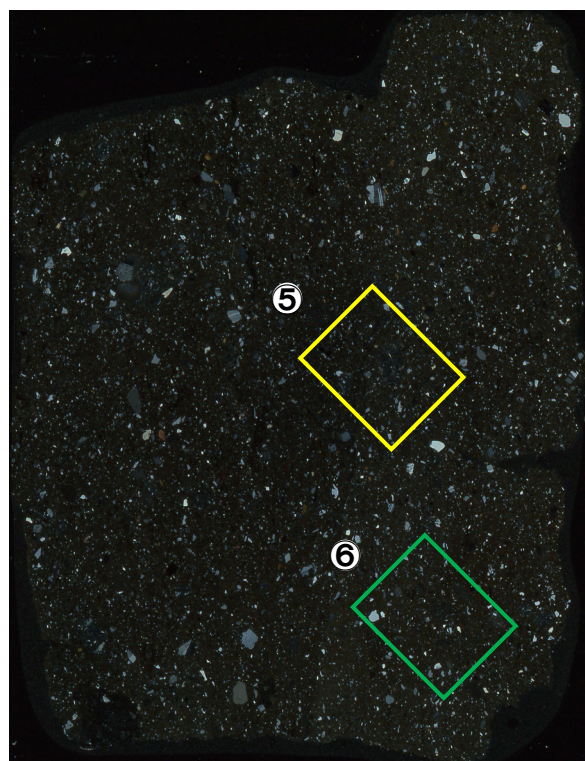
<拡大写真⑧>



余白

④-4 古宇川右岸地点(神恵内M-2ボーリング) (20/22)

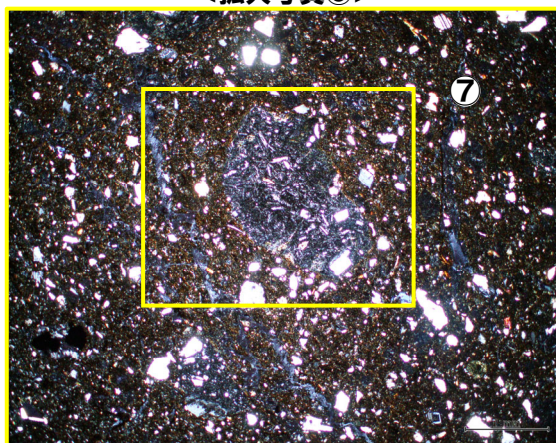
再掲 (R5/1/20審査会合)



クロスニコル

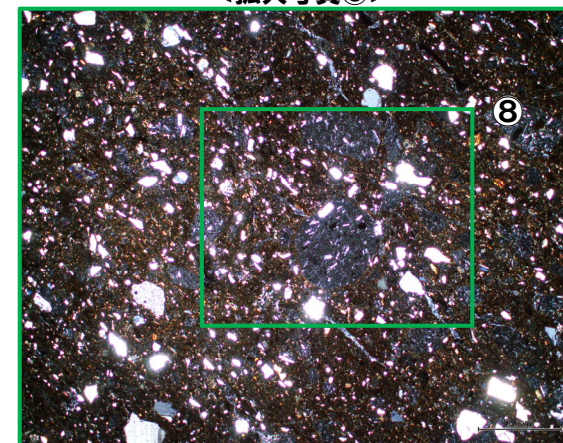
10mm

<拡大写真⑤>

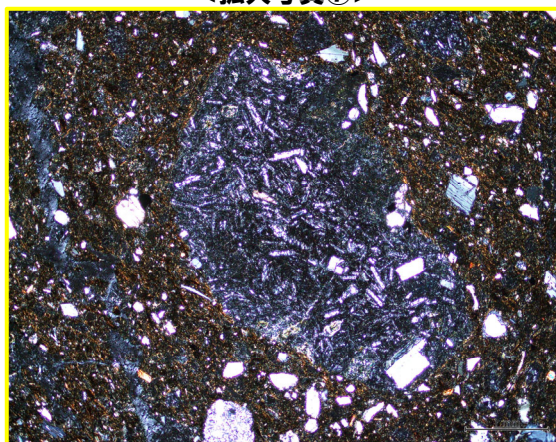
クロスニコル (左方向に45° 回転)
<拡大写真⑦>

1mm

<拡大写真⑥>

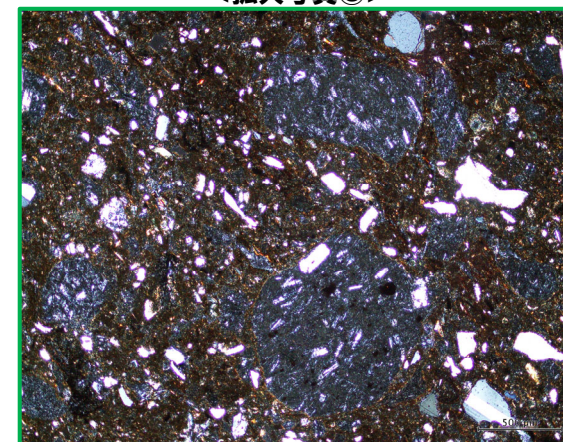
クロスニコル (左方向に45° 回転)
<拡大写真⑧>

1mm



クロスニコル (左方向に45° 回転)

0.5mm



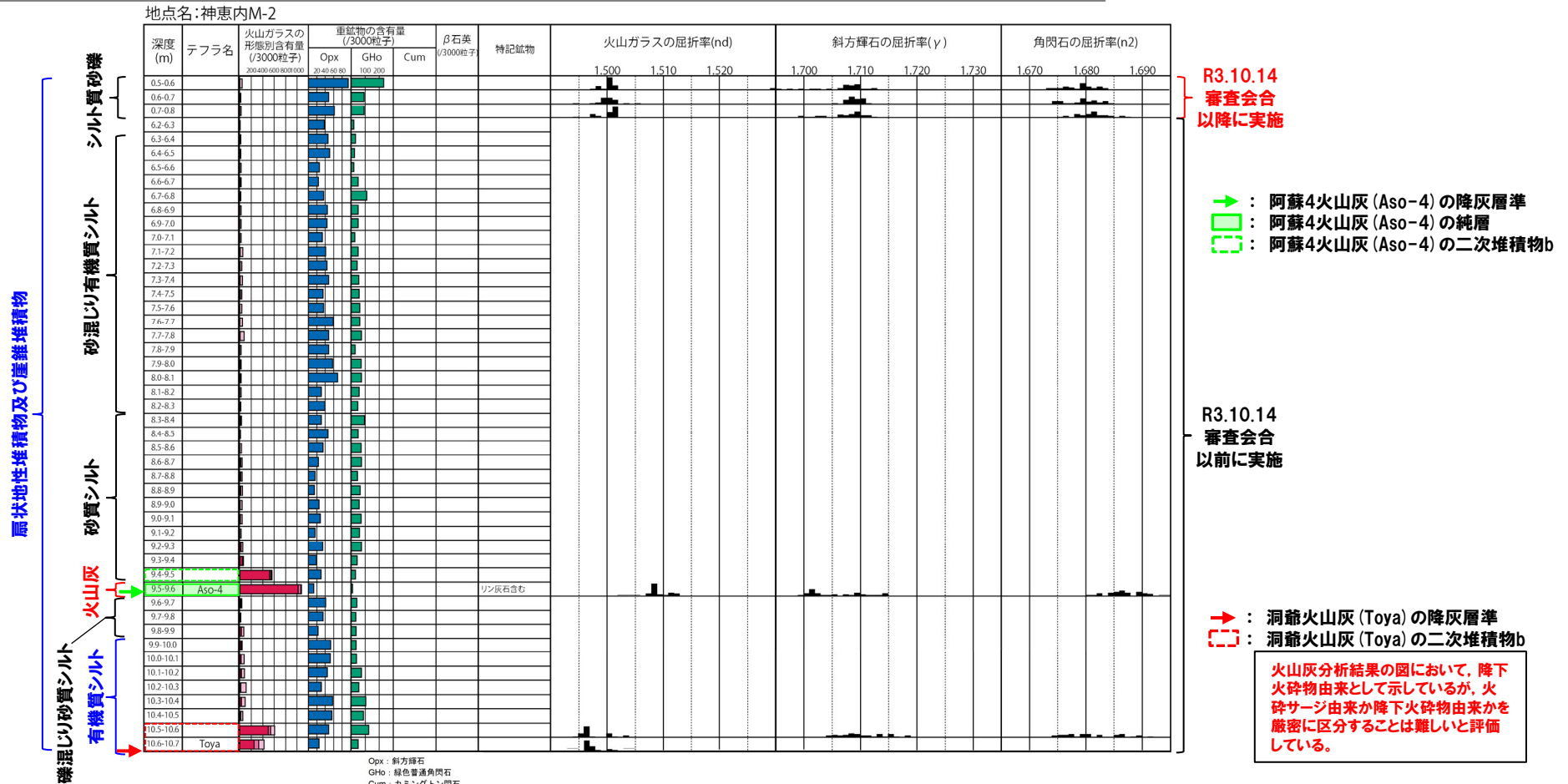
クロスニコル (左方向に45° 回転)

0.5mm

1.4 【敷地近傍(Ⅲ)】積丹半島西岸における洞爺火砕流堆積物の有無に関する検討

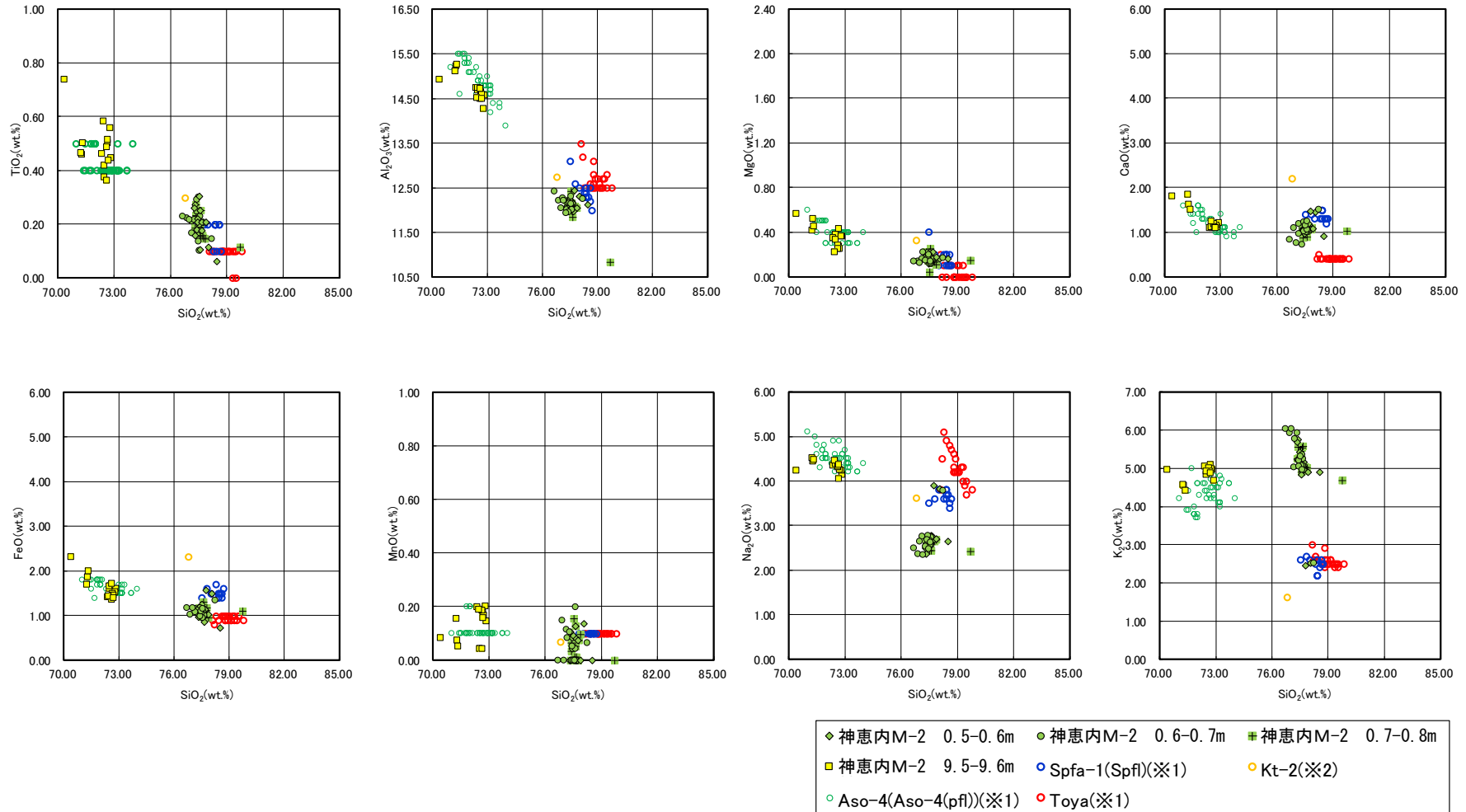
④-4 古宇川右岸地点(神恵内M-2ボーリング)(21/22)

一部修正(H26/1/24審査会合)



④-4 古宇川右岸地点(神恵内M-2ボーリング)(22/22)

再掲(R5/1/20審査会合)



※1 町田・新井(2011), ※2 青木・町田(2006)

火山ガラスの主元素組成(ハーカー図)(神恵内M-2) ※3

※3 深度0.5~0.6m, 深度0.6~0.7m及び深度0.7~0.8mは, R3.10.14審査会合以降に実施, 深度9.5~9.6mは, R3.10.14審査会合以前に実施。

1.4 【敷地近傍(Ⅲ)】積丹半島西岸における洞爺火砕流堆積物の有無に関する検討

④-5 古字川右岸地点(神恵内M-3ボーリング)(1/5)

一部修正(R5/1/20審査会合)

○神恵内M-3ボーリングにおいては、柱状図に“火山灰質”等の記載がなされている堆積物が、以下のとおり認められる。

深度(m)	標高(m)	層相	柱状図記事(抜粋)
0.00~0.60	33.05~32.45	礫混じり有機質シルト	○0.40m:厚さ5cmは火山灰混じり。
0.60~3.70	32.45~29.35	シルト質砂礫	○1.90~2.00m:均質な火山灰質シルトが挟在。
3.70~5.50	29.35~27.55	シルト質火山灰混じり砂礫	○5.45~5.50m:やや均質な火山灰質砂質シルトが挟在。
6.30~9.85	26.75~23.20	シルト質砂礫	○9.00~9.85m:基質は火山灰質。
9.85~10.15	23.20~22.90	火山灰	○細粒火山灰で均質。
10.15~11.10	22.90~21.95	火山灰混じりシルト質砂礫	○基質は細砂~中砂混じりの火山灰質シルト。 ○礫種:黒色安山岩礫多い。
11.10~12.60	21.95~20.45	礫質火山灰混じりシルト	○シルトは火山灰質。
12.60~14.05	20.45~19.00	礫混じり火山灰質シルト	○シルトは火山灰質。
14.05~14.10	19.00~18.95	火山灰	○細粒火山灰で均質。水平に挟在。
14.10~14.95	18.95~18.10	礫混じり火山灰質シルト	○シルトは火山灰質。

○本ボーリングにおける上記の堆積物については、火山灰分析の結果に基づき、地層区分を明確にするとともに、近接する神恵内M-2ボーリング(P364~P389参照)との層相・層序対比からも地層区分の明確化を図った。



【深度0.00~0.60m(標高33.05~32.45m):礫混じり有機質シルト】

・深度0.40mを対象とした火山灰分析(組成分析)の結果、火山ガラスの粒子数が少ない(24/3000粒子)ことから、主に火山砕屑物からなるものではなく、火山ガラスが混在する礫混じり有機質シルトに区分される。

【深度0.60~3.70m(標高32.45~29.35m):シルト質砂礫】

・深度1.90~2.00mを対象とした火山灰分析(組成分析)の結果、火山ガラスの粒子数が少ない(8~21/3000粒子)ことから、主に火山砕屑物からなるものではなく、火山ガラスが混在するシルト質砂礫に区分される。

・近接する神恵内M-2ボーリングでは、扇状地性堆積物及び崖錐堆積物の上面付近に、支笏第1降下軽石(Spfa-1)が混在する状況が認められることから(P358参照)、同じく支笏第1降下軽石(Spfa-1)に対比される火山ガラスが混在するものと考えられる。

【深度3.70~5.50m(標高29.35~27.55m):シルト質火山灰混じり砂礫】

・深度5.45~5.50mを対象とした火山灰分析(組成分析)の結果、火山ガラスの粒子数が少ない(71/3000粒子)ことから、主に火山砕屑物からなるものではなく、火山ガラスが混在するシルト質砂礫に区分される。

【深度6.30~9.85m(標高26.75~23.20m):シルト質砂礫】

・深度9.00~9.85mを対象とした火山灰分析(組成分析)の結果、火山ガラスの粒子数が少ない(18/3000粒子)ことから、主に火山砕屑物からなるものではなく、火山ガラスが混在するシルト質砂礫に区分される。

(次頁へ続く)

④-5 古宇川右岸地点(神恵内M-3ボーリング)(2/5)

一部修正(R5/1/20審査会合)

(前頁からの続き)

【深度9.85～10.15m(標高23.20～22.90m):火山灰】

- ・火山灰分析(組成分析,屈折率測定及び主成分分析)の結果,洞爺火山灰(Toya)に対比される火山ガラスが認められるものの,火山ガラスの粒子数が少ない(35/3000粒子)ことから,主に火山砕屑物からなるものではなく,火山ガラスが混在するシルトに区分される。

【深度10.15～11.10m(標高22.90～21.95m):火山灰混じりシルト質砂礫】

- ・火山灰分析(組成分析)の結果,火山ガラスの粒子数が少ない(23/3000粒子)ことから,主に火山砕屑物からなるものではなく,火山ガラスが混在するシルト質砂礫に区分される。

【深度11.10～12.60m(標高21.95～20.45m):礫質火山灰混じりシルト】

- ・火山灰分析(組成分析)の結果,火山ガラスの粒子数が少ない(7～58/3000粒子)ことから,主に火山砕屑物からなるものではなく,火山ガラスが混在する礫質シルトに区分される。

【深度12.60～14.05m(標高20.45～19.00m):礫混じり火山灰質シルト】

- ・R3.10.14審査会合以前に実施した火山灰分析(組成分析)の結果,深度13.20～13.80mについては,火山ガラスの粒子数が少ない(117/3000粒子以下)ことから(P394参照),主に火山砕屑物からなるものではなく,火山ガラスが混在する扇状地性堆積物及び崖錐堆積物に区分される。
- ・深度13.80～13.90mについては,基質部分に洞爺火山灰(Toya)の火山ガラスが認められるものの,火山ガラスの粒子数が358/3000粒子であること(P394参照)及び礫混じり火山灰質シルト中に認められることから,洞爺火山灰(Toya)の二次堆積物b(層厚:10cm)に区分される。
- ・深度13.90～14.05mについては,基質部分に洞爺火山灰(Toya)の火山ガラスを多く含む(2000/3000粒子以上,P394参照)ものの,礫混じり火山灰質シルト中に認められること(P393参照)から,洞爺火山灰(Toya)の二次堆積物a(層厚:15cm)に区分される。

【深度14.05～14.10m(標高19.00～18.95m):火山灰】

- ・R3.10.14審査会合以前に実施した火山灰分析(組成分析及び主成分分析)の結果,洞爺火山灰(Toya)に対比される火山ガラスが認められることから,火山ガラスの粒子数が急増する箇所に降灰層準が認められる(P394参照)。
- ・当該堆積物は,基質部分に洞爺火山灰(Toya)の火山ガラスを多く含む(2000/3000粒子以上)こと(P394参照)から,洞爺火山灰(Toya)の純層(層厚:5cm)に区分される。

【深度14.10～14.95m(標高18.95～18.10m):礫混じり火山灰質シルト】

- ・R3.10.14審査会合以前に実施した火山灰分析(組成分析)の結果,火山ガラスの粒子数が少ない(218/3000粒子以下)ことから,主に火山砕屑物からなるものではなく,火山ガラスが混在する礫混じりシルトに区分される。

余白

1.4 【敷地近傍(Ⅲ)】積丹半島西岸における洞爺火砕流堆積物の有無に関する検討

④-5 古字川右岸地点(神恵内M-3ボーリング) (3/5)

一部修正 (H26/1/24審査会合)

孔口標高:33.05m



Mm1段丘堆積物

コア写真(深度0~17m) (2010年4月撮影)

神恵内M-3 孔口標高 33.05m 掘進長 17.00m

標尺	標高	深度	柱状図	地質	色調	記
(m)	(m)	(m)	図	名	調	事
1	32.45	0.60	細粒じり質礫質シルト	礫		シルトは含有礫質やや均質。 加入礫径: 2cm以下主体。 礫形: 歪円~角礫。 礫率: 0.40%。最大5cmは火山灰混じり※1
2			シルト質砂礫	礫		基質は細砂混じりシルト。 火山灰質やや粘性あり。 礫径: 5cm以下(最大径20cm)主体。 礫形: 歪円~角礫。 礫率: 60~70%程度。 礫種: 安山岩、デイスイト。 1.90~2.00m: 均質な火山灰質シルトが挟在。※1
3	29.35	3.70	シルト質砂礫	礫		
4			シルト質砂礫	礫		基質は細砂混じりシルト。 礫径: 10cm以下(最大径12cm)主体。 礫形: 歪円~角礫。 礫率: 60~70%程度。 礫種: 安山岩、デイスイト。 5.45~5.50m: やや均質な火山灰質砂礫シルトが挟在。※1
5	27.55	5.50	シルト質砂礫	礫		
6	26.75	6.30	細粒じり質砂礫	礫		シルトは粘りが強い。 加入礫径: 0.5cm以下(最大径10cm)主体。 礫形: 歪円礫。 礫率: 10~20%程度。
7			シルト質砂礫	礫		基質は細砂混じりシルト。 礫径: 10cm以下(最大径12cm)主体。 礫形: 歪円~角礫。 礫率: 60~70%程度。 礫種: 安山岩、デイスイト。 9.00~9.05m: 基質は火山灰質。※1 礫率: 8%以上。
8			シルト質砂礫	礫		
9	23.20	9.85	火山灰	乳濁		細粒火山灰で粘質*やや粘性あり。 基質は細砂~中砂混じりの火山灰質シルト。 礫径: 4cm以下(最大径6cm)主体。 礫形: 角礫。 礫率: 60~70%。 礫種: 褐色火山岩類多し。
10	22.90	10.15	火山灰混じりシルト質砂礫	礫		
11	21.95	11.10	シルト質砂礫	礫		シルトは火山灰質*中砂~粗砂混じる。 加入礫径: 2cm以下(最大径5cm)主体。 礫形: 歪円~角礫。 礫率: 30~40%程度。 礫種: 黄色および暗灰色安山岩、デイスイト。 11.10~11.25m: シルトは均質。 12.05~12.20m: やや均質な砂質シルトが挟在。※2
12	20.45	12.60	シルト質砂礫	礫		
13			シルト質砂礫	礫		シルトは火山灰質。中砂~粗砂混じる。 部分的に礫多く混じる。 12.80~12.90m: 礫径: 2cm以下主体。礫率: 10~20%程度。 13.10~13.20m: 礫径: 4cm以下主体。礫率: 50~60%程度。 13.50~13.90m: 礫径: 2cm以下主体。礫率: 10~20%程度。
14	19.00	14.00	火山灰	乳濁		細粒火山灰粘質。水中に懸在。 シルトは火山灰質*中砂~粗砂混じる。 14.05~14.95m: 礫径: 3cm以下(最大径9cm)主体。 礫率: 50~60%程度。
15	18.10	14.95	シルト質砂礫	礫		
16	16.95	16.10	シルト質砂礫	礫		基質はシルト混じり粗砂。 礫径: 2cm以下(最大径10cm)主体。 礫形: 円~歪円礫。 礫率: 8%以上。 礫種: 安山岩、デイスイト、泥岩、砂岩、チャートなど。
17	16.05	17.00	凝り固まり	礫		岩片は硬質。割れ目はなく、棒状コアを呈する。

礫状地性堆積物及び産錐堆積物

Mm1段丘堆積物

※2 従来、本ボーリングに認められる深度11.10~12.60mの礫質火山灰混じりシルトの柱状図記事には、「12.05~12.20m: やや基質な砂質シルトが挟在。」と記載していたが、誤記であるため、R5.1.20審査会合資料において、「12.05~12.20m: やや均質な砂質シルトが挟在。」に記載を修正した。

※1 柱状図には、「火山灰質」等と記載されているが、R3.10.14審査会合以降に実施した火山灰分析等の結果から、主に火山砕屑物からなるものではないと評価した。

柱状図(深度0~17m)

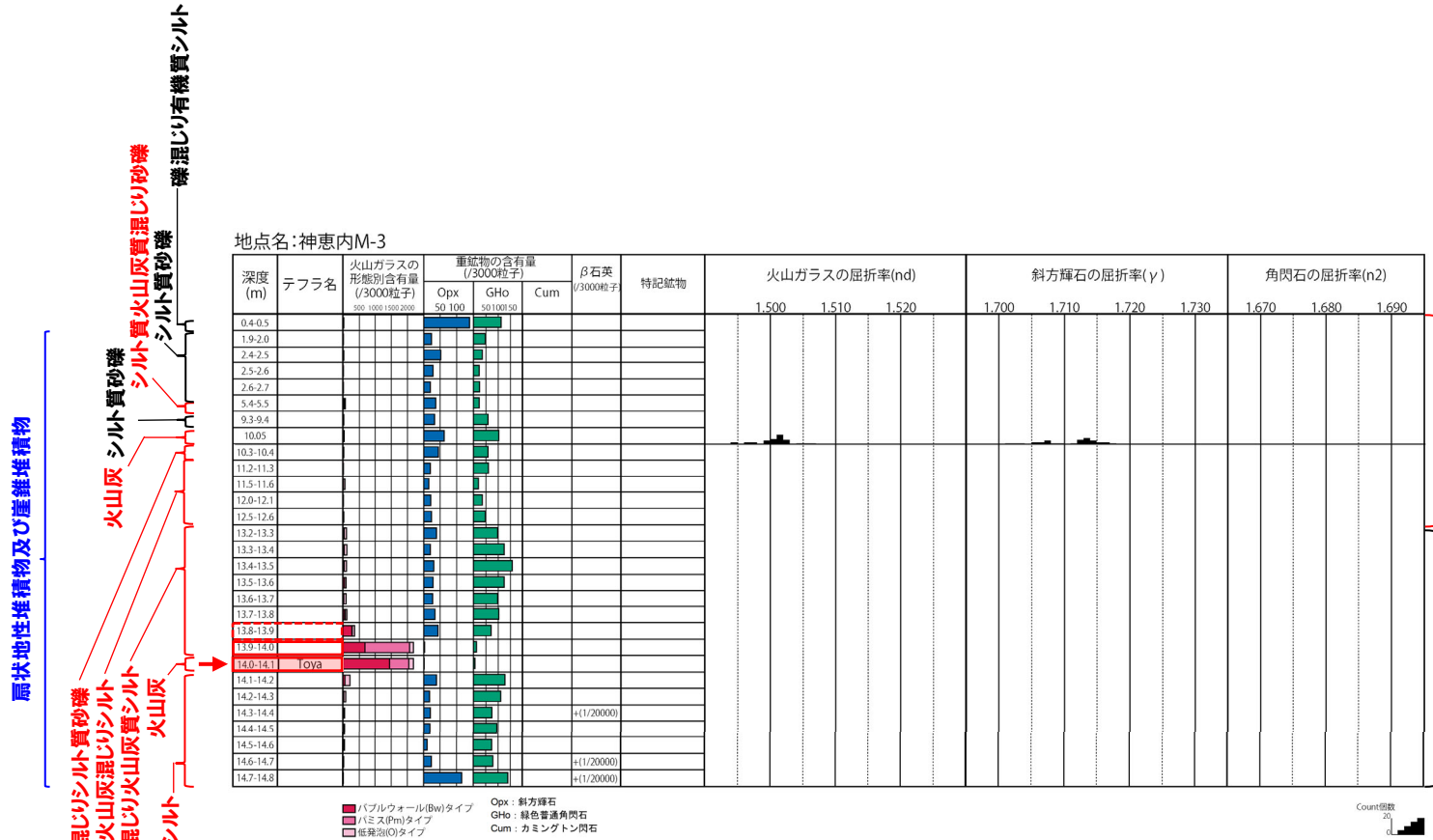
1.4 【敷地近傍(Ⅲ)】積丹半島西岸における洞爺火砕流堆積物の有無に関する検討

④-5 古宇川右岸地点(神恵内M-3ボーリング) (4/5)

一部修正 (H26/1/24審査会合)

- : 洞爺火山灰 (Toya) の降灰層準
- : 洞爺火山灰 (Toya) の純層
- : 洞爺火山灰 (Toya) の二次堆積物a
- : 洞爺火山灰 (Toya) の二次堆積物b

火山灰分析結果の図において、降下火砕物由来として示しているが、火砕サージ由来か降下火砕物由来かを厳密に区分することは難しいと評価している。



火山灰分析結果(神恵内M-3)

(参考) 洞爺火山灰 (Toya) の屈折率(町田・新井, 2011より)

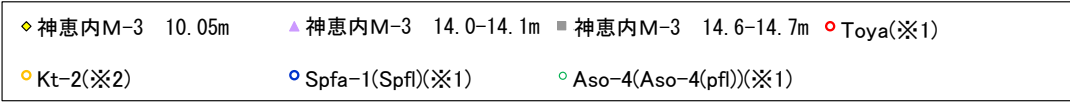
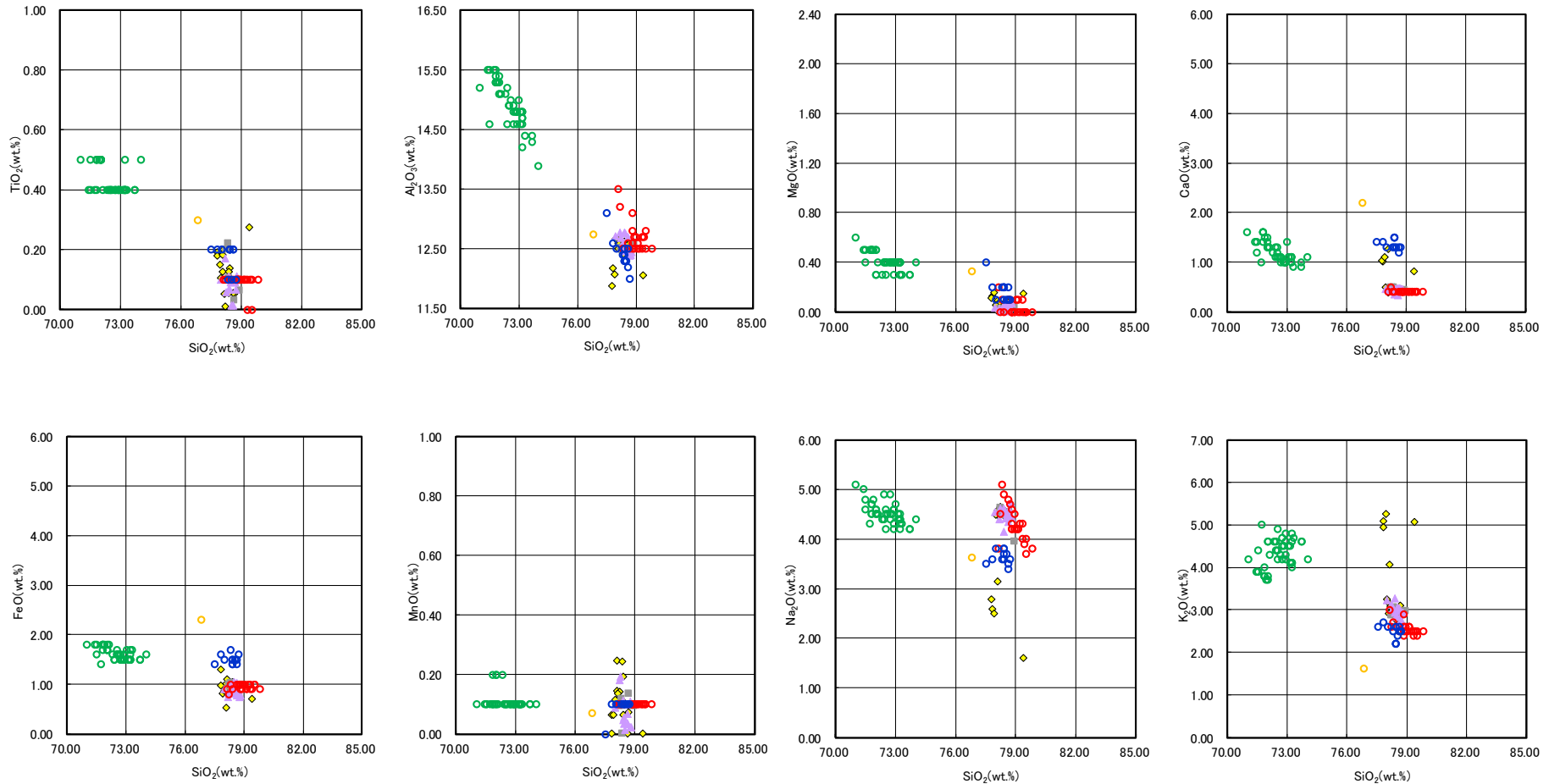
略号	特徴	火山ガラス	斜方輝石	角閃石
Toya	バブルウォールタイプ・ハミスタタイプの火山ガラス主体	1.494-1.498	1.711-1.761 (1.758-1.761, 1.712-1.729 bimodal)	1.674-1.684

(参考) Spfl及びSpfa-1の屈折率(町田・新井, 2011より)

略号	特徴	火山ガラス	斜方輝石	角閃石
Spfl	バブルウォールタイプ・ハミスタタイプの火山ガラス主体	1.500-1.503	1.730-1.733	1.688-1.691
Spfa-1	ハミスタタイプの火山ガラス主体	1.501-1.505 (1.502-1.503)	1.729-1.735	1.688-1.691

④-5 古字川右岸地点(神恵内M-3ボーリング) (5/5)

一部修正 (H26/1/24審査会合)



※1 町田・新井 (2011), ※2 青木・町田 (2006)

火山ガラスの主元素組成(ハーカー図)(神恵内M-3) ※3

※3 深度10.05mは, R3.10.14審査会合以降に実施, 深度14.0~14.1m及び深度14.6~14.7mは, R3.10.14審査会合以前に実施。

余白

1.4 【敷地近傍(Ⅲ)】積丹半島西岸における洞爺火砕流堆積物の有無に関する検討

④-6 古宇川右岸地点(神恵内H-1ボーリング)(1/5)

一部修正(R5/1/20審査会合)

○神恵内H-1ボーリングにおいては、柱状図に“火山灰質”の記載がなされている堆積物が、以下のとおり認められる。

深度(m)	標高(m)	層相	柱状図記事(抜粋)
20.80~22.45	24.22~22.57	礫混じり有機質シルト	○20.90m:厚さ1cmの火山灰質シルト(乳灰色)が挟在。 ○21.30~21.35m:火山灰質細砂混じり。
22.45~22.70	22.57~22.32	シルト質砂礫	○基質は粗砂混じりの火山灰質シルト。

○本ボーリングにおける上記の堆積物については、火山灰分析の結果に基づき、地層区分を明確にした。



【深度20.80~22.45m(標高24.22~22.57m):礫混じり有機質シルト】

- ・深度20.90m及び21.30~21.35mを対象とした火山灰分析(組成分析及び屈折率測定)の結果、洞爺火山灰(Toya)に対比される火山ガラスが認められるものの、火山ガラスの粒子数が少ない(14~30/3000粒子)ことから、主に火山碎屑物からなるものではなく、火山ガラスが混在する礫混じり有機質シルトに区分される。

【深度22.45~22.70m(標高22.57~22.32m):シルト質砂礫】

- ・R3.10.14審査会合以前に実施した火山灰分析(組成分析、屈折率測定及び主成分分析)の結果、洞爺火山灰(Toya)に対比される火山ガラスが認められ、火山ガラスの粒子数が増加する箇所に、洞爺火山灰(Toya)の降灰層準が認められるものと判断される(P400~P401参照)。
- ・当該堆積物については、基質部分に洞爺火山灰(Toya)の火山ガラスが認められるものの、火山ガラスの粒子数は少なく(20~60/3000粒子、P400参照)、明瞭な火山灰を含む地層として認められないことから、火山ガラスが混在するシルト質砂礫に区分される。

1.4 【敷地近傍(Ⅲ)】積丹半島西岸における洞爺火砕流堆積物の有無に関する検討

④-6 古宇川右岸地点(神恵内H-1ボーリング)(2/5)

再掲(R5/1/20審査会合)

孔口標高:45.02m



コア写真(深度0~15m)(2010年4月撮影)

神恵内H-1 孔口標高 45.02m 掘進長 27.50m

標尺	標高(m)	深度(m)	柱状図	地質	色調	記
1	44.42	0.60	粗砂混じり砂質シルト	暗褐		シルトは粗砂混じりで不均質。混入礫径:2cm以下(最大径7cm)主体。礫率10~20%程度。礫は風化流紋岩または風化デライト多い。
2			砂礫	暗褐		基質は中砂~粗砂。礫径:10cm以下(最大径20cm)主体。礫形:垂円~垂角礫。礫率:80%以上。礫種:安山岩主体。珪化岩礫少量混入。
3	42.32	2.70	砂	褐		中砂~粗砂で不均質。
	42.12	2.90	砂礫	褐		基質は中砂~粗砂。礫径:8cm以下(最大径12cm)主体。礫形:垂円~垂角礫。礫率:60~70%。礫種:暗灰色および暗紫灰色の安山岩主体。
	41.67	3.35	砂	褐		粗砂~中砂でやや均質。やや不明瞭なラミナあり(水平)。3.35m:厚さ1.5cmのシルトが挟在。
4	41.22	3.80				
5						
6						
7						
8						
9						
10			シルト混じり砂礫	褐		基質はシルト混じり粗砂。礫径:20cm以下(最大径40cm)主体。礫形:垂円~垂角礫。礫率:80%程度。礫種:安山岩主体。礫の色調は暗灰、灰、紫灰および暗赤灰と雑多。シルト岩礫混入。
11						
12						
13						
14						
15	30.02	15.00				

扇状地性堆積物及び崖錐堆積物

柱状図(深度0~15m)

1.4 【敷地近傍(Ⅲ)】積丹半島西岸における洞爺火砕流堆積物の有無に関する検討

④-6 古宇川右岸地点(神恵内H-1ボーリング)(3/5)

一部修正 (R5/1/20審査会合)

孔口標高: 45.02m



コア写真(深度15~27.5m)(2010年4月撮影)

神恵内H-1 孔口標高 45.02m 掘進長 27.50m

標尺	標高 (m)	深度 (m)	柱状図	地質	色調	記
16	29.42	15.60	砂	褐		上方細粒化構造あり。 15.00~15.15m: シルト混じりの細砂~中砂。 15.15~15.40m: 細砂混じりの中砂~粗砂。 15.40~15.50m: 硬質のシルト混じり中砂。 粒径: 1cm以下(最大径5cm)主体。礫率: 30~40%。 15.50~15.60m: シルト質細砂。
17			シルト混じり中砂	暗褐		基質はシルト混じり中砂~粗砂。粒径: 10cm以下(最大径30cm)主体。 礫形: 歪円~歪角礫。礫率: 70~80%程度。礫種: 安山岩主体。 礫の色調は暗灰、灰、紫灰および暗赤灰と雑多。シルト岩、風化流紋岩礫混じる。
18	27.02	18.00	砂	暗褐		細砂~粗砂で上方細粒化構造あり。 径0.5cm以下礫が少量混じる。扁平礫にインプリケーションあり。
19			シルト混じり砂礫	暗褐		基質はシルト混じり粗砂。 粒径: 10cm以下(最大径30cm)主体。 礫形: 歪円~歪角礫。礫率: 70~80%程度。礫種: 安山岩主体。 礫の色調は暗灰、灰、紫灰および暗赤灰と雑多。 シルト岩、風化流紋岩礫混じる。
20	24.22	20.80				
21			礫有混雑じりシルト	暗褐		シルトは有機質で、砂分混じる。 混入礫径: 径2cm以下(最大径7cm)主体。礫形: 円~歪角礫。礫率: 10~20%程度。 礫種: 安山岩、デイサイト主体。 20.90m: 厚さ1cmの火山灰質シルト(乳灰色)が挟在* 21.30~21.35m: 火山灰質細砂混じり*
22	22.57	22.45				
23	22.30	22.70	シルト質砂礫	暗灰		基質は粗砂混じりの火山灰質シルト* 粒径: 8cm以下主体。礫形: 歪円~角礫。礫率: 70~80%。礫種: 安山岩主体。
24			砂礫	褐 & 暗褐		基質はシルト混じり粗砂。固結度やや良好。 粒径: 10cm以下(最大径13cm)主体。 礫形: 円~歪円礫。礫率: 70~80%。礫種: 安山岩主体。
25						25.00~25.80m: 凝灰角礫岩の礫(ハイアロクラスタイト様)。 25.80~25.90m: 円礫混じる砂礫。
26	19.12	25.90				
27			砂岩	褐 & 暗灰		中粒~粗粒砂岩。径3cm以下のシルト岩礫混じる。 25.90~26.05m: 径8cm以下の礫が多く混じる。 27.40m: 厚さ1cmの細粒砂岩が挟在。傾斜10°。
28	17.52	27.50				

扇状地性堆積物及び崖錐堆積物

Mm1段丘堆積物

※柱状図には、「火山灰質」と記載されているが、R3.10.14審査会合以降に実施した火山灰分析等の結果から、主に火山砕屑物からなるものではないと評価した。

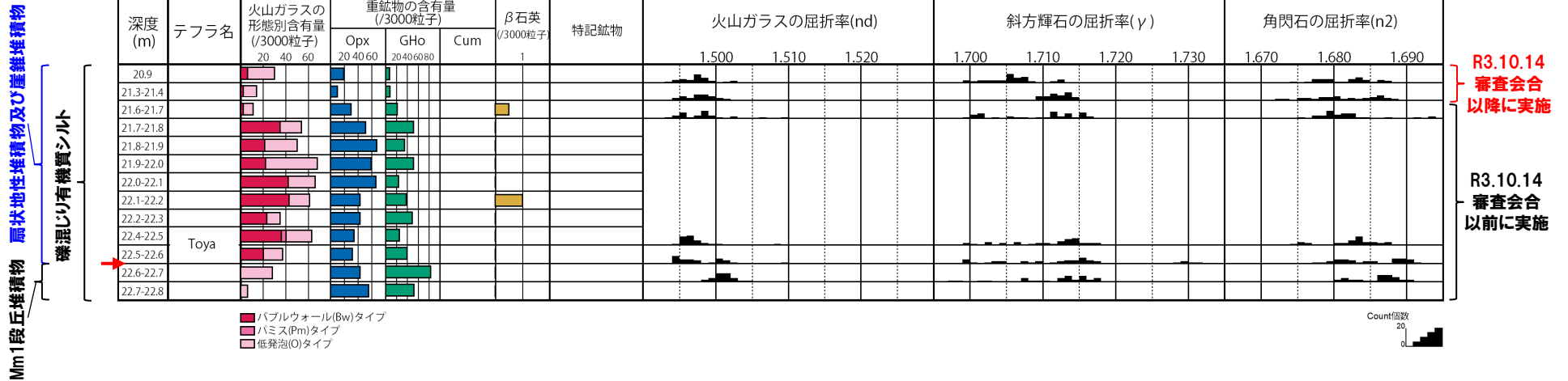
柱状図(深度15~27.5m)

1.4 【敷地近傍(Ⅲ)】積丹半島西岸における洞爺火砕流堆積物の有無に関する検討

④-6 古宇川右岸地点(神恵内H-1ボーリング)(4/5)

再掲(R5/1/20審査会合)

地点名:神恵内H-1



→ : 洞爺火山灰 (Toya) の降灰層準

火山灰分析結果(深度20.9m, 21.3~21.4m, 21.6~22.8m)

(参考) 洞爺火山灰 (Toya) の屈折率(町田・新井, 2011より)

略号	特徴	火山ガラス	斜方輝石	角閃石
Toya	バブルウォールタイプ・バミスタタイプの火山ガラス主体	1.494-1.498	1.711-1.761 (1.758-1.761, 1.712-1.729 bimodal)	1.674-1.684

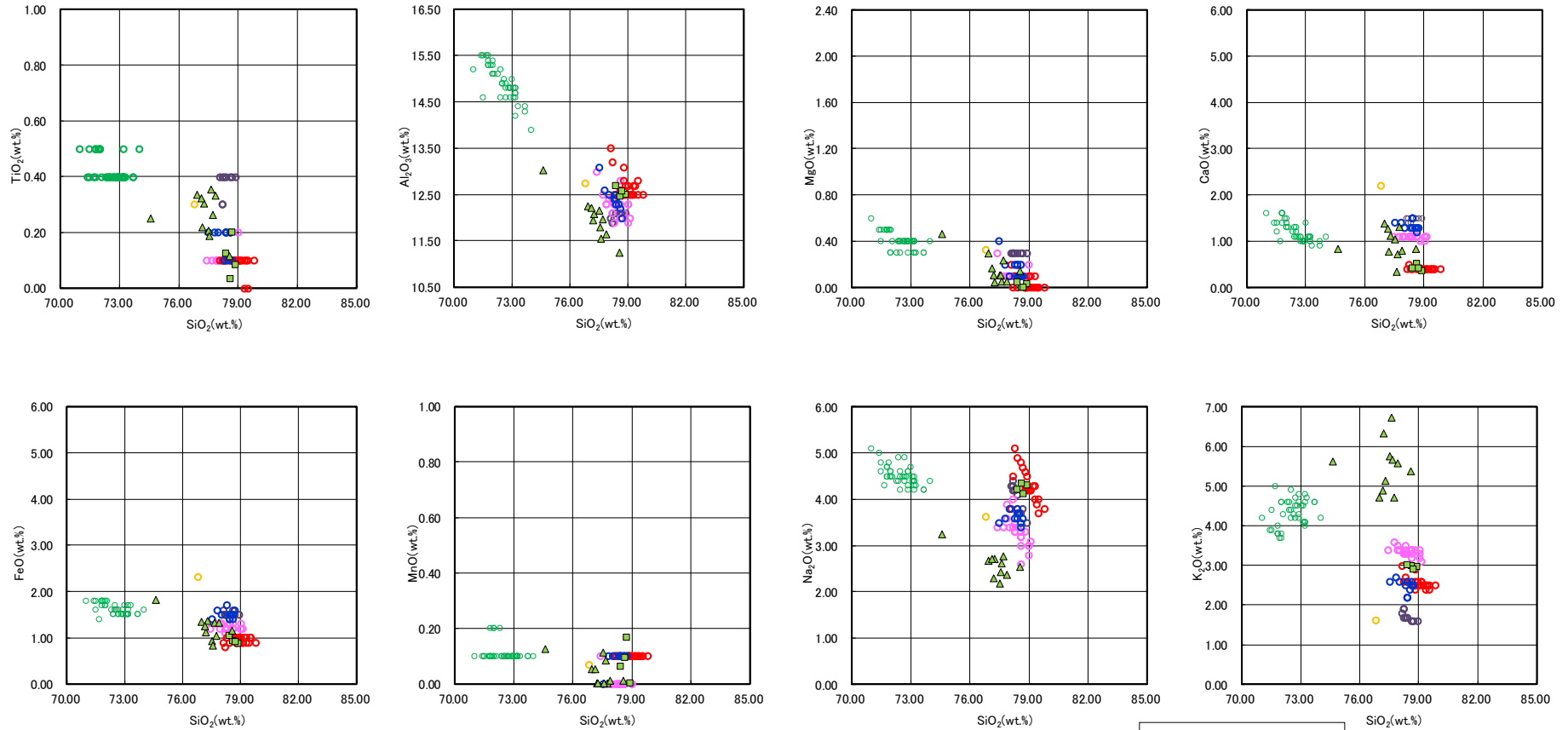
Mm1段丘堆積物 礫混じり有機質シルト 層状地性堆積物及び崖錐堆積物

R3.10.14
審査会合
以降に実施

R3.10.14
審査会合
以前に実施

④-6 古宇川右岸地点(神恵内H-1ボーリング) (5/5)

再掲(R5/1/20審査会合)



- ▲ 神恵内H-1 22.6-22.7
- 神恵内H-1 22.5-22.6
- AT(※1)
- Spfa-1(Spfl)(※1)
- Kt-2(※2)
- Aso-4(Aso-4(pfl))(※1)
- Toya(※1)
- Kc-Hb(※1)

火山ガラスの主元素組成(ハーカー図)(神恵内H-1)
(R3.10.14審査会合以前に実施)

※1 町田・新井(2011), ※2 青木・町田(2006)

1.4 【敷地近傍(Ⅲ)】積丹半島西岸における洞爺火砕流堆積物の有無に関する検討

④-7 古宇川右岸地点(神恵内H-2ボーリング)(1/5)

一部修正(R5/1/20審査会合)

○神恵内H-2ボーリングにおいては、柱状図に“軽石片”、“火山灰質”等の記載がなされている堆積物が、以下のとおり認められる。

深度(m)	標高(m)	層相	柱状図記事(抜粋)
6.05~6.65	35.69~35.09	砂	○火山灰質粗砂で、シルト分混じり不均質。
7.65~7.85	34.09~33.89	砂礫	○7.65m:厚さ3cmの火山灰細砂が挟在。
16.05~17.40	25.69~24.34	礫混じり有機質土混じりシルト	○礫種:安山岩主体, デイサイト, 軽石片混じる。
19.35~19.65	22.39~22.09	火山灰質シルト混じり砂礫	○基質は火山灰シルト混じりの中砂~粗砂。
19.65~20.00	22.09~21.74	礫混じり火山灰質シルト	○シルトは細粒火山灰質。 ○径1cm以下の安山岩礫が少量混じる。

○本ボーリングにおける上記の堆積物については、火山灰分析の結果に基づき、地層区分を明確にするとともに、同一地形且つ汀線方向に位置する神恵内M-2ボーリング(P364~P389参照)及び神恵内M-3ボーリング(P390~P395参照)との層相・層序対比からも地層区分の明確化を図った。



(次頁へ続く)

④-7 古宇川右岸地点(神恵内H-2ボーリング)(2/5)

一部修正(R5/1/20審査会合)

(前頁からの続き)



【深度6.05～6.65m(標高35.69～35.09m):砂】

- ・火山灰分析(組成分析)の結果,火山ガラスの粒子数が少ない(15～24/3000粒子)ことから,主に火山砕屑物からなるものではなく,火山ガラスが混在する砂に区分される。
- ・神恵内M-3ボーリングにおいて,扇状地性堆積物及び崖錐堆積物の上面付近に,支笏第1降下軽石(Spfa-1)に対比される火山ガラスが混在する状況が認められることから(P358参照),同じく支笏第1降下軽石(Spfa-1)に対比される火山ガラスが混在するものと考えられる。

【深度7.65～7.85m(標高34.09～33.89m):砂礫】

- ・深度7.65mを対象とした火山灰分析(組成分析)の結果,火山ガラスの粒子数が少ない(11/3000粒子)ことから,主に火山砕屑物からなるものではなく,火山ガラスが混在する砂礫に区分される。
- ・神恵内M-3ボーリングにおいて,扇状地性堆積物及び崖錐堆積物の上面付近に,支笏第1降下軽石(Spfa-1)に対比される火山ガラスが混在する状況が認められることから(P358参照),同じく支笏第1降下軽石(Spfa-1)に対比される火山ガラスが混在するものと考えられる。

【深度16.05～17.40m(標高25.69～24.34m):礫混じり有機質土混じりシルト】

- ・R3.10.14審査会合以前に実施した火山灰分析(組成分析及び屈折率測定)の結果,火山ガラスの屈折率の頻度分布の範囲が町田・新井(2011)に示される洞爺火山灰(Toya)と調和的であることから,火山ガラスの粒子数が急増する箇所に洞爺火山灰(Toya)の降灰層準が認められる(P406参照)。
- ・当該堆積物については,基質部分に洞爺火山灰(Toya)の火山ガラスが認められるものの,火山ガラスの粒子数は少なく(80～162/3000粒子,P406参照),明瞭な火山灰を含む地層として認められないことから,火山ガラスが混在する礫混じり有機質土混じりシルトに区分される。
- ・柱状図に記載がなされている“軽石片”は,近接する神恵内M-2ボーリングの洞爺火山灰(Toya)の降灰層準に相当すると評価した堆積物中に同じく記載がなされている“軽石片”に対比されるものであり(P358参照),当該粒子は,岩片であると考えられる。

【深度19.35～19.65m(標高22.39～22.09m):火山灰質シルト混じり砂礫】

【深度19.65～20.00m(標高22.09～21.74m):礫混じり火山灰質シルト】

- ・R3.10.14審査会合以前に実施した火山灰分析(組成分析)の結果,火山ガラスはほとんど含まれない(1/3000粒子以下)ことから,シルト混じり砂礫及び礫混じりシルトに区分される。

1.4 【敷地近傍(Ⅲ)】積丹半島西岸における洞爺火砕流堆積物の有無に関する検討

④-7 古宇川右岸地点(神恵内H-2ボーリング)(3/5)

再掲(R5/1/20審査会合)

孔口標高:41.74m



コア写真(深度0~15m)(2010年4月撮影)

神恵内H-2 孔口標高 41.74m 掘進長 24.00m

標尺	標高	深度	柱状	地質	色調	記
(m)	(m)	(m)	図	名	調	事
	41.44	0.30		硬質シルト	暗褐色	径3cm以下の礫が10~20%程度混じる。礫形:歪角~角礫。
1	40.64	1.10		シルト質砂礫	暗灰色	凝土。基質はシルト質の細砂~粗砂。礫径:3cm以下主体(最大径6cm)。礫形:歪角~角礫。礫率:50~60%程度。
2	39.74	2.00		硬質シルト	暗灰色	シルトは有機質で、砂分混じる。混入礫径:2cm以下主体。礫形:歪角~歪角礫。礫率:20~30%程度。礫種:安山岩、デイスイト、1.85~1.90m:炭化物混じる。
3				硬質砂泥	暗褐色	シルトは中砂~粗砂混じる。混入礫径:10cm以下主体(最大径15cm)。礫形:円~歪角礫。礫率:50%前後。
4				シルト	暗灰色	礫種:安山岩主体。デイスイト、シルト岩礫少量混じる。4.60~5.60m:礫混入率やや高い。
5	36.14	5.60		硬質シルト	暗褐色	シルトは有機質で、砂分混じる。混入礫径:1cm主体(最大径10cm)。礫形:歪角~角礫。礫率:20~30%程度。礫種:安山岩主体。
6	35.69	6.05		砂	暗褐色	火山灰質粗砂で、シルト分混じり不均質。径0.5cm以下細礫混じる。
7	34.24	7.50		シルト質砂礫	暗褐色	基質はシルト混じり粗砂。礫径:4cm以下主体(最大径9cm)。礫形:円~歪角礫。礫率:60~70%程度。礫種:安山岩主体。
8	34.00	7.65		硬質シルト	暗褐色	シルトは有機質で、やや均質。径4cm以下の礫が20~30%程度混じる。礫形:歪角礫。しばしば、炭化物混じる。
9	33.80	7.85		砂礫	暗褐色	基質は中砂~粗砂。礫径:1cm以下主体(最大径9cm)。礫形:歪角礫。礫率:20~30%程度。礫種:安山岩主体。7.65m:厚さ3cmの火山灰細砂が挟みこまれている。
10				シルト質砂礫	暗褐色	基質はシルトで、やや均質。礫径:8cm以下主体(最大径12cm)。礫形:円~角礫。礫率:70~80%程度。礫種:安山岩主体。デイスイト、凝灰角礫岩の礫(ハイアロクラストイト種)少量混じる。
11	30.44	11.30		硬質シルト	暗褐色	シルトは有機質で、粗砂混じる。径1cm以下(最大径3cm)の礫が少量混じる。しばしば、炭化木片混じる。
12	29.94	11.80		シルト質砂礫	暗褐色	11.40~11.50m:礫少なく、やや均質な有機質シルトが挟みこまれている。
13	29.44	12.30		砂	暗褐色	基質には、粗砂混じりシルトが混じる。礫径:4cm以下主体(最大径5cm)。礫形:歪角~歪角礫。礫率:70~80%程度。礫種:安山岩主体。
14	27.54	14.20		シルト質砂礫	暗褐色	基質はシルト質粗砂。礫径:5cm以下主体(最大径20cm)。礫形:円~歪角礫。礫率:60~70%程度。礫種:安山岩主体。12.40~13.20m:基質は粗砂。
15	27.14	14.60		硬質シルト	暗褐色	粗砂、細砂混じるシルトで、有機質土混じり。径0.5cmの細礫混じる。14.22m、14.38m:厚さ1cmの有機質シルトが挟みこまれている。

腐状地性堆積物及び凝結堆積物

※柱状図には、“火山灰質”等と記載されているが、R3.10.14審査会合以降に実施した火山灰分析の結果から、主に火山砕屑物からなるものではないと評価した。

柱状図(深度0~15m)

1.4 【敷地近傍(Ⅲ)】積丹半島西岸における洞爺火砕流堆積物の有無に関する検討

④-7 古宇川右岸地点(神恵内H-2ボーリング)(4/5)

一部修正 (R5/1/20審査会合)

孔口標高:41.74m



コア写真(深度15~24m)(2010年4月撮影)

神恵内H-2 孔口標高 41.74m 掘進長 24.00m

標尺	標高 (m)	深度 (m)	柱状図	地質	色調	記 事
16	25.69	16.05	シルト質砂礫	暗緑 褐 灰	基質は粗砂混じりシルト。礫径:3cm以下主体(最大径7cm)。礫形:垂円~角礫。礫率:70~80%程度。礫種:安山岩主体。15.05m、15.85m:木片混じる。	
17	24.34	17.40	硬直じり有機質土混じりシルト	黒 灰	有機質土混じりのシルト。粗砂混じる。混入礫径:3cm以下主体(最大径5cm)。礫形:垂円~角礫。礫率:20~30%程度。礫種:安山岩主体、テイスライト、軽石片混じる。16.50~17.20m:砂分やや多く、有機質土分少ない。	
18			シルト混じり砂礫	暗 灰 暗 緑 灰	基質はシルト混じり粗砂。固結度やや良好。礫径:8cm以下主体(最大径20cm)。礫形:円~垂角礫。礫率:70~80%程度。礫種:安山岩主体。	
19	22.39 22.09	19.35 19.65	火山灰混じりシルト	暗 緑 灰	基質は火山灰シルト混じりの中砂~粗砂。固結度良好。礫径:3cm以下主体。礫形:角礫。礫率:70~80%程度。礫種:安山岩主体。	
20	21.74	20.00	硬直じり火山灰質シルト	黄 褐 灰	シルトは細粒火山灰質。固結度良好。径1cm以下の安山岩礫が少量混じる。	
21	20.54	21.20	砂礫	暗 緑 灰 砂 礫	基質はシルト混じり粗砂。礫径:3cm以下主体(最大径16cm)。礫形:円~垂円。礫率:70~80%。礫種:安山岩主体。固結度やや良好。	
22			砂岩	暗 灰	軽石混じり粗粒砂岩。傾斜10°~20°のラミナ分布。固結度はやや良好で、指圧ではつぶれないが、カッターで削れる。割れ目少なく棒状コア主体。	
23	18.74	23.00				
24	17.74	24.00	凝灰質泥岩	黄 褐 灰	固結度はやや良好で、指圧ではつぶれないが、カッターで削れる。割れ目少なく棒状コア主体。	

柱状図(深度15~24m)

※1 柱状図には、“軽石片”と記載されているが、R3.10.14審査会合以降に実施した近接ボーリング(神恵内M-2ボーリング)との対比から、軽石ではないと評価した。

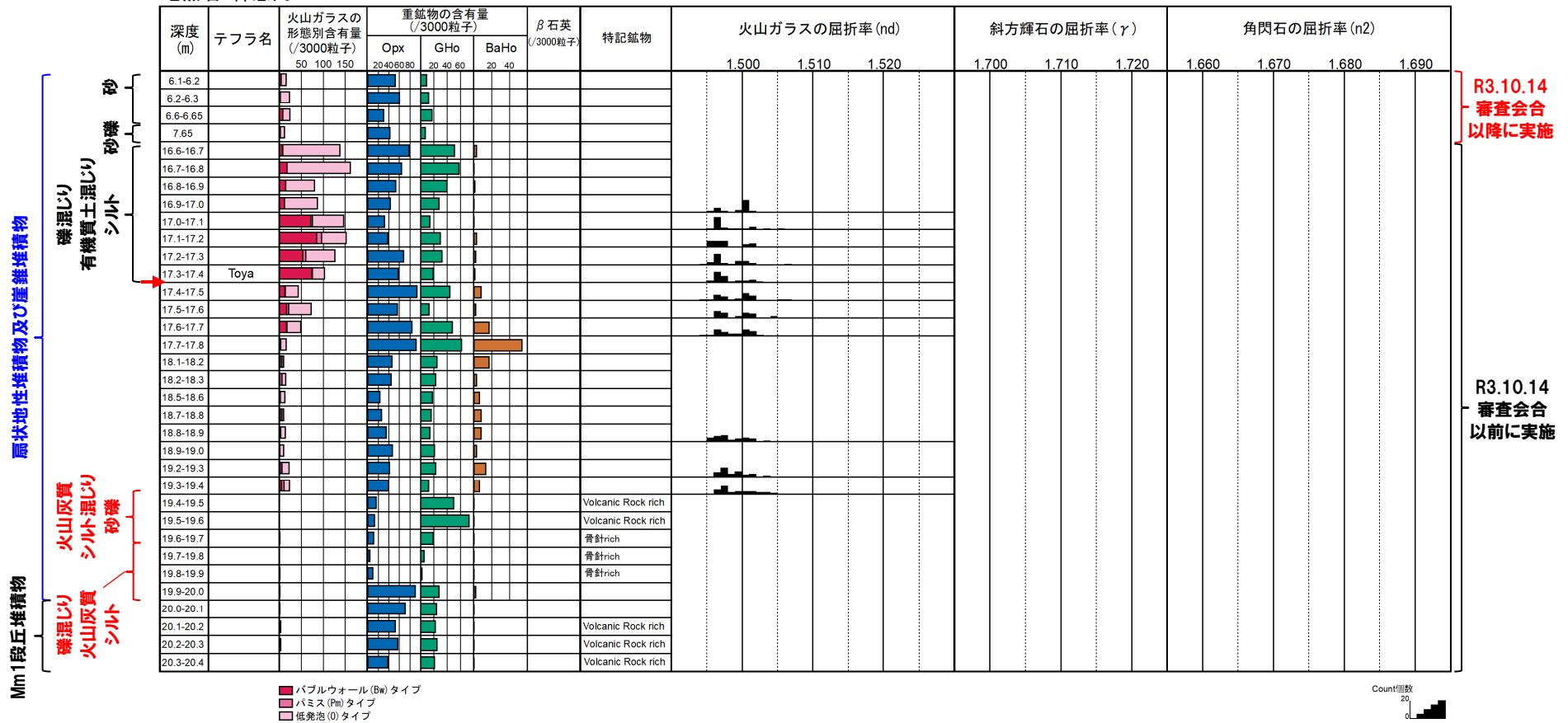
※2 柱状図には、“火山灰質”等と記載されているが、R3.10.14審査会合以前に実施した火山灰分析の結果から、主に火山砕屑物からなるものではないと評価した。

1.4 【敷地近傍(Ⅲ)】積丹半島西岸における洞爺火砕流堆積物の有無に関する検討

④-7 古宇川右岸地点(神恵内H-2ボーリング)(5/5)

再掲(R5/1/20審査会合)

地点名:神恵内H-2



→ : 洞爺火山灰 (Toya) の降灰層準

火山灰分析結果 (深度6.1~6.65m, 7.65m, 16.6~20.4m)

(参考) 洞爺火山灰 (Toya) の屈折率 (町田・新井, 2011より)

略号	特徴	火山ガラス	斜方輝石	角閃石
Toya	バブルウォールタイプ・バミスタタイプの火山ガラス主体	1.494-1.498	1.711-1.761 (1.758-1.761, 1.712-1.729 bimodal)	1.674-1.684

1.4 【敷地近傍(Ⅲ)】積丹半島西岸における洞爺火砕流堆積物の有無に関する検討

④-8 古宇川右岸地点(古宇川右岸-2ボーリング)(1/5)

一部修正(R5/1/20審査会合)

○古宇川右岸-2ボーリングにおいては、柱状図に“火山灰”の記載がなされている堆積物が、以下のとおり認められる。

深度(m)	標高(m)	層相	柱状図記事(抜粋)
1.73~16.05	53.28~38.96	シルト質砂礫	○8.6~9.4m:基質中に火山灰混入。

○本ボーリングにおける上記の堆積物については、火山灰分析の結果に基づき、地層区分を明確にした。



【深度1.73~16.05m(標高53.28~38.96m):シルト質砂礫】

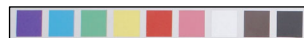
・深度8.60~9.40mを対象とした火山灰分析(組成分析,屈折率測定及び主成分分析)の結果,支笏第1降下軽石(Spfa-1)及び洞爺火山灰(Toya)に対比される火山ガラスが認められるものの,火山ガラスの粒子数が少ない(26/3000粒子)ことから,主に火山碎屑物からなるものではなく,火山ガラスが混在するシルト質砂礫に区分される。

1.4 【敷地近傍(Ⅲ)】積丹半島西岸における洞爺火砕流堆積物の有無に関する検討

④-8 古宇川右岸地点(古宇川右岸-2ボーリング)(2/5)

再掲(R5/1/20審査会合)

孔口標高:55.01m



コア写真(深度0~15m)(2010年11月撮影)

古宇川右岸-2 孔口標高 55.01m 掘進長 25.00m

標尺	標高	深度	柱状	地質	色調	記
(m)	(m)	(m)	図	名	調	事
54.71	0.30		[Symbol]	表土	黒褐色	表土。植物根混入。0.1m植物根混入。基質には、砂質シルトが混じる。0.6~1.1mで植物根混じる。硬率:70~90%。粒径:10~100mm主体、最大300mm。線形:角~歪角線。0.3~0.5m:0.8~1.1m:安山岩塊。総硬散在。
53.81	1.20	有機質シルト		黒褐色		
53.76	1.31	凝結り砂礫		黒褐色		
53.59	1.52		[Symbol]	砂質シルト	明褐色	総硬散在。
			[Symbol]	シルト質砂礫	黄褐色	基質はシルト質砂。硬率:50%程度。粒径:60mm以下主体。線形:歪円~歪角線。線種:安山岩。
			[Symbol]	凝結りシルト質砂	灰褐色	シルト質の砂でラミナが発達している。
			[Symbol]	シルト質砂礫	黄褐色	基質は中粒~粗粒のシルト質砂~砂。下位に向かって基質優勢となる。1.73~13.90m:硬率:60~70%。粒径:80mm以下主体で100~200mmの線点在。最大1.400mm。線形:歪円~角線。下位に向かって角線優勢。線種:安山岩主体。
			[Symbol]	シルト質砂礫	黄褐色	8.6~9.4m:基質中に火山灰混入。*
			[Symbol]	シルト質砂礫	黄褐色	11.5~12.9m:安山岩塊。
			[Symbol]	シルト質砂礫	黄褐色	12.9~15.05m:細礫多く混じる。
			[Symbol]	シルト質砂礫	黄褐色	13.90~16.05m:基質:明黄褐色。硬率:30~40%。

扇状地性堆積物及び崖堆積物

※柱状図には、“火山灰”と記載されているが、R3.10.14審査会合以降に実施した火山灰分析の結果から、主に火山砕屑物からなるものではないと評価した。

柱状図(深度0~15m)

1.4 【敷地近傍(Ⅲ)】積丹半島西岸における洞爺火砕流堆積物の有無に関する検討

④-8 古宇川右岸地点(古宇川右岸-2ボーリング)(3/5)

再掲(R5/1/20審査会合)

孔口標高:55.01m



コア写真(深度15~25m)(2010年11月撮影)

古宇川右岸-2 孔口標高 55.01m 掘進長 25.00m

標尺	標高	深度	柱状	地質	色調	記
(m)	(m)	(m)	図	名	調	事
16	38.96 38.81	16.05 16.20		シルト質砂礫 黄褐色 灰褐色		シルト混じりの中粒~粗粒砂で、砂礫混じる。
17						基質はシルト分多く混じる中粒~粗粒砂。 礫径:20~30mm主体、最大300mm。 礫形:亜円~角礫。 礫核:安山岩主体 16.2~17.9m:礫率:60~70%。 16.2~17.6m:基質は暗褐色。 17.15~17.5m:安山岩礫。 17.6~17.9m:安山岩礫。
18						17.9~19.7m:混入礫径20~30mm主体で、細礫優勢。 17.95~18.9m:礫率:30~40%。
19						18.9~21.5m:礫率:60~70%。
20						19.7~21.5m:礫径:80mmが主体。 20.4~20.6m:安山岩礫。 20.12~20.2m:シルト混じりの粗粒砂。
21	33.51	21.50				20.8~20.9m:表面風化した角礫点在。
22	32.37	22.64		砂互層 凝灰岩 凝灰質砂岩	黄褐色 灰褐色 暗灰	地層境界の傾斜44° 21.5~21.8m:含礫粗粒砂岩、混入礫は10~40mmの亜円礫。 地質境界の傾斜26° 21.9~22.64m:黄灰~黒灰の泥岩。 ラミナの傾斜16°。
23						
24						0~30cmの棒状コアを呈する。 岩片はカッターで割れる。
25	30.01	25.00				

柱状図(深度15~25m)

1.4 【敷地近傍(Ⅲ)】積丹半島西岸における洞爺火砕流堆積物の有無に関する検討

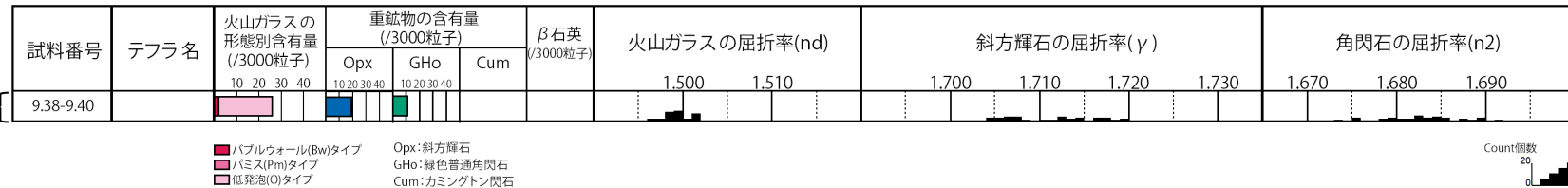
④-8 古宇川右岸地点(古宇川右岸-2ボーリング)(4/5)

再掲(R5/1/20審査会合)

地点名:古宇川右岸-2

扇状地性堆積物
及び崖線堆積物

シルト質砂礫



R3.10.14
審査会合
以降に実施

火山灰分析結果(深度9.38~9.40m)

(参考) 洞爺火山灰(Toya)の屈折率(町田・新井, 2011より)

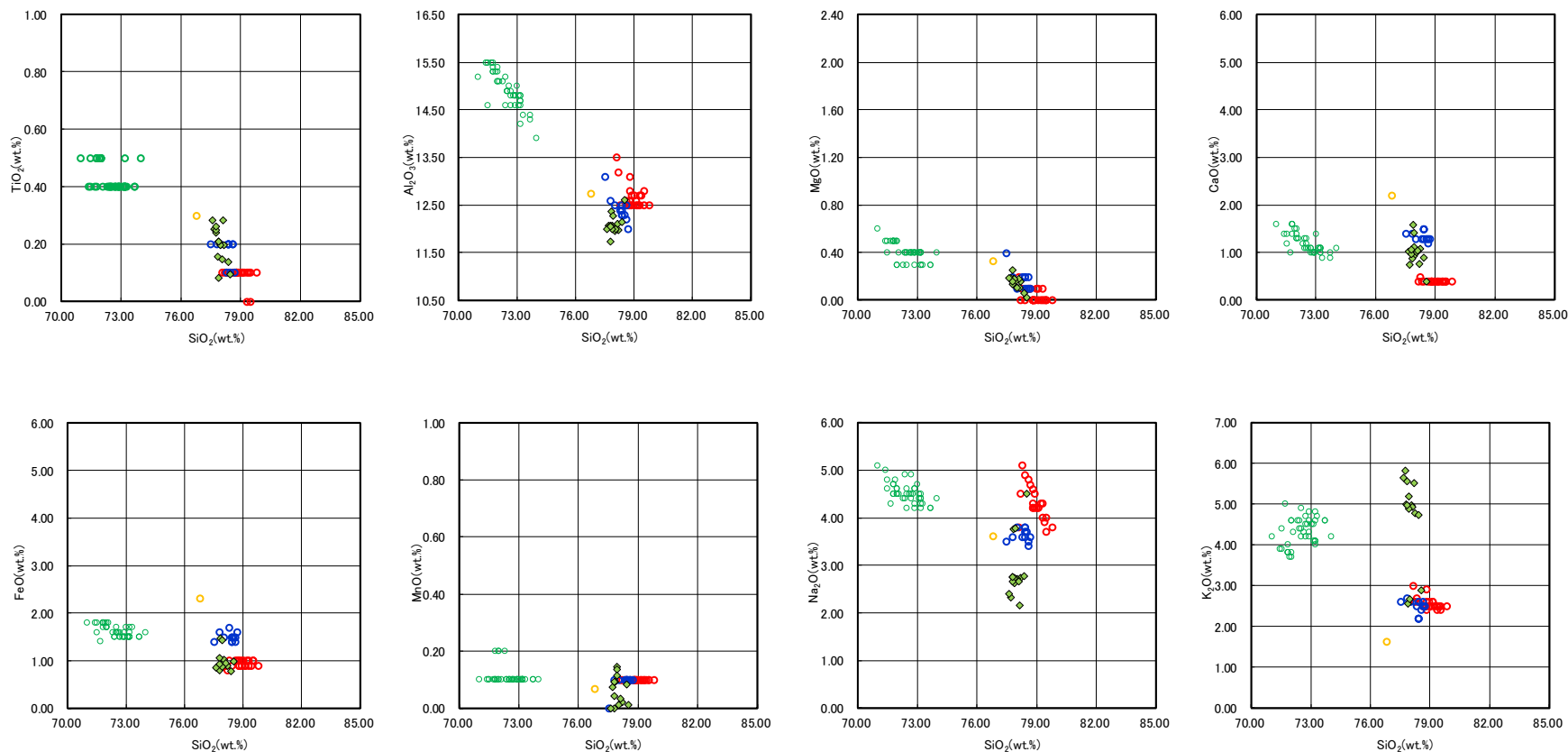
略号	特徴	火山ガラス	斜方輝石	角閃石
Toya	バブルウォールタイプ・バミスタイプの火山ガラス主体	1.494-1.498	1.711-1.761 (1.758-1.761, 1.712-1.729 bimodal)	1.674-1.684

(参考) Spfl及びSpfa-1の屈折率(町田・新井, 2011より)

略号	特徴	火山ガラス	斜方輝石	角閃石
Spfl	バブルウォールタイプ・バミスタイプの火山ガラス主体	1.500-1.503	1.730-1.733	1.688-1.691
Spfa-1	バミスタイプの火山ガラス主体	1.501-1.505 (1.502-1.503)	1.729-1.735	1.688-1.691

④-8 古宇川右岸地点(古宇川右岸-2ボーリング)(5/5)

再掲(R5/1/20審査会合)



◆ 右岸-2(9.38-9.4) ○ Spfa-1(Spfa)(※1) ● Kt-2(※2)
 ○ Aso-4(Aso-4(pfl))(※1) ● Toya(※1)

※1 町田・新井(2011), ※2 青木・町田(2006)

火山ガラスの主元素組成(ハーカー図)(古宇川右岸-2)
 (R3.10.14審査会合以降に実施)

余白

1.4 【敷地近傍(Ⅲ)】積丹半島西岸における洞爺火砕流堆積物の有無に関する検討

④-9 古宇川右岸地点(古宇川右岸-3ボーリング)(1/4)

一部修正(R5/1/20審査会合)

○古宇川右岸-3ボーリングにおいては、柱状図に“火山灰質”等の記載がなされている堆積物が、以下のとおり認められる。

深度(m)	標高(m)	層相	柱状図記事(抜粋)
18.90~21.00	32.54~30.44	砂礫	○基質が火山灰質砂。 ○20.64~20.85m:基質優勢で細粒火山灰含む。
21.00~25.23	30.44~26.21	砂礫	○21.90~21.95m:黄褐の火山灰質砂,礫率:60~70%。

○本ボーリングにおける上記の堆積物については、火山灰分析の結果に基づき、地層区分を明確にした。



【深度18.90~21.00m(標高32.54~30.44m):砂礫】

- ・深度20.64~20.85mを対象とした火山灰分析(組成分析及び屈折率測定)の結果、火山ガラスの粒子数が少ない(53/3000粒子)ことから、主に火山砕屑物からなるものではなく、火山ガラスが混在する砂礫に区分される。

【深度21.00~25.23m(標高30.44~26.21m):砂礫】

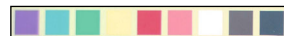
- ・深度21.90~21.95mを対象とした火山灰分析(組成分析及び屈折率測定)の結果、火山ガラスの粒子数が少ない(19/3000粒子)ことから、主に火山砕屑物からなるものではなく、火山ガラスが混在する砂礫に区分される。

1.4 【敷地近傍(Ⅲ)】積丹半島西岸における洞爺火砕流堆積物の有無に関する検討

④-9 古宇川右岸地点(古宇川右岸-3ボーリング)(2/4)

一部修正(H26/1/24審査会合)

孔口標高:51.44m



コア写真(深度0~15m)(2010年11月撮影)

古宇川右岸-3 孔口標高 51.44m 掘進長 30.00m

標尺	標高(m)	深度(m)	柱状図	地質名	地色調	記	
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15	50.91	0.53	[Pattern: Small circles]	礫混じり砂質シルト	暗褐色	礫土、20~30mmの角礫10~20%混じる。	
	50.88	0.56		砂質シルト	暗褐色	旧礫土。	
	50.44	1.00		砂質シルト	暗褐色	有機質混じりの砂質シルト。塊状存在。	
	50.32	1.12		礫混じりシルト質砂	暗褐色	シルト分が多い中粒~粗粒砂主体、20mm程度の角礫混入。	
	49.84	1.60		シルト混じり砂礫	暗褐色	基質はシルト混じり中粒~粗粒砂。礫率:50~60%。礫径:80mm主体。礫形:円~角礫。	
					砂礫	黄褐色	1.60~1.80m:安山岩の角礫。 基質はシルト質の中粒~粗粒砂。礫率:70~80%。 礫径:10~80mm主体、最大80mm。礫形:亜円礫主体。 礫径:安山岩礫主体で一部黄褐色も混在する。
	43.94	7.50			砂	黄褐色	粗粒砂。
	43.89	7.55			砂礫	暗褐色	基質は砂~砂質シルト。砂は中粒~粗粒砂。礫率:60~70%。 礫径:10~80mm主体、最大140mm。 礫形:亜円~亜角礫。 礫径:安山岩礫主体。
	41.54	9.90			砂質シルト	黄褐色	9.90~9.95m:淘汰のよい中粒砂。 9.95~10.00m:塊状混入する砂質シルト。
	41.48	10.00			シルト質砂礫	暗褐色	シルト分が多い中粒~粗粒砂。礫率:80%以上。 礫径:10~80mmが主体で100~200mmが点在する。最大500mm。 礫径:安山岩礫主体。一部亜円礫混じる。 10.0m:表面風化した安山岩礫。
					シルト質砂礫	暗褐色	

扇状地性堆積物及び崖線堆積物

柱状図(深度0~15m)

1.4 【敷地近傍(Ⅲ)】積丹半島西岸における洞爺火砕流堆積物の有無に関する検討

④-9 古宇川右岸地点(古宇川右岸-3ボーリング)(3/4)

一部修正(H26/1/24審査会合)

孔口標高:51.44m



コア写真(深度15~30m)(2010年11月撮影)

古宇川右岸-3 孔口標高 51.44m 掘進長 30.00m

標尺	標高	深度	柱状図	地質	色調	記
(m)	(m)	(m)	図	名	調	事
16			[Symbol]	シルト質砂礫	暗褐	15.70~18.10m:100mm以上の礫混入少ない。
17				シルト質砂礫	赤褐	基質はシルト質砂~砂。礫率:30%。礫径:40mm主体で最大150mm。礫形:歪円~角礫。礫種:安山岩主体。
18	33.34	18.10	[Symbol]	砂礫	赤褐	基質はシルト質砂~砂で火山灰質。安山岩礫200mm程度が混在。
19	32.54	18.90		砂礫	赤褐	基質が火山灰質砂。*1
20			[Symbol]	砂礫	黄褐~赤褐	20.64~20.85m:基質優勢で細粒火山灰含む。*1 20.85~21.0m:基質が有機質。
21	30.44	21.00		砂礫	黄褐~赤褐	基質は中粒~粗粒砂。礫径:40mmが主体で100mmが混在。最大500mm。礫形:歪角~歪円礫。一部角礫混入。*1 21.90~21.95m:黄褐色の火山灰質砂。礫率:60~70%。*1,2
22			[Symbol]	砂礫	黄褐~赤褐	22.52~22.95m:基質が赤褐色の中粒砂。*3
23				砂礫	黄褐~赤褐	23.40~24.35m:30mm程度の礫主体。礫率:30~40%。
24			[Symbol]	砂礫	黄褐~赤褐	
25	26.21	25.23		砂礫	黄褐~赤褐	細粒~粗粒砂。礫率:50~60%。礫径:40~100mm。25.23~25.30m:褐色のシルト混在。*1,2
26	25.65	25.78	[Symbol]	砂礫	黒灰褐	基質は溜滞のよい粗粒砂。礫径:80mm前後が主体。最大400mm。礫率:50~60%。礫形:歪角~円礫。礫種:安山岩主体。
27				砂礫	黒灰褐	26.80~28.10m:基質が2~5mmの細礫主体。礫率:60~70%。
28	23.28	28.15	[Symbol]	含礫砂岩	黒灰	100~300mm程度の構状コアを呈する。基質は中粒~粗粒砂で岩片は硬い。28.10~28.50m:安山岩の円礫。礫径:100~200mmが主体。最大500mm。礫形:円礫主体。
29				含礫砂岩	黒灰	
30	21.44	30.00	[Symbol]	含礫砂岩	黒灰	

※1 柱状図には、「火山灰質」と記載されているが、R3.10.14審査会合以降に実施した火山灰分析の結果から、主に火山砕屑物からなるものではないと評価した。

※2 従来、本ボーリングに認められる深度21.00~25.23mの砂礫の柱状図記事には、「21.90~21.95m:黄褐色の火山灰質砂。」と記載していたが、誤記であるため、R5.1.20審査会合資料において、「21.90~21.95m:黄褐色の火山灰質砂。」に記載を修正した。

※3 従来、本ボーリングに認められる深度21.00~25.23mの砂礫の柱状図記事には、「22.52~22.95m:基質が赤褐色の中粒砂。」と記載していたが、誤記であるため、R5.1.20審査会合資料において、「22.52~22.95m:基質が赤褐色の中粒砂。」に記載を修正した。

柱状図(深度15~30m)

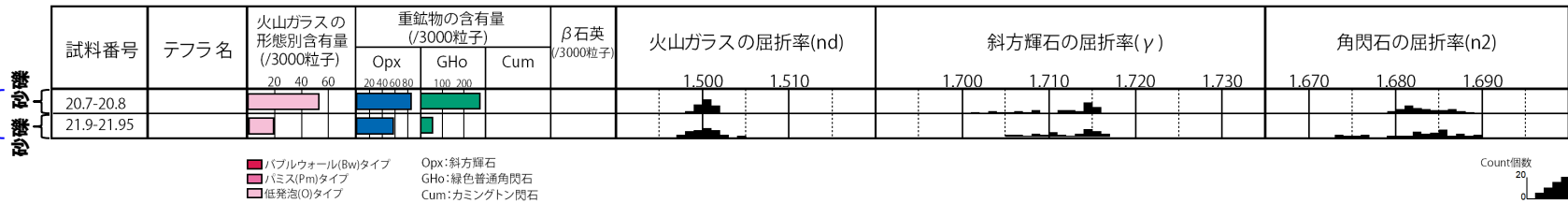
1.4 【敷地近傍(Ⅲ)】積丹半島西岸における洞爺火砕流堆積物の有無に関する検討

④-9 古宇川右岸地点(古宇川右岸-3ボーリング)(4/4)

再掲(R5/1/20審査会合)

地点名:古宇川右岸-3

扇状地性堆積物
及び崖錐堆積物



R3.10.14
審査会合
以降に実施

火山灰分析結果(深度20.7~20.8m, 21.9~21.95m)

(参考)洞爺火山灰(Toya)の屈折率(町田・新井, 2011より)

略号	特徴	火山ガラス	斜方輝石	角閃石
Toya	バブルウォールタイプ・バミスタイプの火山ガラス主体	1.494-1.498	1.711-1.761 (1.758-1.761, 1.712-1.729 bimodal)	1.674-1.684

余白

1. 4 【敷地近傍(Ⅲ)】積丹半島西岸における洞爺火砕流堆積物の有無に関する検討

④-10 古宇川右岸地点(古宇川右岸-4ボーリング)(1/2)

一部修正(R5/1/20審査会合)

- 古宇川右岸-4ボーリングにおいては、柱状図の地質名又は記事に“軽石片”、“火山灰質”等と記載されている堆積物は認められない。
- また、洞爺火山灰(Toya)の降灰層準に相当すると評価した堆積物は認められない。



- 今回検討対象となる堆積物は認められない。

1.4 【敷地近傍(Ⅲ)】積丹半島西岸における洞爺火砕流堆積物の有無に関する検討

④-10 古宇川右岸地点(古宇川右岸-4ボーリング)(2/2)

一部修正 (R5/1/20審査会合)

孔口標高:58.94m



コア写真(深度0~17m)(2010年11月撮影)

古宇川右岸-4 孔口標高 58.94m 掘進長 17.00m

標高	深度	柱状	地質	色調	記
(m)	(m)	図	名	調	事
58.38	0.55	暗褐色シルト	暗褐色シルト	暗褐色	表土、腐土。 0.00~0.05m: 有機質な砂質シルト。 0.08~0.55m: 30mm以下の角礫混じる。 礫率:30~40%。
57.14	1.80	明褐色シルト	明褐色シルト	明褐色	砂分混じる不均質なシルト。 礫率:10~20%。 礫径:30~40mm。 礫形:角~亜角礫。 礫種:風化した安山岩礫。
54.59	4.35	シルト質砂	シルト質砂	灰褐色	シルト質な中粒砂。 礫率:40~50%程度、2.8mから礫率60~70%。 4.0~4.35m: 礫率:10~20%。
48.76	10.18	緑灰色シルト	緑灰色シルト	緑灰色	基質は凝灰質の砂、中粒~粗粒砂、シルトが部分的に挟在する。 礫径:30mm以下主体で80mm点在、最大350mm。 礫形:亜角~角礫。 礫種:安山岩礫主体で一部暗緑色安山岩礫含む。全体に礫種に乏しい。 5.50~7.00m: 30mm以下の礫主体。
47.38	11.56	硬シルト	硬シルト	明黄色	シルト主体。 礫径:最大380mm。 礫種:泥岩、凝灰岩礫主体でシルトと同質の半圓結核礫、安山岩礫を含む。 10.00~11.3m: 安山岩礫。
45.72	13.22	砂	砂	赤褐色	基質は中粒~粗粒砂。 礫率:70~80%。 礫径:5~80mm主体で最大250mm。 礫形:亜角~角礫、一部亜円礫含む。 礫種:安山岩主体で風化した泥岩礫点在。
41.94	17.00	含砂砂岩	含砂砂岩	黒灰	150~400mm程度の棒状コアを産する。 基質は中粒~粗粒砂岩で岩片は硬い。 14.72~15.10m: 安山岩礫。 礫径:50~100mmが主体、最大420mm。 礫形:亜角~角礫主体。 礫種:安山岩礫主体。

柱状図(深度0~17m)

1. 敷地及び敷地近傍の火山噴出物に関する検討	P. 9
1.1 【敷地近傍(Ⅰ)】幌似周辺で実施した地質調査結果	P. 35
1.2 【敷地近傍(Ⅰ)】老古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物) ..	P.116
1.3 【敷地近傍(Ⅱ)】岩内平野西部で実施した地質調査結果	P.168
1.4 【敷地近傍(Ⅲ)】積丹半島西岸における洞爺火砕流堆積物の有無に関する検討	P.222
1.5 【敷地】敷地における火山噴出物の有無に関する検討	P.422
2. ワイスホルム	... P.489
3. 支笏火砕	... P.517
参考文献 P.536

・本章の説明内容

1.5.1 敷地における地質調査結果

 ① 地質調査結果

 ①-1 B地点

 ①-2 C地点(まとめ)

 ①-3 C地点(C-1トレンチ)

 ①-4 C地点(C-2トレンチ)

 ①-5 C地点(C-3トレンチ)

 ② 3号炉調査時のボーリングに認められる堆積物に関する検討結果

 ②-1 3B-4ボーリング

 ②-2 3J-4ボーリング

 ②-3 3H-2ボーリング

 ②-4 3-2ボーリング

1.5.2 1,2号炉調査時, 3号炉調査時及び平成25年度造成工事時露頭に認められる堆積物の解釈

【検討結果】

 ① F-1断層開削調査箇所(a地点)

 ② 3号炉調査時露頭(b~d地点)

 ③ 平成25年度造成工事時露頭(e地点)

 ④ A-10ボーリング

 (参考)開削調査箇所(北側) 北側壁面 写真及びスケッチ

 ⑤ B-10ボーリング

余白

1.5.1 敷地における地質調査結果

① 地質調査結果 (1/3)

一部修正 (R5/1/20審査会合)

- 至近に実施した敷地内断層の活動性評価に関する当社地質調査(以降、「断層調査」と呼ぶ)の結果、敷地においては、支笏第1降下軽石(Spfa-1)、洞爺火山灰(Toya)及び対象火山灰※に対比される火山ガラスが混在する堆積物が認められるが、主に火山砕屑物からなる堆積物若しくは軽石又はスコリアを含む堆積物は認められない。
- 断層調査のうち、敷地の南東側(洞爺火砕流堆積物が確認される共和町幌似付近方向)に存在する丘陵地におけるB地点及びC地点の地質調査結果の詳細を一例としてP425～P459に示す。
- 断層調査においては、主に火山砕屑物からなる堆積物若しくは軽石又はスコリアを含む堆積物は認められないが、3号炉調査時のボーリングにおいて柱状図に“軽石”、“火山灰質”等との記載がなされている堆積物が4つのボーリング(3B-4、3H-2、3J-4及び3-2ボーリング)で確認される。
- これらのボーリングコアは現存することから、R3.10.14審査会合以降、コアの再観察を実施し、“軽石”に対応すると考えられる白色粒子が認められないため、基質を対象とした火山灰分析等を実施しており、その結果についてはP461～P471に示す。

※ニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)に対比される火山灰を「対象火山灰」と呼称している。

1.5.1 敷地における地質調査結果

① 地質調査結果 (2/3)

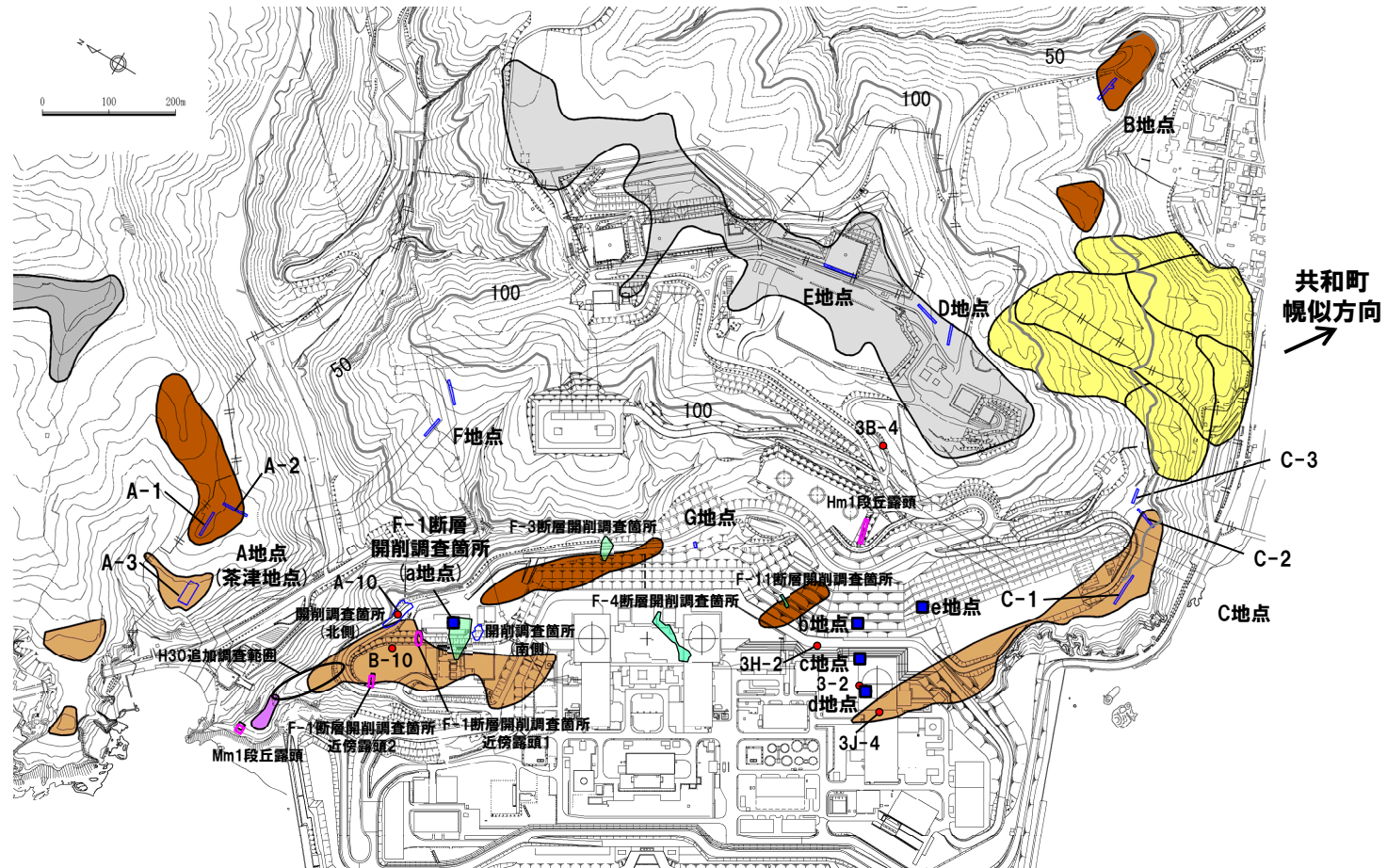
一部修正 (H30/5/11審査会合)

凡例

- Mm1段丘面
- Hm3段丘面
- Hm2段丘面
- Hm1段丘面
- HO段丘面群
- 地すべり地形
- トレンチ箇所
- 断層開削調査箇所
- 露頭調査箇所
- 岩内平野側丘陵地における等高線 (標高50m及び100m)
- 発電所敷地境界線

当図は、変更後の現地形図に、変更前の空中写真を用いて判読した地形分類(段丘面等)を重ねあわせている。

B地点及びC地点以外の敷地の調査地点における地質調査結果の詳細は、R3.7.2審査会合資料「泊発電所3号炉 地盤(敷地の地質・地質構造)に関するコメント回答」及び同補足説明資料、R2.4.16審査会合資料「泊発電所3号炉 地盤(敷地の地質・地質構造)に関するコメント回答(Hm2段丘堆積物の堆積年代に関する検討) 補足説明資料」、H29.12.8審査会合資料「泊発電所3号炉 地盤(敷地の地質・地質構造)に関するコメント回答(Hm2段丘堆積物の堆積年代に関する検討) 資料集」参照。



調査位置図 (変更後の地形)

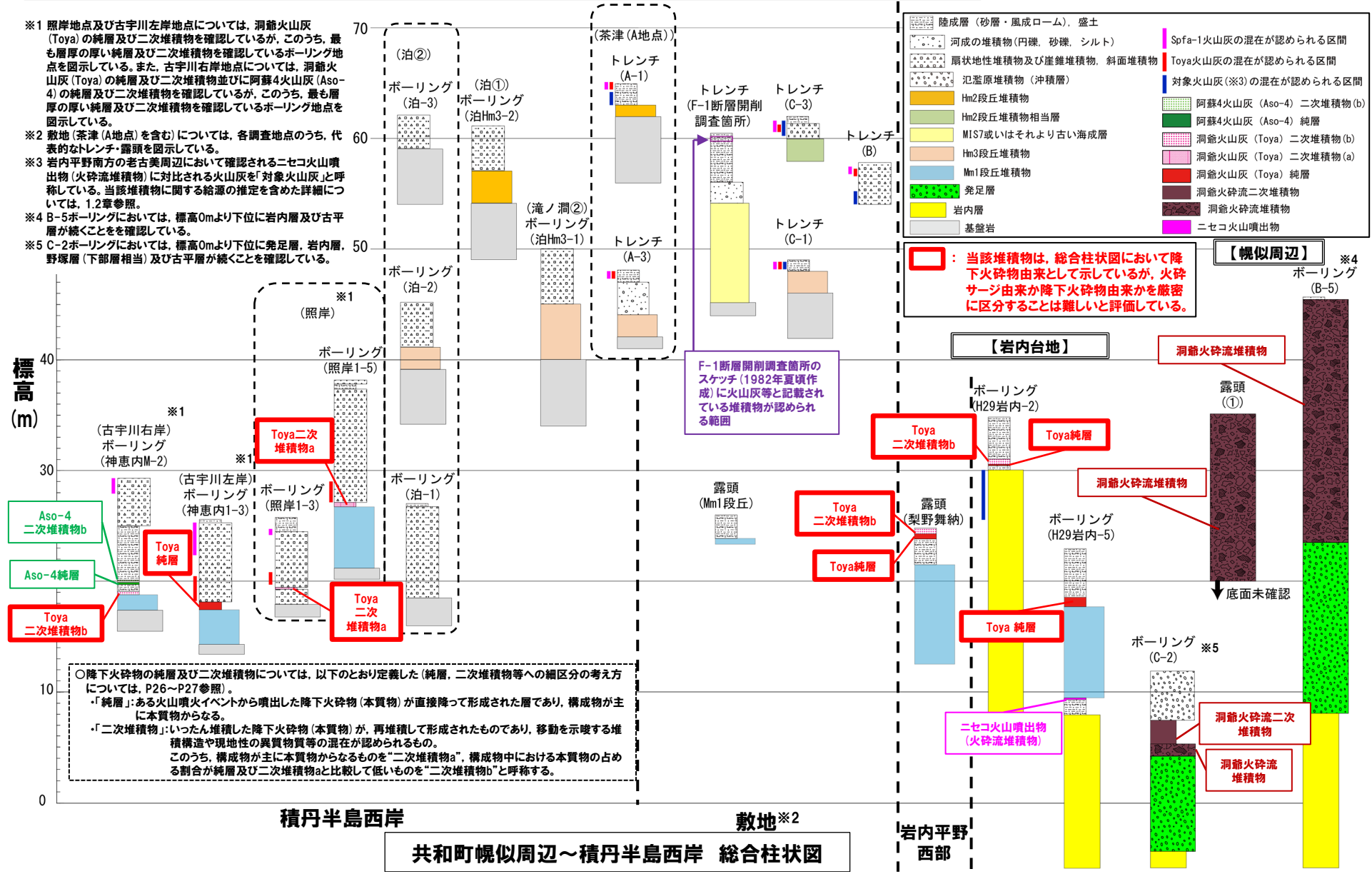
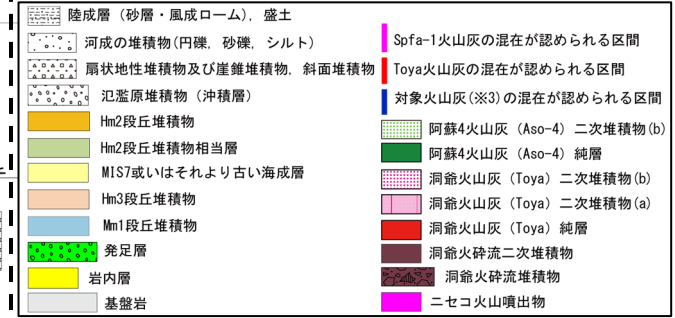
共和町
幌似方向
↑

1.5.1 敷地における地質調査結果

① 地質調査結果 (3/3)

一部修正 (R5/1/20審査会合)

- ※1 照岸地点及び古宇川左岸地点については、洞爺火山灰 (Toya) の純層及び二次堆積物を確認しているが、このうち、最も層厚の厚い純層及び二次堆積物を確認しているボーリング地点を明示している。また、古宇川右岸地点については、洞爺火山灰 (Toya) の純層及び二次堆積物並びに阿蘇4火山灰 (Aso-4) の純層及び二次堆積物を確認しているが、このうち、最も層厚の厚い純層及び二次堆積物を確認しているボーリング地点を明示している。
- ※2 敷地 (茶津 (A地点) を含む) については、各調査地点のうち、代表的なトレンチ・露頭を明示している。
- ※3 岩内平野南方の老古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物 (火砕流堆積物) に対比される火山灰を「対象火山灰」と呼称している。当該堆積物に関する結晶の推定を含めた詳細については、1.2章参照。
- ※4 B-5ボーリングにおいては、標高0mより下位に岩内層及び古平層が連続することを確認している。
- ※5 C-2ボーリングにおいては、標高0mより下位に発足層、岩内層、野塚層 (下部層相当) 及び古平層が連続することを確認している。



共和町幌似周辺～積丹半島西岸 総合柱状図

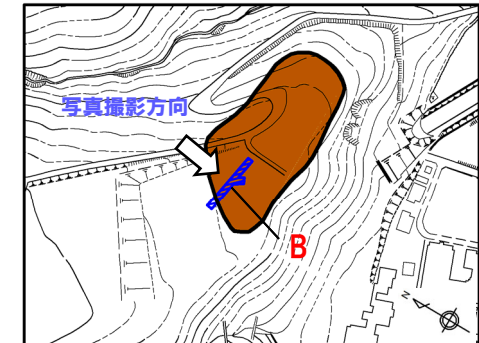
1.5.1 敷地における地質調査結果

①-1 B地点 (1/7)

一部修正 (H29/12/8審査会合)

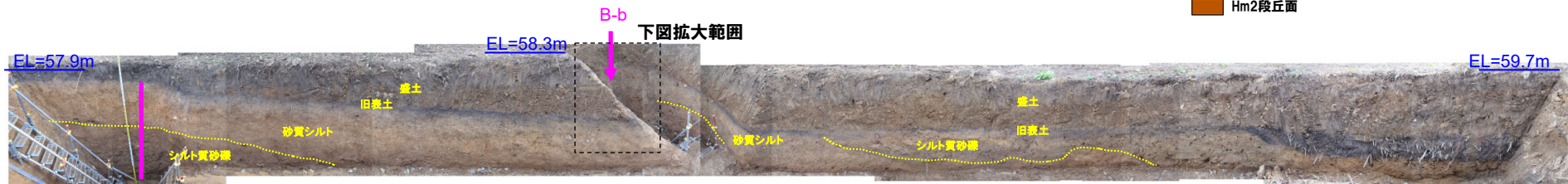
【B地点】

- 下位から、シルト質砂礫層、砂質シルト層及びシルト質砂礫層が認められる。
- 支笏第1降下軽石 (Spfa-1)、洞爺火山灰 (Toya) 及び対象火山灰に対比される火山ガラスが混在する堆積物が認められるが、主に火山碎屑物からなる堆積物若しくは軽石又はスコリアを含む堆積物は認められない。



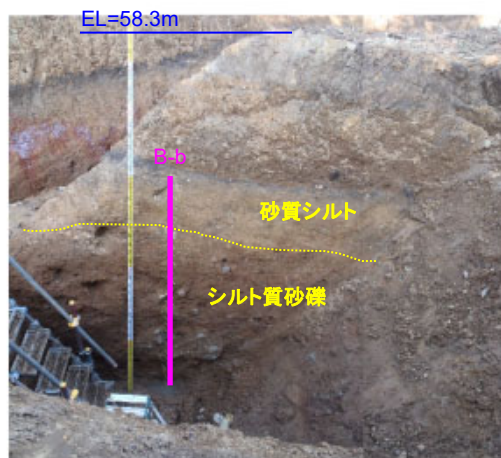
凡例

■ Hm2段丘面



B-a

トレンチ壁面写真 (B地点)



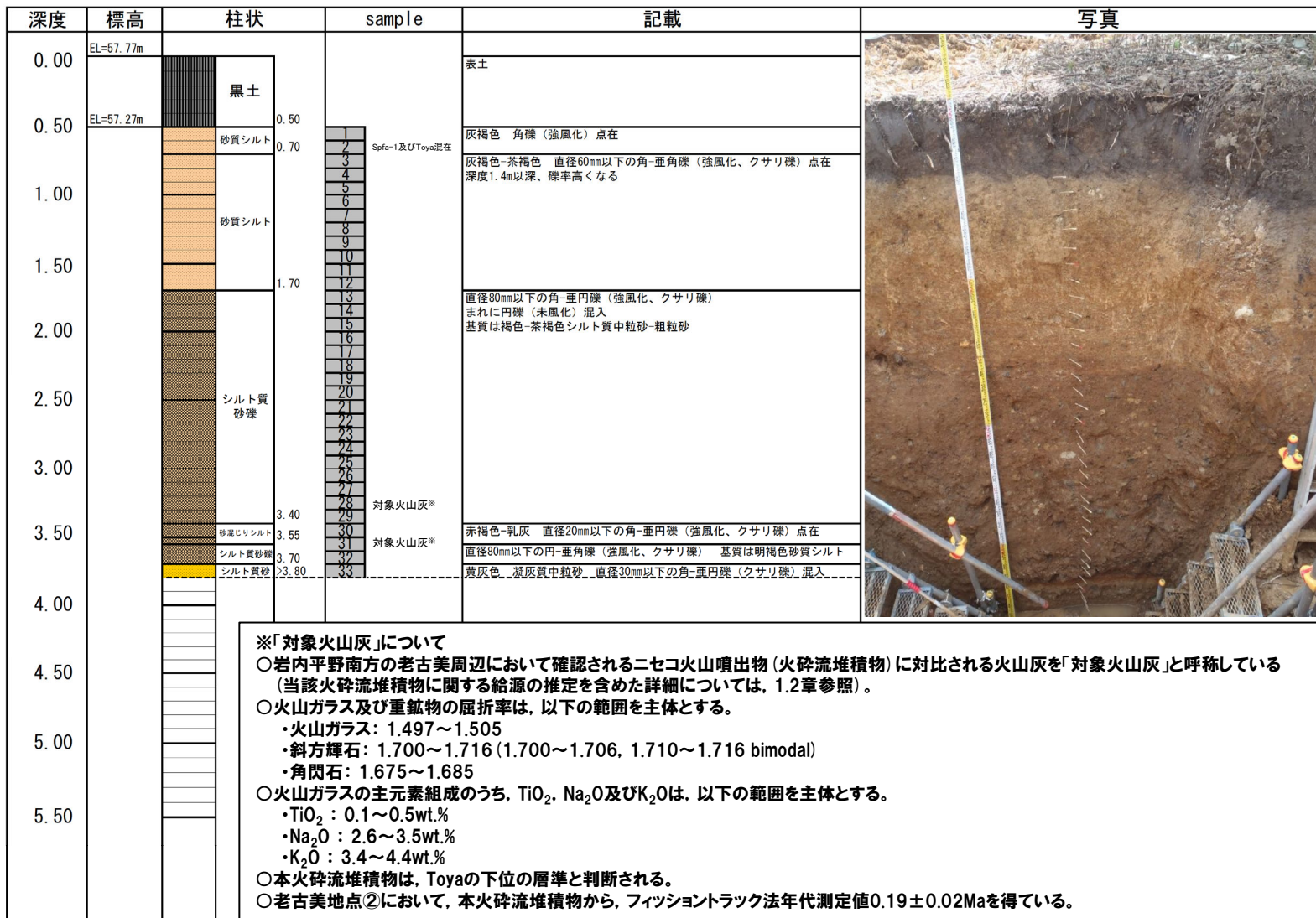
測線B-b付近拡大図

1.5.1 敷地における地質調査結果

①-1 B地点 (2/7)

一部修正 (H29/12/8審査会合)

【露頭柱状図 (B-a)】

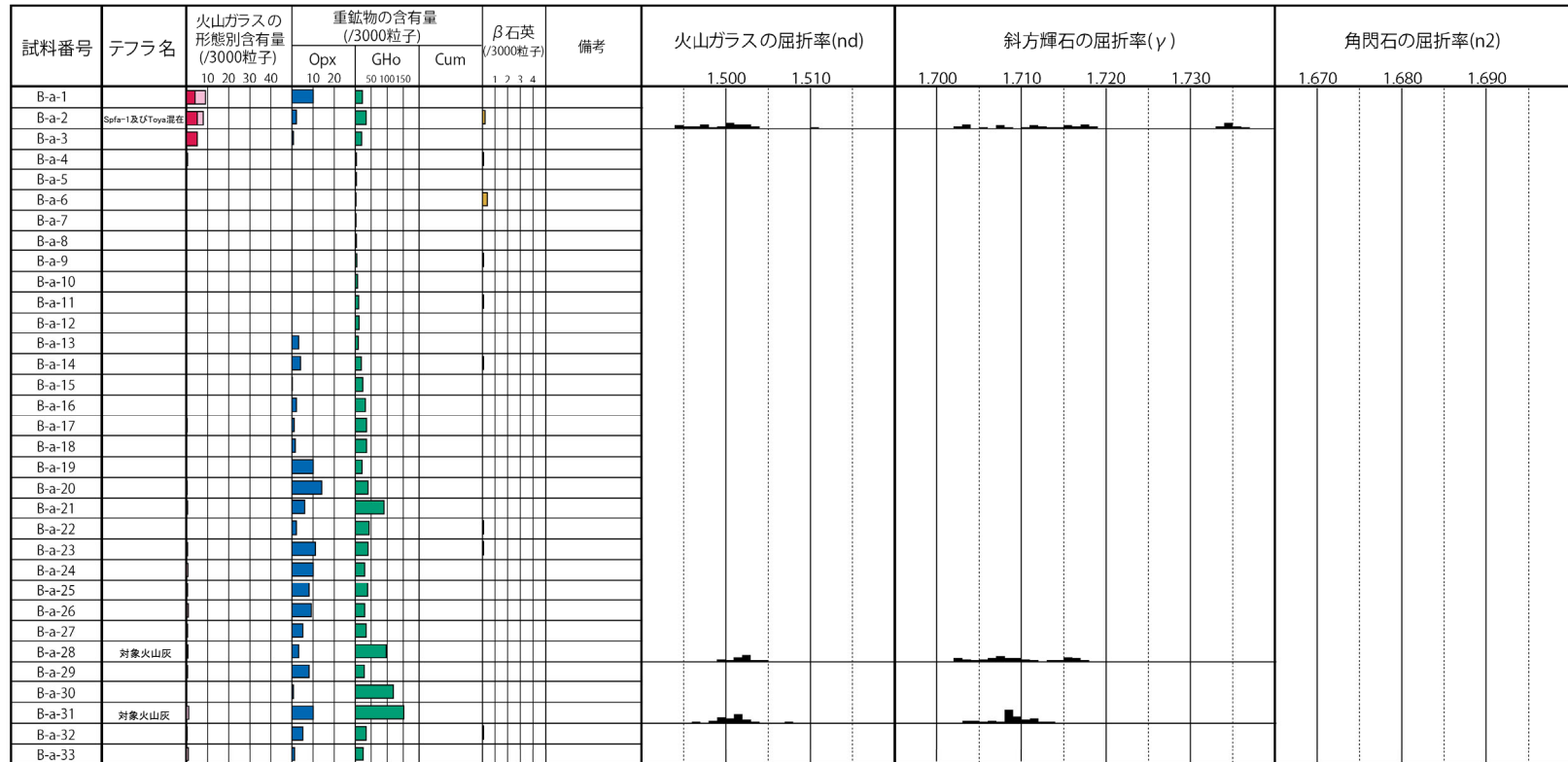


敷地における地質調査の結果、堆積物中に洞爺火山灰 (Toya)、支笏第1降下軽石 (Spfa-1) 及び対象火山灰に対比される火山ガラスが認められるものの、組成分析の結果、これらの火山ガラスの粒子数は少ない。

1.5.1 敷地における地質調査結果

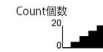
①-1 B地点 (3/7)

一部修正 (H29/12/8審査会合)



■ バブルウォール(Bw)タイプ
■ バミス(Pm)タイプ
■ 低発泡(O)タイプ
■ Opx:斜方輝石
■ GHo:緑色普通角閃石
■ Cum:カミングトン閃石

「火山灰年代値の精度向上」を目的に、H29年に調査を実施したものであり、主に陸上堆積物を対象に、各単層中で火山ガラスが相対的に多く含まれる箇所又は単層の境界部において、屈折率測定及び主成分分析を実施している。



B-a 火山ガラス及び重鉱物分析結果

(参考) Spfl及びSpfa-1の屈折率 (町田・新井, 2011より)

略号	特徴	火山ガラス	斜方輝石	角閃石
Spfl	バブルウォールタイプ・バミスタイプの火山ガラス主体	1.500-1.503	1.730-1.733	1.688-1.691
Spfa-1	バミスタイプの火山ガラス主体	1.501-1.505 (1.502-1.503)	1.729-1.735	1.688-1.691

敷地における地質調査の結果、堆積物中に洞爺火山灰 (Toya)、支笏第1降下軽石 (Spfa-1) 及び対象火山灰に対比される火山ガラスが認められるものの、組成分析の結果、これらの火山ガラスの粒子数は少ない。

(参考) 洞爺火山灰 (Toya) の屈折率 (町田・新井, 2011より)

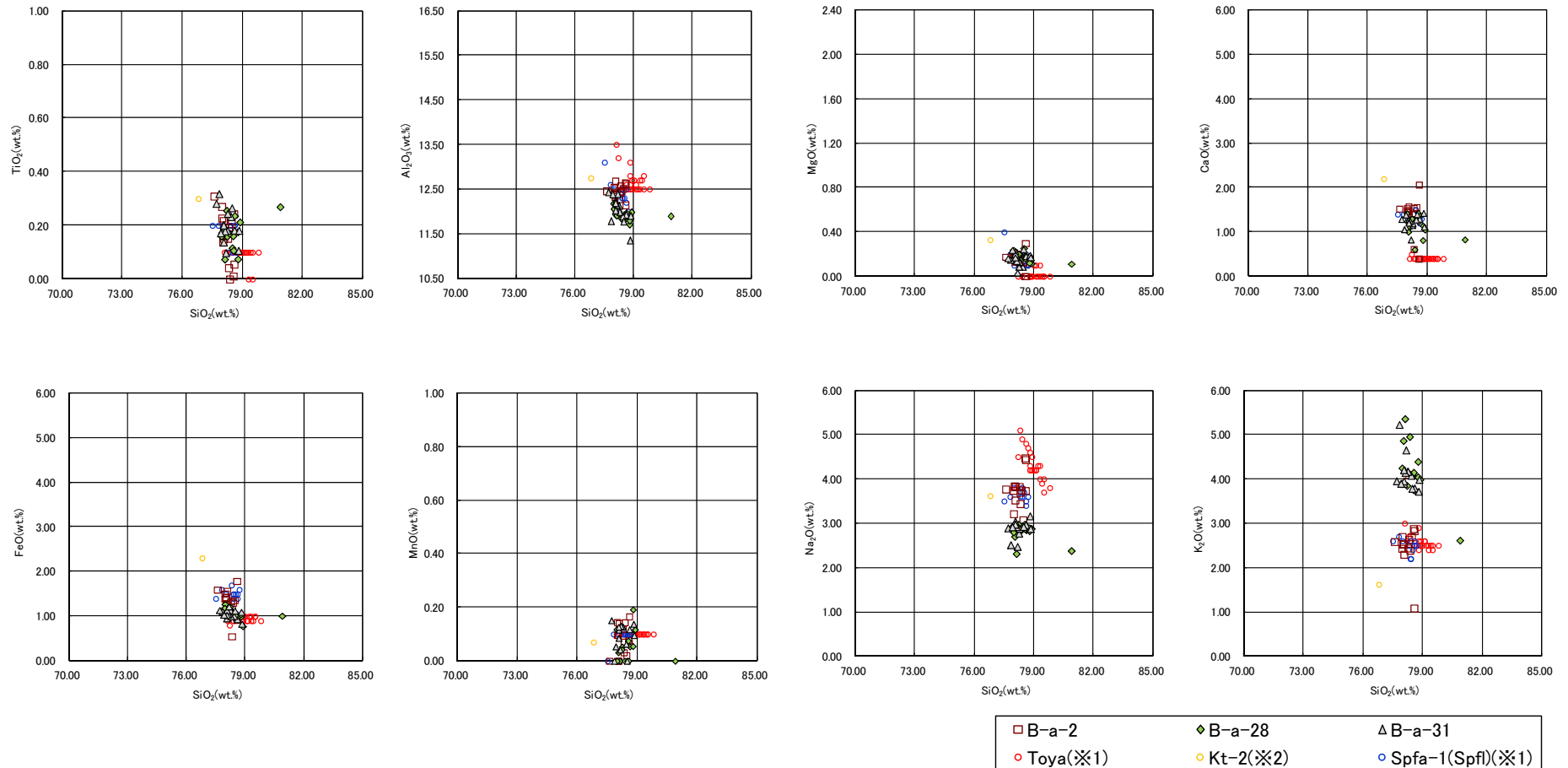
略号	特徴	火山ガラス	斜方輝石	角閃石
Toya	バブルウォールタイプ・バミスタイプの火山ガラス主体	1.494-1.498	1.711-1.761 (1.758-1.761, 1.712-1.729 bimodal)	1.674-1.684

余白

1.5.1 敷地における地質調査結果

①-1 B地点 (4/7)

一部修正 (H29/12/8審査会合)



※1 町田・新井(2011), ※2 青木・町田(2006)

B-a 火山ガラスの主元素組成 (ハーカー図)

敷地における地質調査の結果、堆積物中に洞爺火山灰 (Toya)、支笏第1降下軽石 (Spfa-1) 及び対象火山灰に対比される火山ガラスが認められるものの、組成分析の結果、これらの火山ガラスの粒子数は少ない。

1.5.1 敷地における地質調査結果

①-1 B地点 (5/7)

一部修正 (H29/12/8審査会合)

【露頭柱状図 (B-b)】

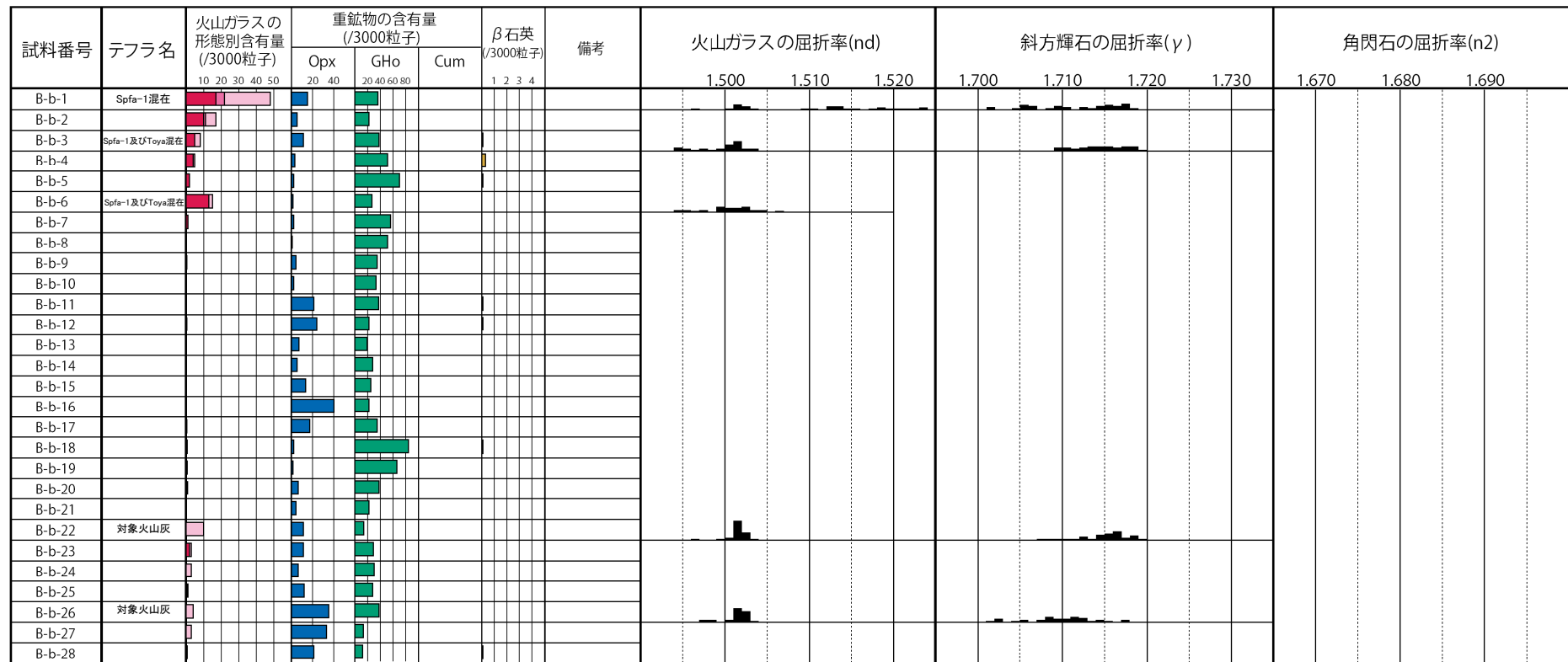


敷地における地質調査の結果、堆積物中に洞爺火山灰 (Toya)、支笏第1降下軽石 (Spfa-1) 及び対象火山灰に対比される火山ガラスが認められるものの、組成分析の結果、これらの火山ガラスの粒子数は少ない。

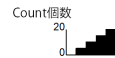
1.5.1 敷地における地質調査結果

①-1 B地点 (6/7)

一部修正 (H29/12/8審査会合)



「火山年代値の精度向上」を目的に、H29年に調査を実施したものであり、主に陸上堆積物を対象に、各単層中で火山ガラスが相対的に多く含まれる箇所又は単層の境界部において、屈折率測定及び主成分分析を実施している。



敷地における地質調査の結果、堆積物中に洞爺火山灰 (Toya), 支笏第1降下軽石 (Spfa-1) 及び対象火山灰に対比される火山ガラスが認められるものの、組成分析の結果、これらの火山ガラスの粒子数は少ない。

B-b 火山ガラス及び重鉱物分析結果

(参考) Spfl及びSpfa-1の屈折率 (町田・新井, 2011より)

略号	特徴	火山ガラス	斜方輝石	角閃石
Spfl	バブルウォールタイプ・バミスタイプの火山ガラス主体	1.500-1.503	1.730-1.733	1.688-1.691
Spfa-1	バミスタイプの火山ガラス主体	1.501-1.505 (1.502-1.503)	1.729-1.735	1.688-1.691

(参考) 洞爺火山灰 (Toya) の屈折率 (町田・新井, 2011より)

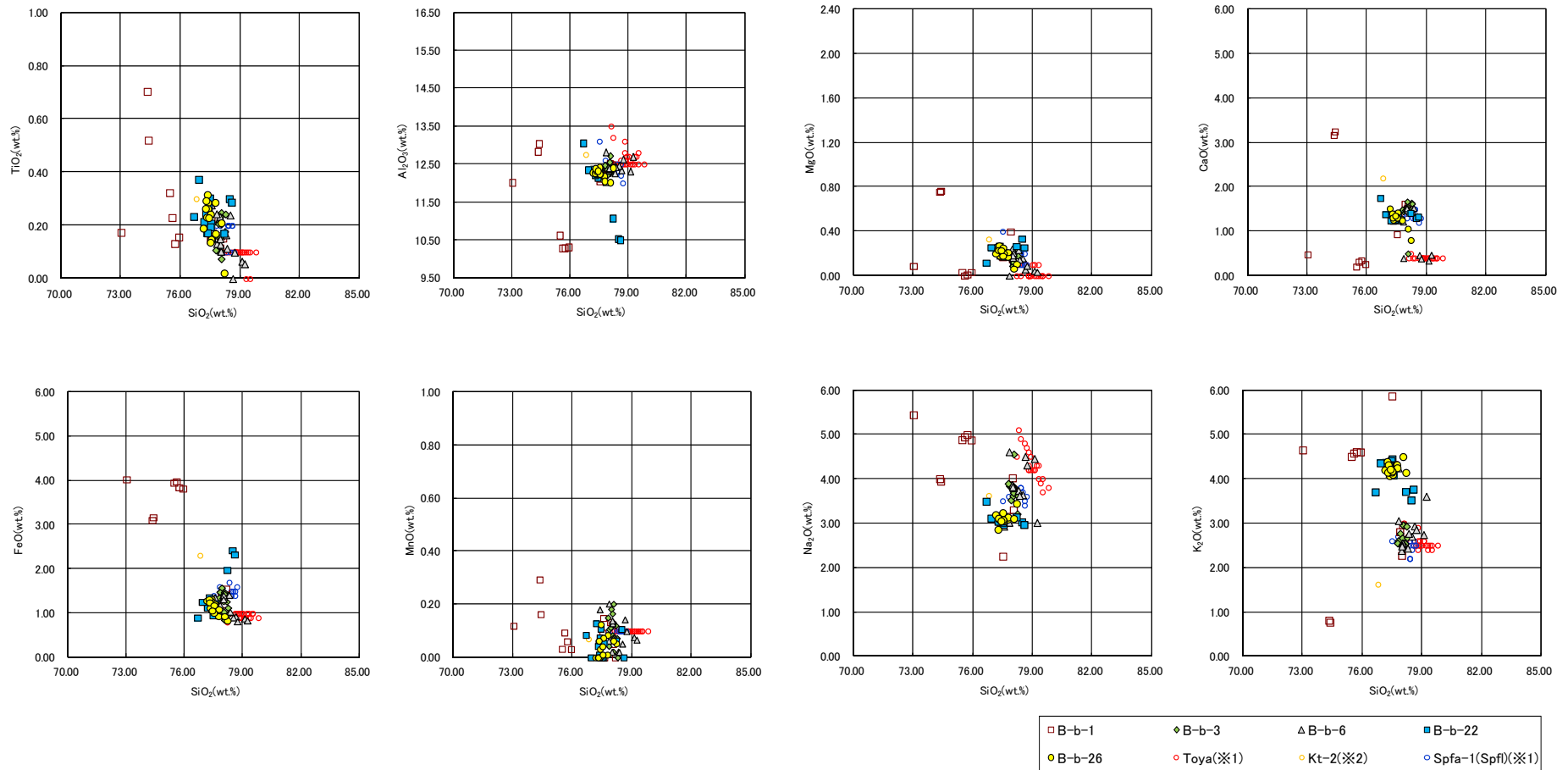
略号	特徴	火山ガラス	斜方輝石	角閃石
Toya	バブルウォールタイプ・バミスタイプの火山ガラス主体	1.494-1.498	1.711-1.761 (1.758-1.761, 1.712-1.729 bimodal)	1.674-1.684

余白

1.5.1 敷地における地質調査結果

①-1 B地点 (7/7)

一部修正 (H29/12/8審査会合)



※1 町田・新井 (2011), ※2 青木・町田 (2006)

B-b 火山ガラスの主元素組成 (ハーカー図)

敷地における地質調査の結果、堆積物中に洞爺火山灰 (Toya)、支笏第1降下軽石 (Spfa-1) 及び対象火山灰に対比される火山ガラスが認められるものの、組成分析の結果、これらの火山ガラスの粒子数は少ない。

1.5.1 敷地における地質調査結果

①-2 C地点(まとめ) (1/2)

一部修正 (H30/5/11審査会合)

【①-3 C-1トレンチ (P436～P443参照)】

- 本調査箇所では、基盤岩の上位に、海成堆積物(円～亜角礫のクサリ礫が混じる砂礫層、淘汰の良い砂層)及び陸上堆積物(シルト混じり砂礫層、礫混じり砂質シルト層、シルト質砂層)が認められる。
- 本調査箇所はHm3段丘面が判読されることから、海成堆積物はHm3段丘堆積物に区分される。
- Hm3段丘堆積物の上位のシルト混じり砂礫層及び礫混じり砂質シルト層は、角礫が混じり、下位のHm3段丘堆積物を削り込んで堆積していることから、斜面II堆積物に区分される。
- 本露頭では、支笏第1降下軽石(Spfa-1)、洞爺火山灰(Toya)及び対象火山灰に対比される火山ガラスが混在する堆積物が認められるが、主に火山砕屑物からなる堆積物若しくは軽石又はスコリアを含む堆積物は認められない。

【①-4 C-2トレンチ (P444～P451参照)】

- 本調査箇所では、基盤岩の上位に海成堆積物(亜円礫主体で風化した礫がわずかに混じる砂礫層及び淘汰の良い砂層)及び陸上堆積物(角礫が混じるシルト質砂礫層、シルト質砂層)が認められる。
- 海成堆積物は、以下の理由から、Hm2段丘堆積物相当層に区分される。
 - ・海成堆積物及び本堆積物に覆われる範囲の基盤岩の上面標高は、積丹半島西岸における他地点のHm2段丘の上面標高と同程度である。
 - ・海成堆積物上部の砂層には水平な葉理が認められ、他地点における段丘堆積物と同様、水平に堆積している状況が確認される。
 - ・基盤岩は傾斜しており、段丘基盤(緩やかな平坦面)を有していない。
- Hm2段丘堆積物相当層を不整合で覆うシルト質砂礫層及びシルト質砂層は、角礫が混じる状況であることから、斜面II堆積物に区分される。
- 本露頭では、支笏第1降下軽石(Spfa-1)、洞爺火山灰(Toya)及び対象火山灰に対比される火山ガラスが混在する堆積物が認められるが、主に火山砕屑物からなる堆積物若しくは軽石又はスコリアを含む堆積物は認められない。

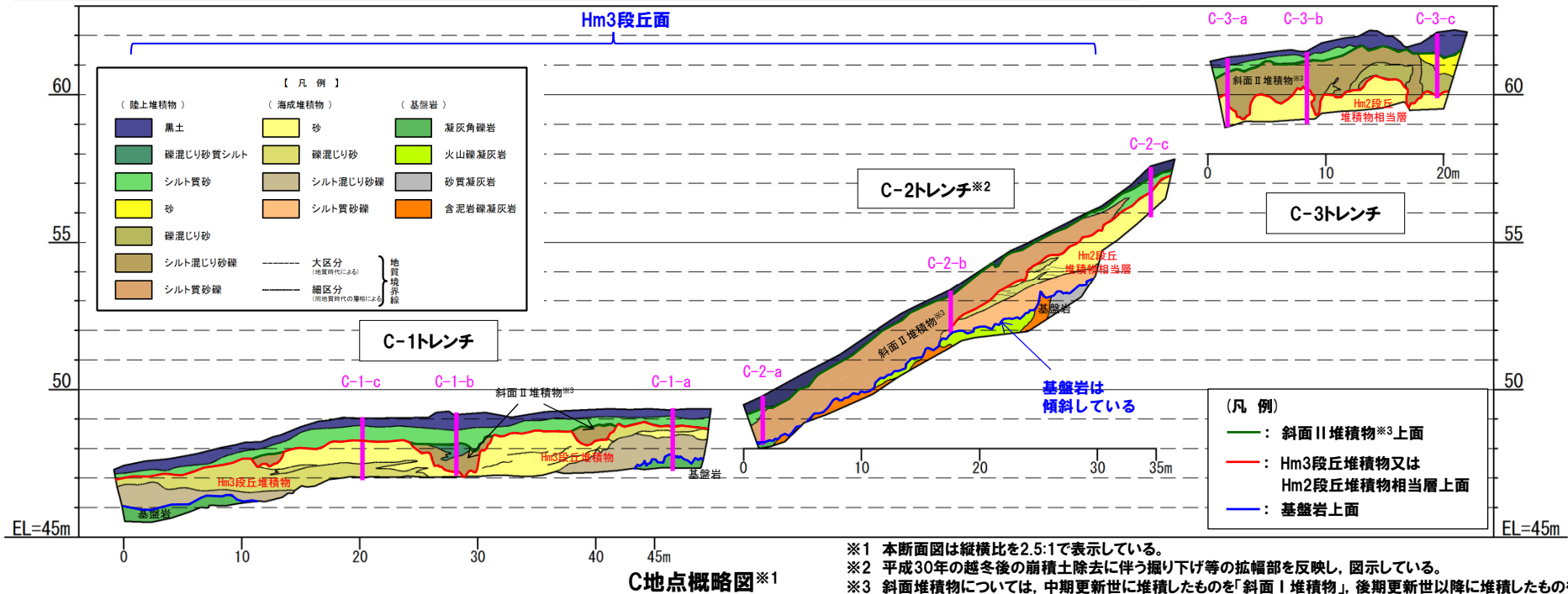
【①-5 C-3トレンチ (P452～P459参照)】

- 本調査箇所では、基盤岩は確認されないものの、下位から、海成堆積物(淘汰の良い砂層)及び陸上堆積物(角礫が混じるシルト混じり砂礫層、礫混じり砂層、シルト質砂層)が認められる。
- 海成堆積物は、C-2トレンチにおけるHm2段丘堆積物相当層と層相が調和的である。
- 本調査箇所はC-2トレンチ背後の段丘面が判読されない緩斜面に位置し、海成堆積物はC-2トレンチに連続しているものと判断されることから、Hm2段丘堆積物相当層に区分される。
- Hm2段丘堆積物相当層を不整合で覆うシルト混じり砂礫層及び礫混じり砂は、角礫が混じる状況であることから、斜面II堆積物に区分される。
- 本露頭では、支笏第1降下軽石(Spfa-1)、洞爺火山灰(Toya)及び対象火山灰に対比される火山ガラスが混在する堆積物が認められるが、主に火山砕屑物からなる堆積物若しくは軽石又はスコリアを含む堆積物は認められない。

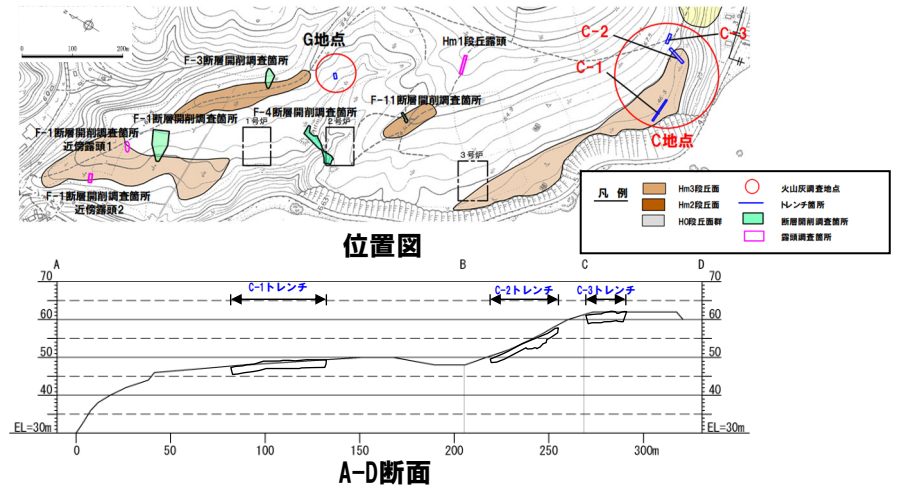
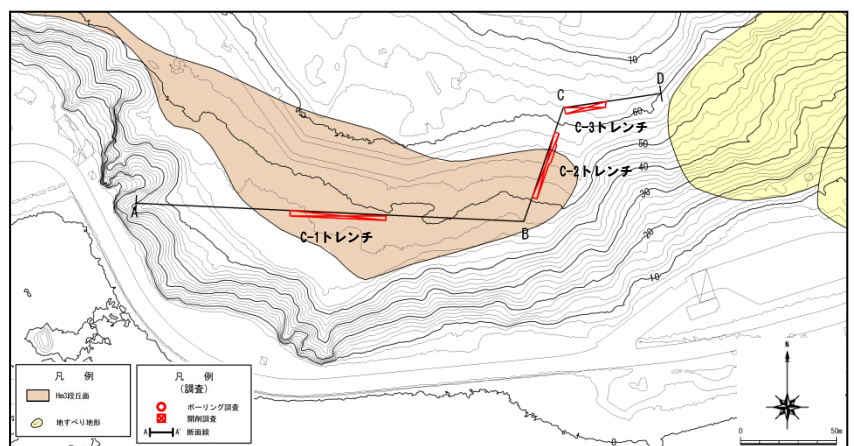
1.5.1 敷地における地質調査結果

①-2 C地点 (まとめ) (2/2)

一部修正 (H30/5/11審査会合)



- ※1 本断面図は縦横比を2.5:1で表示している。
- ※2 平成30年の越冬後の崩積土除去に伴う掘り下げ等の拡幅部を反映し、図示している。
- ※3 斜面堆積物については、中期更新世に堆積したものを「斜面I堆積物」、後期更新世以降に堆積したものを「斜面II堆積物」と呼称している。



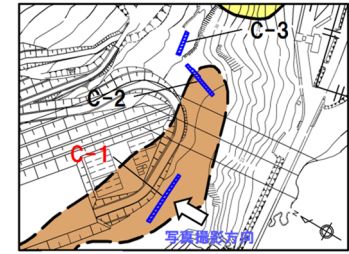
1.5.1 敷地における地質調査結果

①-3 C地点 (C-1トレンチ) (1/8)

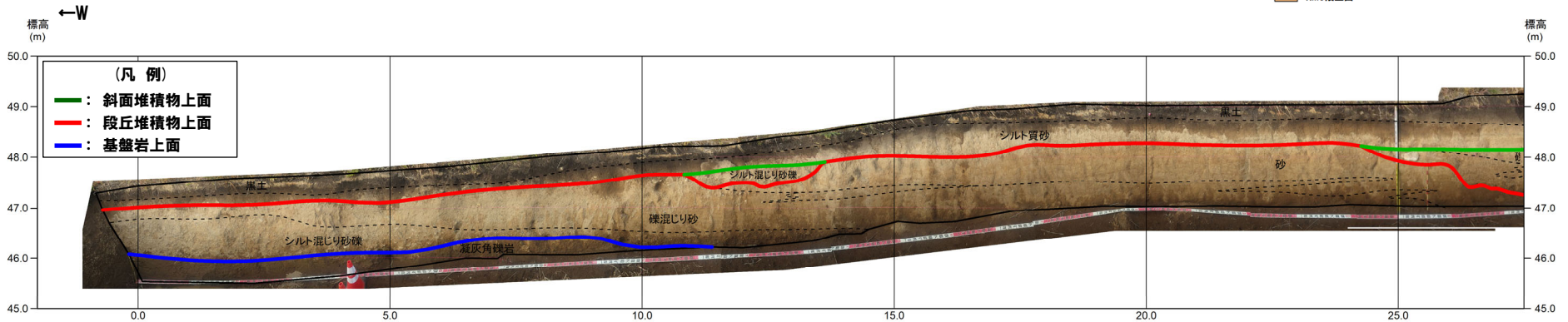
一部修正 (H31/2/22審査会合)



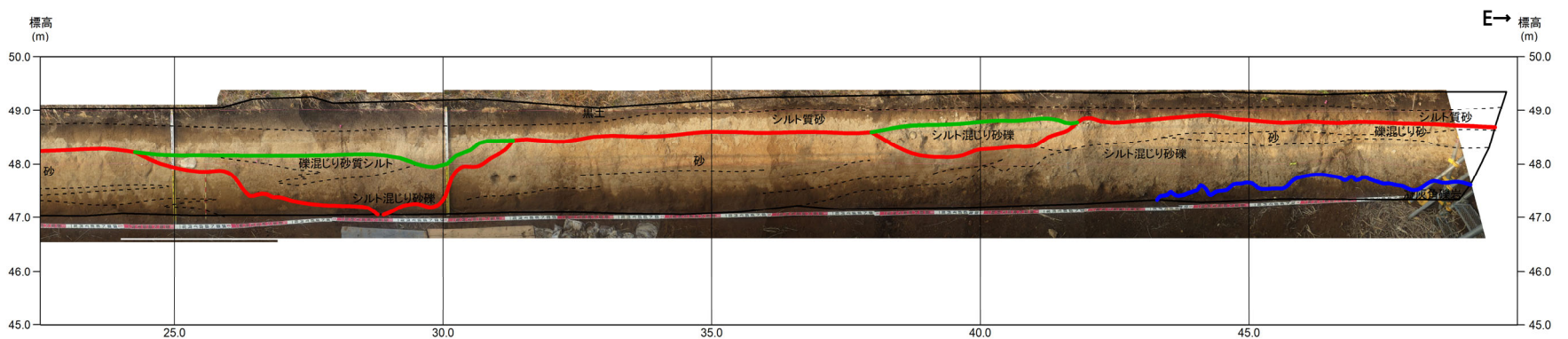
範囲A トレンチ壁面写真 (C-1) (全景) 範囲B



凡例 Hm3段丘面



トレンチ壁面写真 (C-1) (範囲A)

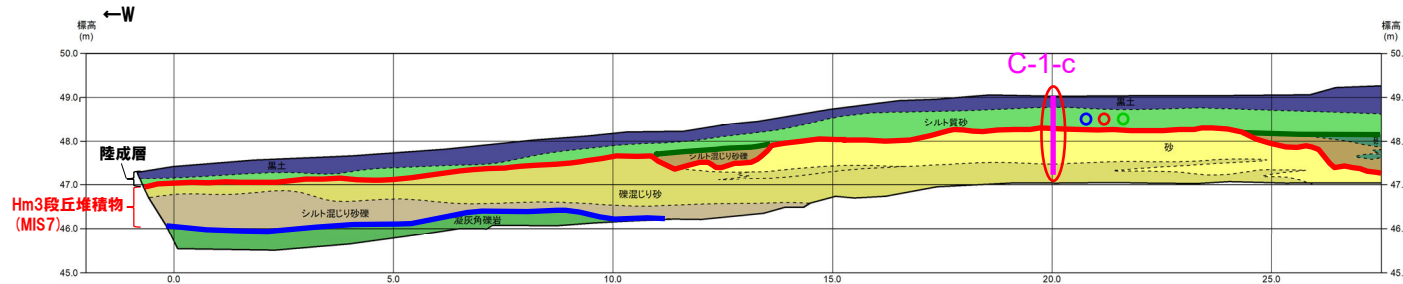


トレンチ壁面写真 (C-1) (範囲B)

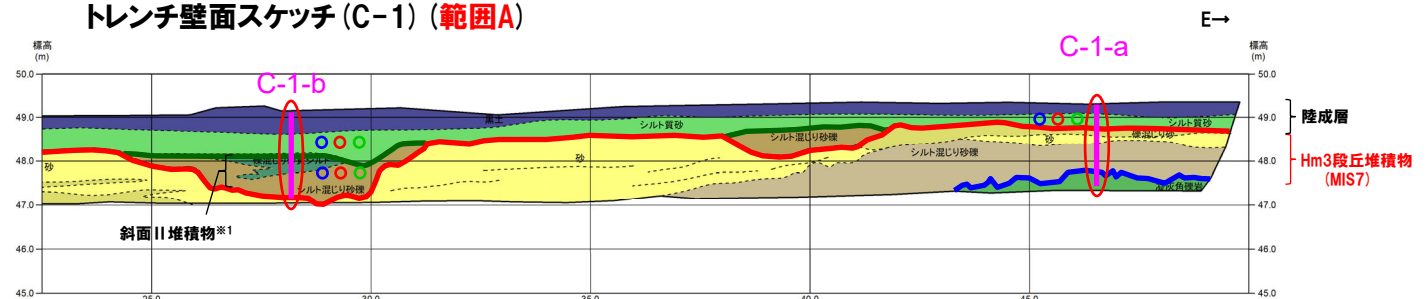
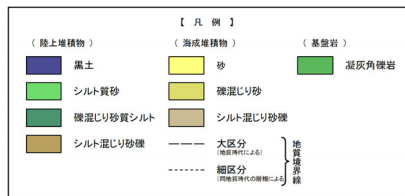
1.5.1 敷地における地質調査結果

①-3 C地点 (C-1トレンチ) (2/8)

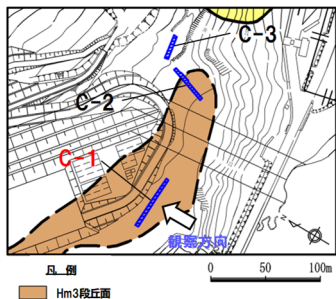
一部修正 (H31/2/22審査会合)



トレンチ壁面スケッチ (C-1) (範囲A)

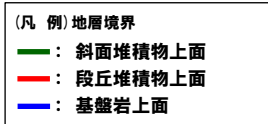
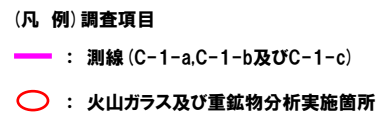
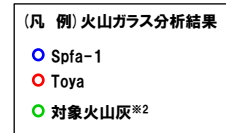


トレンチ壁面スケッチ (C-1) (範囲B)



※1 斜面堆積物については、中期更新世に堆積したものを「斜面I堆積物」、後期更新世以降に堆積したものを「斜面II堆積物」と呼称している。

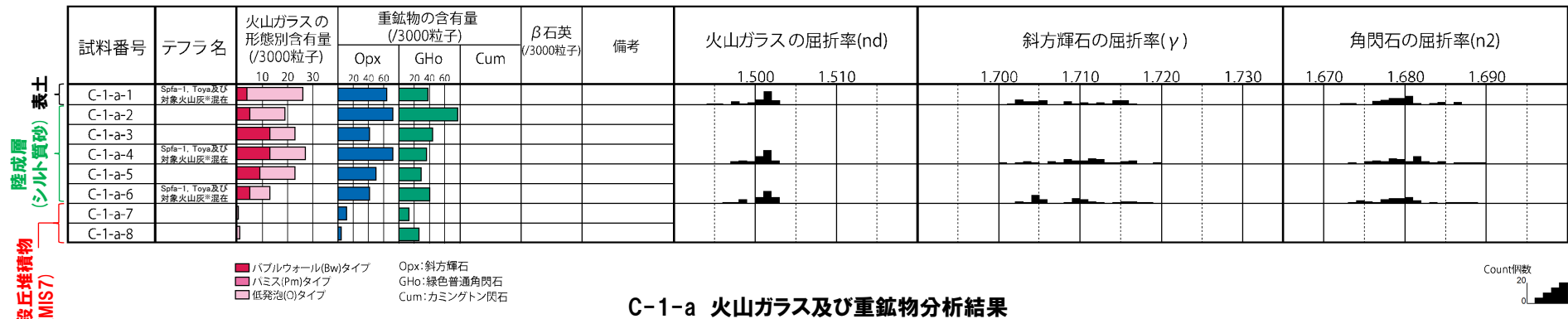
※2 岩内平野南方に位置する老古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)に対比される火山灰を「対象火山灰」と呼称している。模式地において、本火砕流堆積物から、フィッシュトラック法年代測定値0.19±0.02Maを得ている。



1.5.1 敷地における地質調査結果

①-3 C地点 (C-1トレンチ) (3/8)

一部修正 (H29/12/8審査会合)



C-1-a 火山ガラス及び重鉱物分析結果

※岩内平野南方に位置する老古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)に対比される火山灰を「対象火山灰」と呼称している。模式地において、本火砕流堆積物から、フィッシュトラック法年代測定値0.19±0.02Maを得ている。

(参考) Spfl及びSpfa-1の屈折率(町田・新井, 2011より)

略号	特徴	火山ガラス	斜方輝石	角閃石
Spfl	バブルウォールタイプ・ハミスタイプの火山ガラス主体	1.500-1.503	1.730-1.733	1.688-1.691
Spfa-1	ハミスタイプの火山ガラス主体	1.501-1.505 (1.502-1.503)	1.729-1.735	1.688-1.691

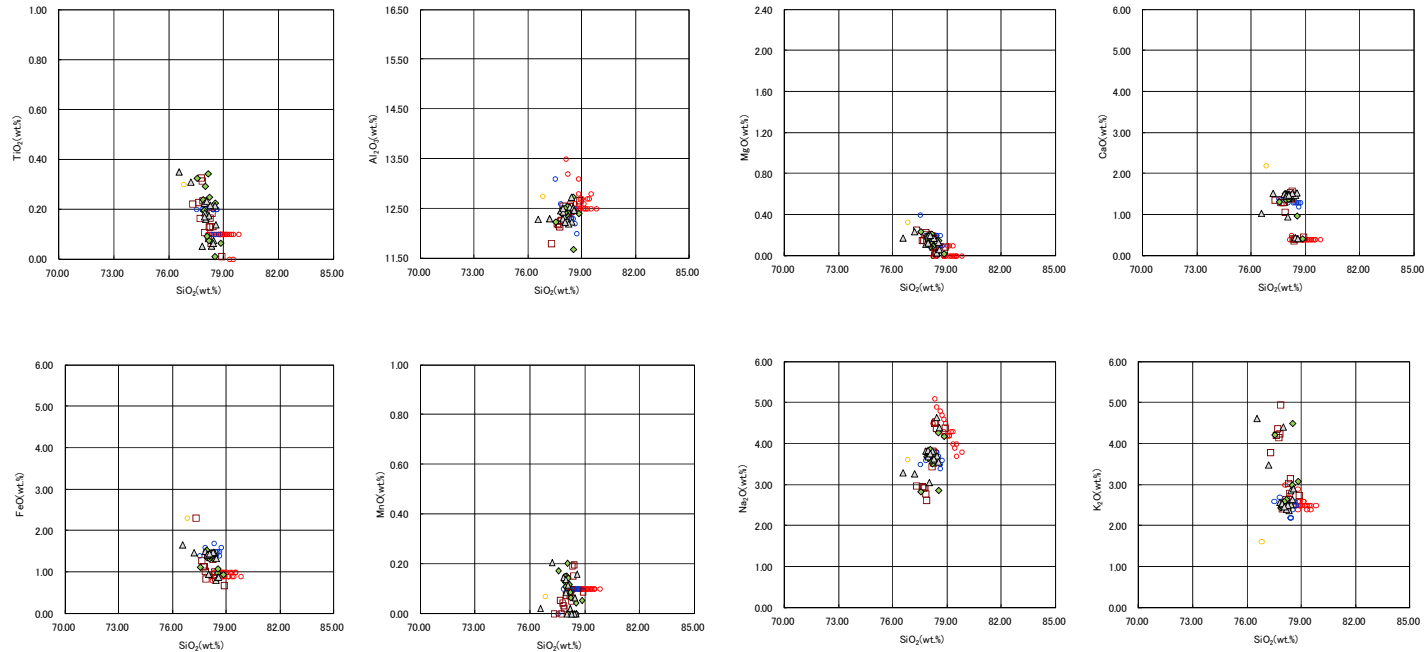
(参考) 洞爺火山灰(Toya)の屈折率(町田・新井, 2011より)

略号	特徴	火山ガラス	斜方輝石	角閃石
Toya	バブルウォールタイプ・ハミスタイプの火山ガラス主体	1.494-1.498	1.711-1.761 (1.758-1.761, 1.712-1.729 bimodal)	1.674-1.684

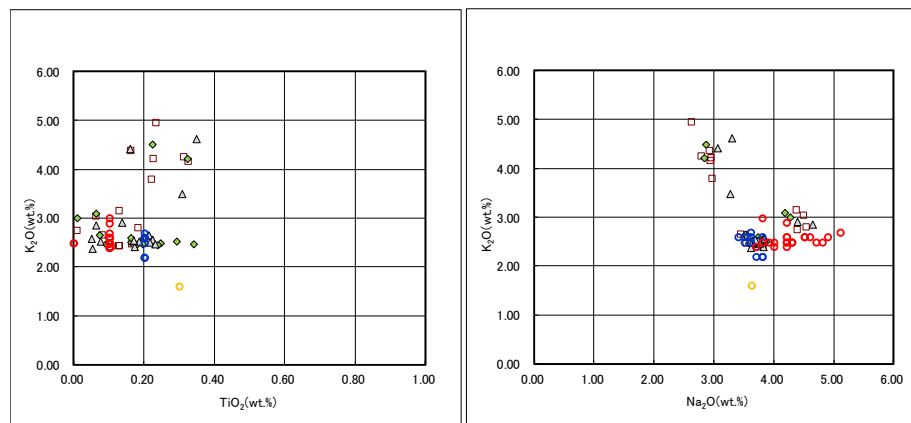
1.5.1 敷地における地質調査結果

①-3 C地点 (C-1トレンチ) (4/8)

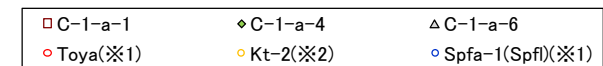
一部修正 (H29/12/8審査会合)



C-1-a 火山ガラスの主元素組成 (ハーカー図)



C-1-a 火山ガラスのK₂O-TiO₂図 (左図), K₂O-Na₂O図 (右図)

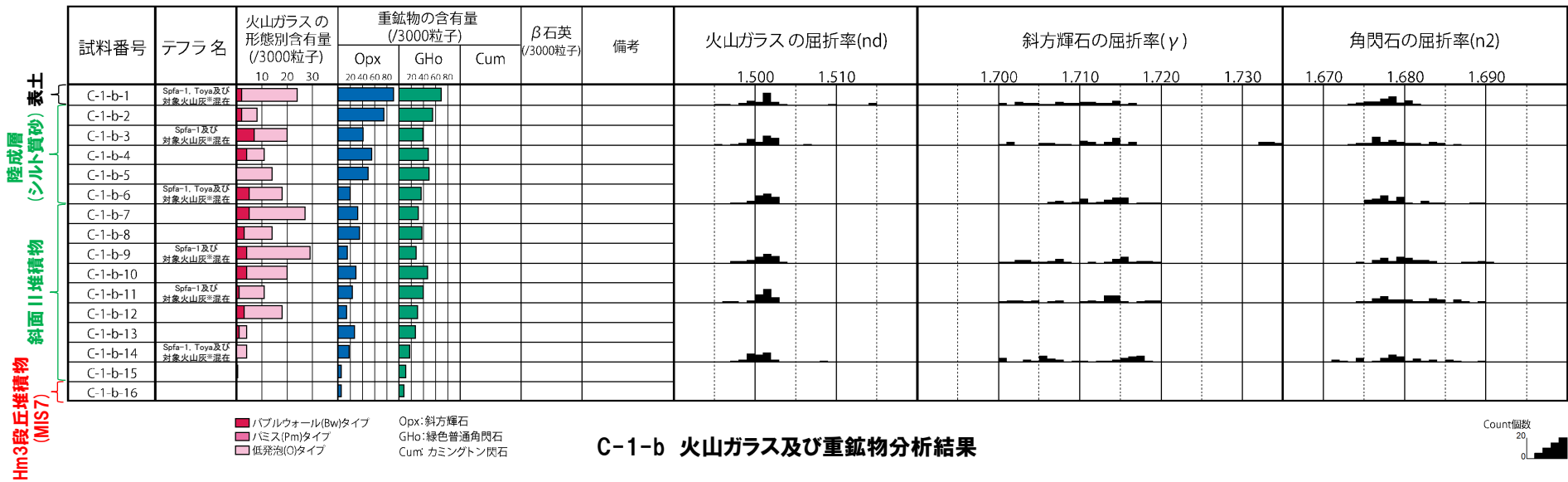


※1 町田・新井 (2011), ※2 青木・町田 (2006)

1.5.1 敷地における地質調査結果

①-3 C地点 (C-1トレンチ) (5/8)

一部修正 (H29/12/8審査会合)



※岩内平野南方に位置する考古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)に対比される火山灰を「対象火山灰」と呼称している。模式地において、本火砕流堆積物から、フィッショントラック法年代測定値 $0.19 \pm 0.02\text{Ma}$ を得ている。

(参考) Spfl及びSpfa-1の屈折率(町田・新井, 2011より)

略号	特徴	火山ガラス	斜方輝石	角閃石
Spfl	バブルウォールタイプ・ハミスタイプの火山ガラス主体	1.500-1.503	1.730-1.733	1.688-1.691
Spfa-1	ハミスタイプの火山ガラス主体	1.501-1.505 (1.502-1.503)	1.729-1.735	1.688-1.691

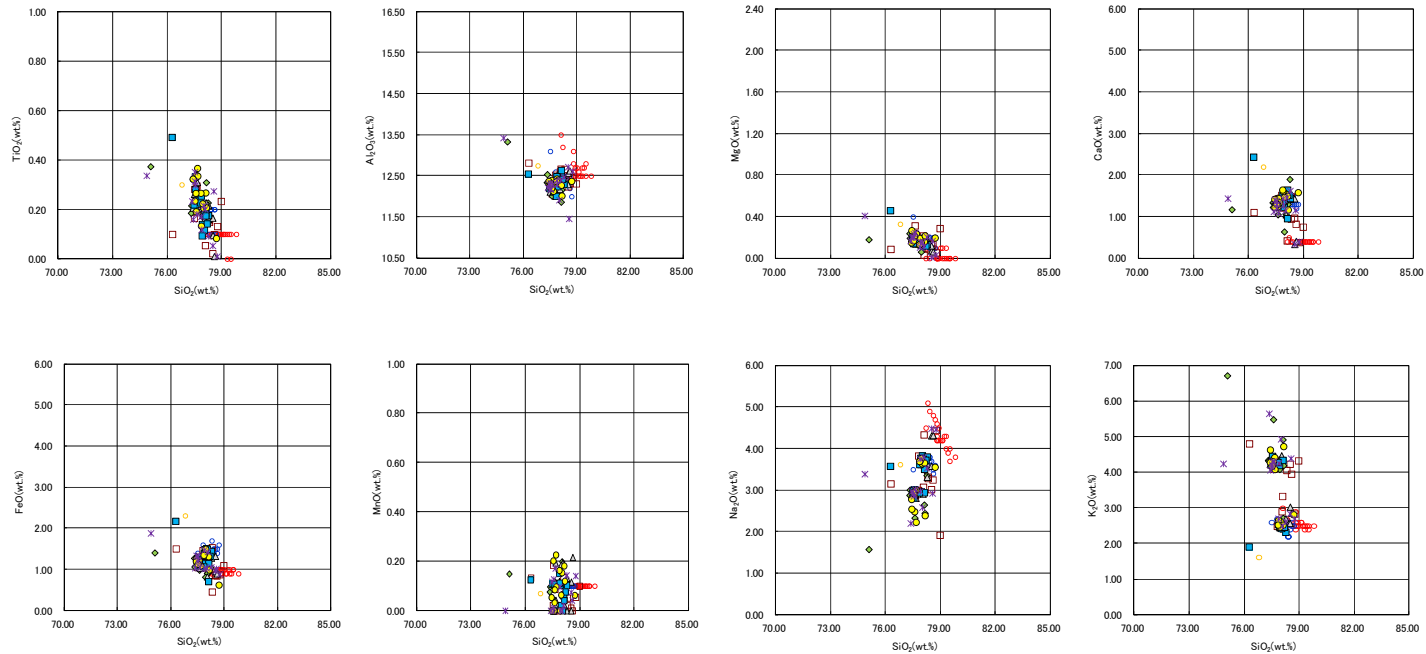
(参考) 洞爺火山灰(Toya)の屈折率(町田・新井, 2011より)

略号	特徴	火山ガラス	斜方輝石	角閃石
Toya	バブルウォールタイプ・ハミスタイプの火山ガラス主体	1.494-1.498	1.711-1.761 (1.758-1.761, 1.712-1.729 bimodal)	1.674-1.684

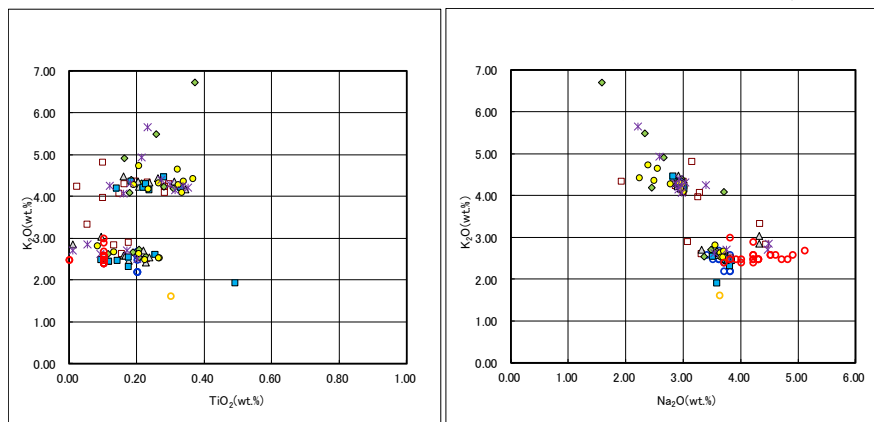
1.5.1 敷地における地質調査結果

①-3 C地点 (C-1トレンチ) (6/8)

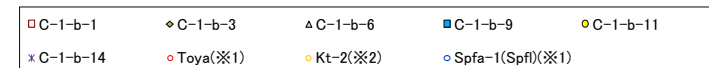
一部修正 (H29/12/8審査会合)



C-1-b 火山ガラスの主元素組成 (ハーカー図)



C-1-b 火山ガラスのK₂O-TiO₂図 (左図), K₂O-Na₂O図 (右図)

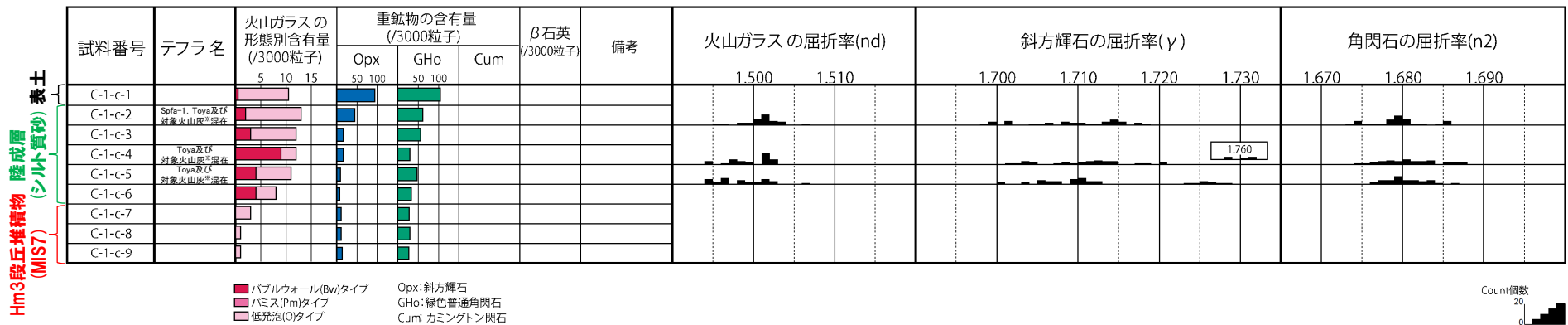


※1 町田・新井 (2011), ※2 青木・町田 (2006)

1.5.1 敷地における地質調査結果

①-3 C地点 (C-1トレンチ) (7/8)

一部修正 (H29/12/8審査会合)



C-1-c 火山ガラス及び重鉱物分析結果

※岩内平野南方に位置する老古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)に対比される火山灰を「対象火山灰」と呼称している。模式地において、本火砕流堆積物から、フィッショントラック法年代測定値0.19±0.02Maを得ている。

(参考) Spfl及びSpfa-1の屈折率(町田・新井, 2011より)

略号	特徴	火山ガラス	斜方輝石	角閃石
Spfl	バブルウォールタイプ・ハミスタイプの火山ガラス主体	1.500-1.503	1.730-1.733	1.688-1.691
Spfa-1	ハミスタイプの火山ガラス主体	1.501-1.505 (1.502-1.503)	1.729-1.735	1.688-1.691

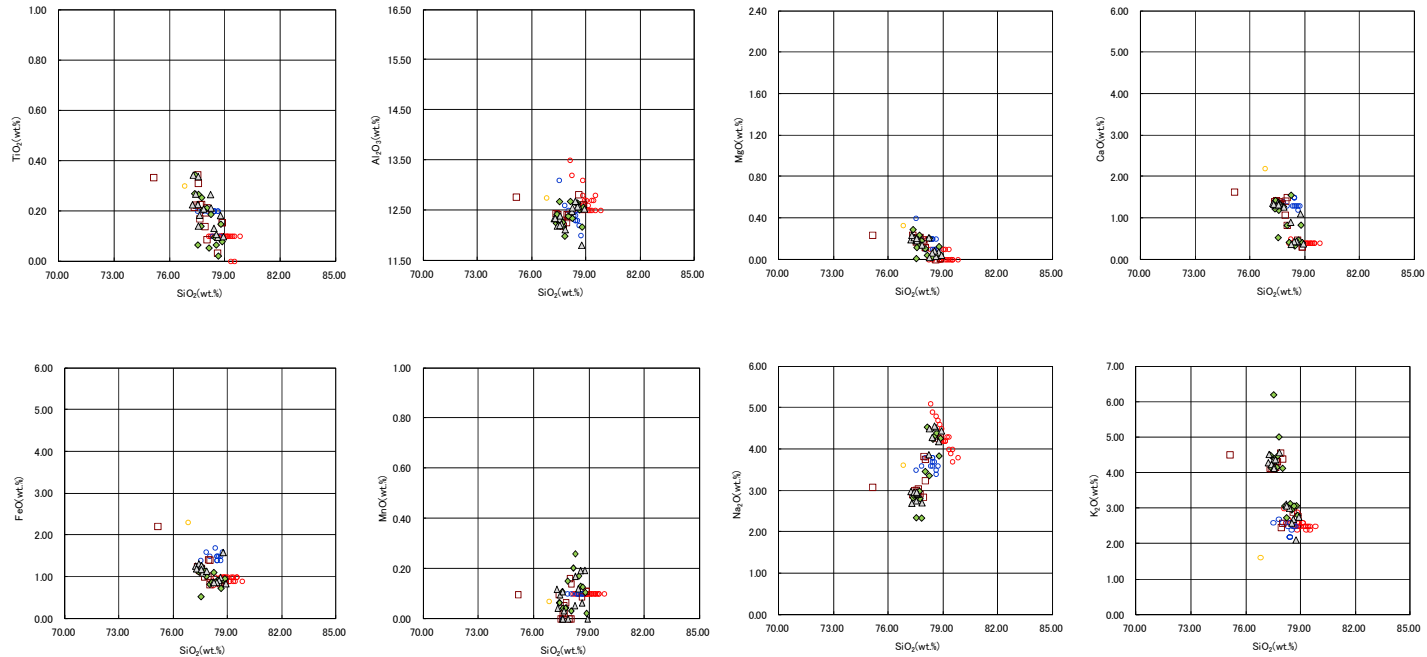
(参考) 洞爺火山灰(Toya)の屈折率(町田・新井, 2011より)

略号	特徴	火山ガラス	斜方輝石	角閃石
Toya	バブルウォールタイプ・ハミスタイプの火山ガラス主体	1.494-1.498	1.711-1.761 (1.758-1.761, 1.712-1.729 bimodal)	1.674-1.684

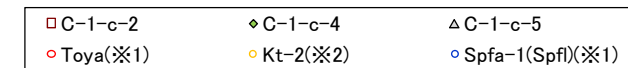
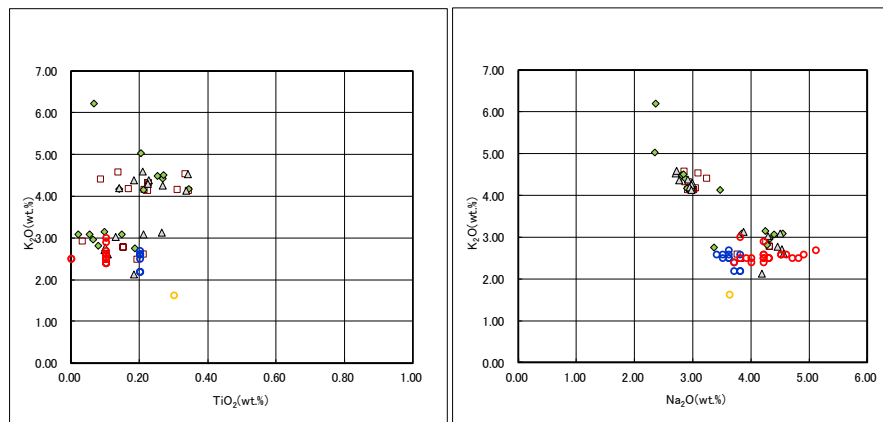
1.5.1 敷地における地質調査結果

①-3 C地点 (C-1トレンチ) (8/8)

一部修正 (H29/12/8審査会合)



C-1-c 火山ガラスの主元素組成 (ハーカー図)



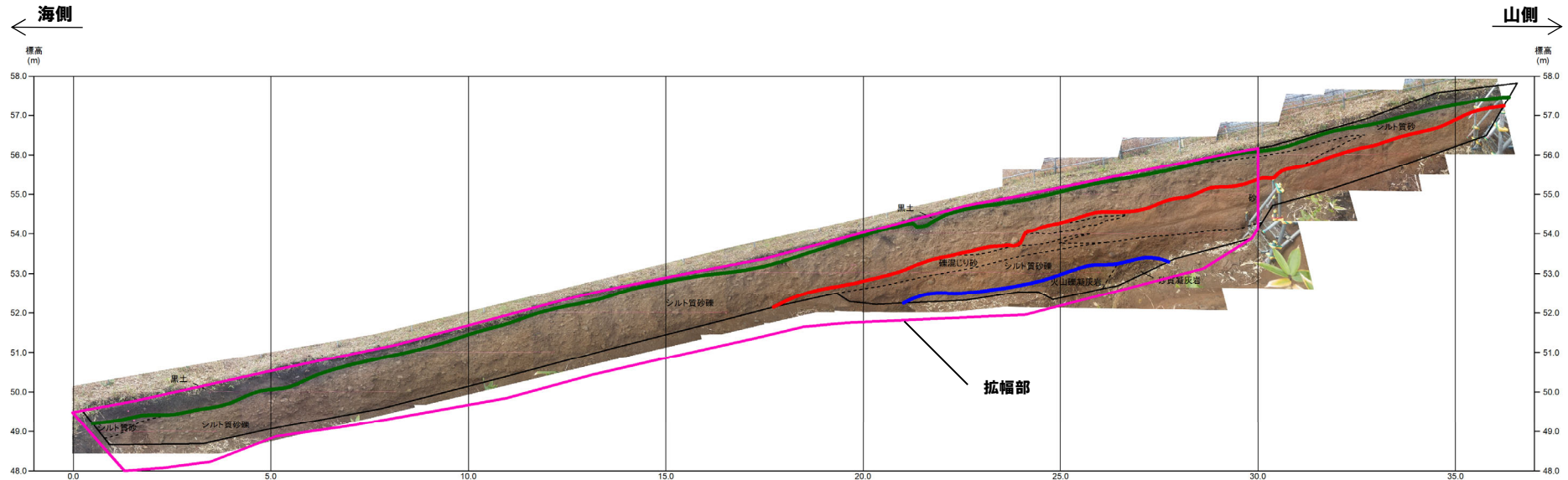
※1 町田・新井 (2011), ※2 青木・町田 (2006)

C-1-c 火山ガラスのK₂O-TiO₂図 (左図), K₂O-Na₂O図 (右図)

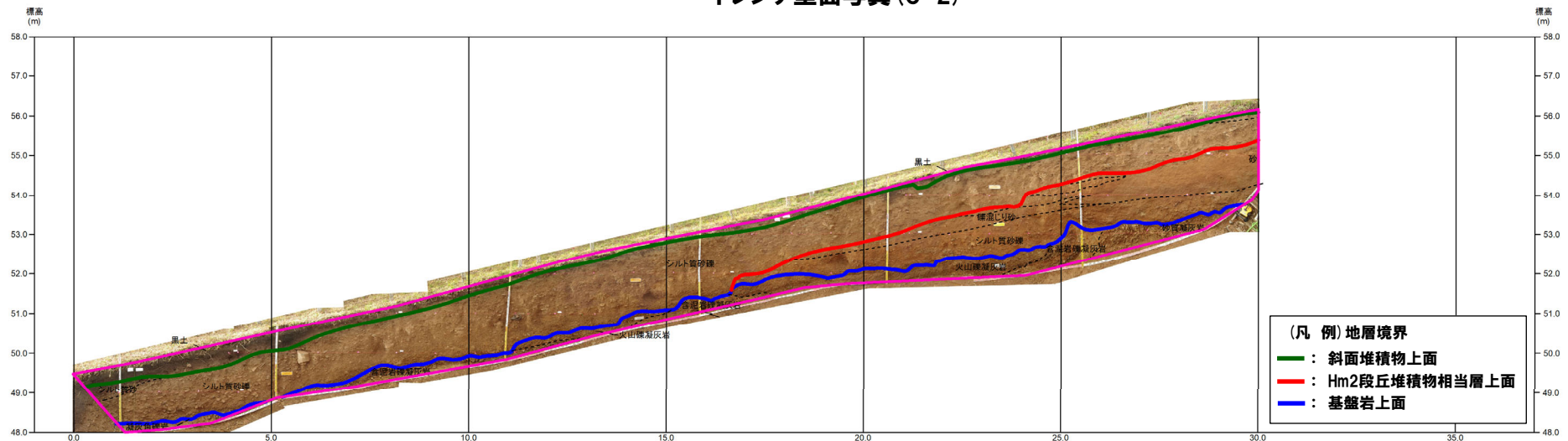
1.5.1 敷地における地質調査結果

①-4 C地点 (C-2トレンチ) (1/8)

一部修正 (H31/2/22審査会合)



トレンチ壁面写真 (C-2)

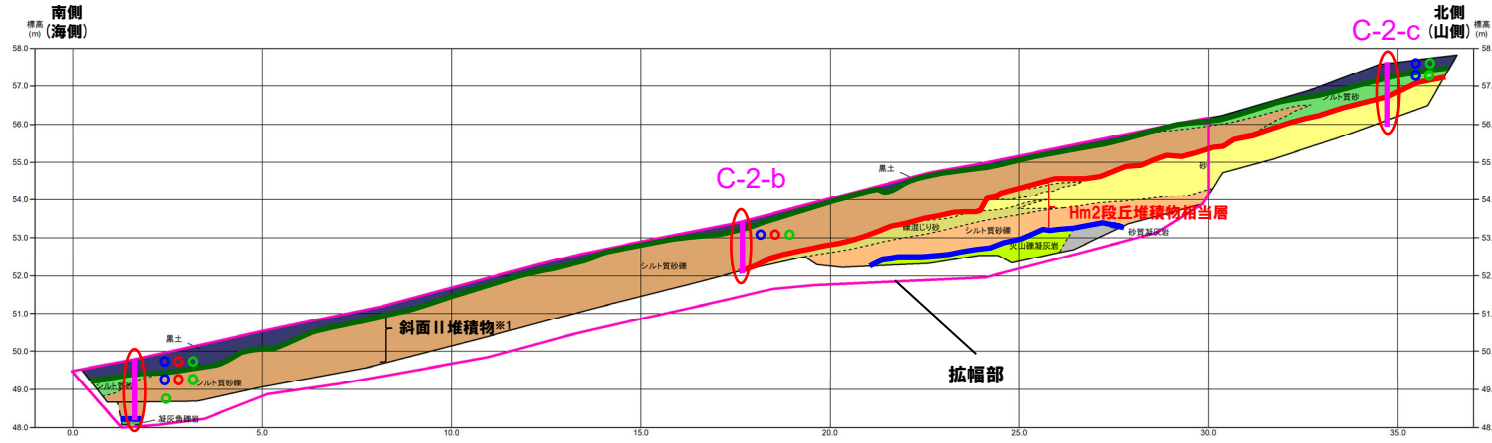


トレンチ壁面写真 (C-2拡幅部)

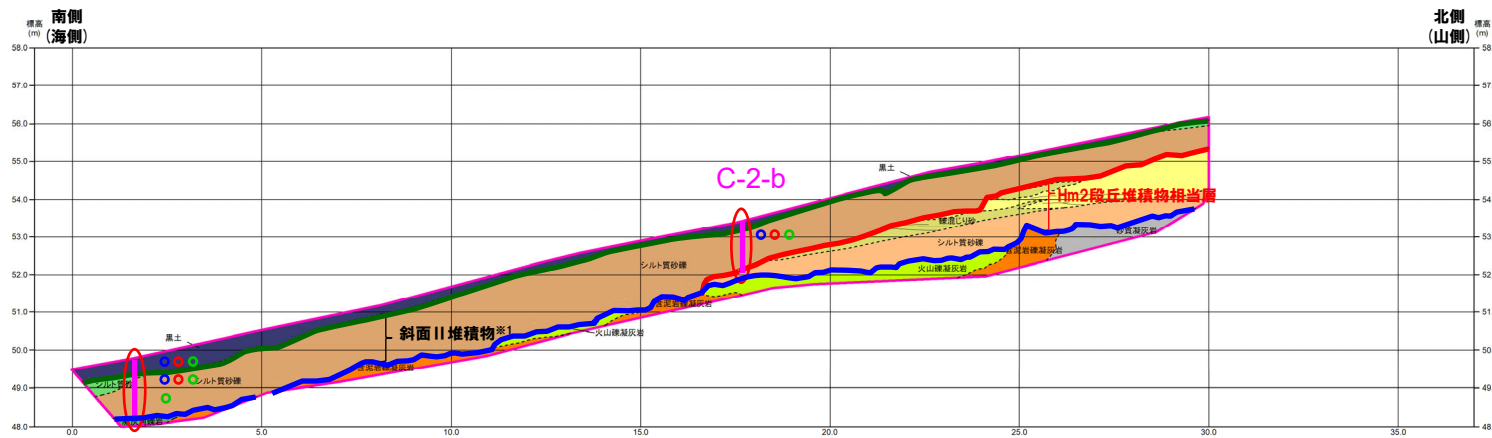
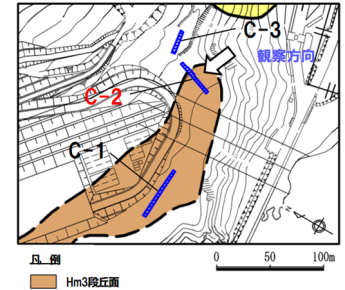
1.5.1 敷地における地質調査結果

①-4 C地点 (C-2トレンチ) (2/8)

一部修正 (H31/2/22審査会合)



トレンチ壁面スケッチ (C-2)



トレンチ壁面スケッチ (C-2拡幅部)

(凡例) 調査項目

- : 測線 (C-2-a, C-2-b及びC-2-c)
- : 火山ガラス及び重鉱物分析実施箇所

(凡例) 地層境界

- : 斜面堆積物上面
- : Hm2段丘堆積物相当層上面
- : 基盤岩上面

(凡例) 火山ガラス分析結果

- Spfa-1
- Toya
- 対象火山灰※2

※1 斜面堆積物については、中期更新世に堆積したものを「斜面I堆積物」、後期更新世以降に堆積したものを「斜面II堆積物」と呼称している。

※2 岩内平野南方に位置する老古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)に対比される火山灰を「対象火山灰」と呼称している。模式地において、本火砕流堆積物から、フィッショントラック法年代測定値 $0.19 \pm 0.02\text{Ma}$ を得ている。

【凡例】

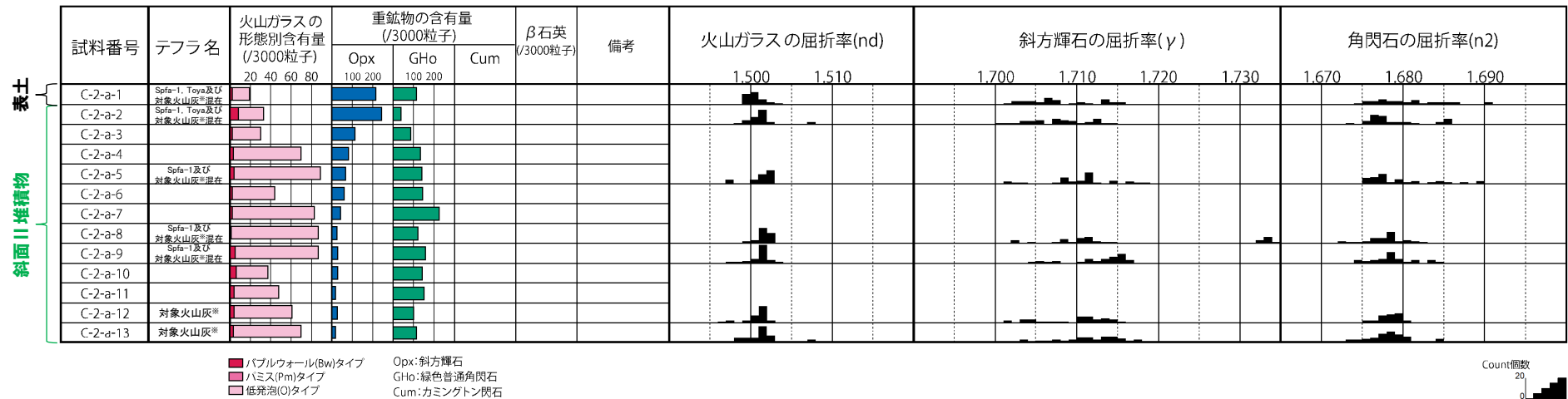
(陸上堆積物)	(海成堆積物)	(基盤岩)
黒土	砂	凝灰角礫岩
シルト質砂	礫混じり砂	火山礫凝灰岩
シルト質砂礫	シルト質砂礫	砂質凝灰岩
		含泥岩礫凝灰岩

--- 大区分 (地質時代による)
 - - - 細区分 (地質時代別層位による)

1.5.1 敷地における地質調査結果

①-4 C地点 (C-2トレンチ) (3/8)

一部修正 (H29/12/8審査会合)



C-2-a 火山ガラス及び重鉱物分析結果

※岩内平野南方に位置する老古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)に対比される火山灰を「対象火山灰」と呼称している。模式地において、本火砕流堆積物から、フィッシュトラック法年代測定値0.19±0.02Maを得ている。

(参考) Spfl及びSpfa-1の屈折率 (町田・新井, 2011より)

略号	特徴	火山ガラス	斜方輝石	角閃石
Spfl	バブルウォールタイプ・ハミスタイプの火山ガラス主体	1.500-1.503	1.730-1.733	1.688-1.691
Spfa-1	ハミスタイプの火山ガラス主体	1.501-1.505 (1.502-1.503)	1.729-1.735	1.688-1.691

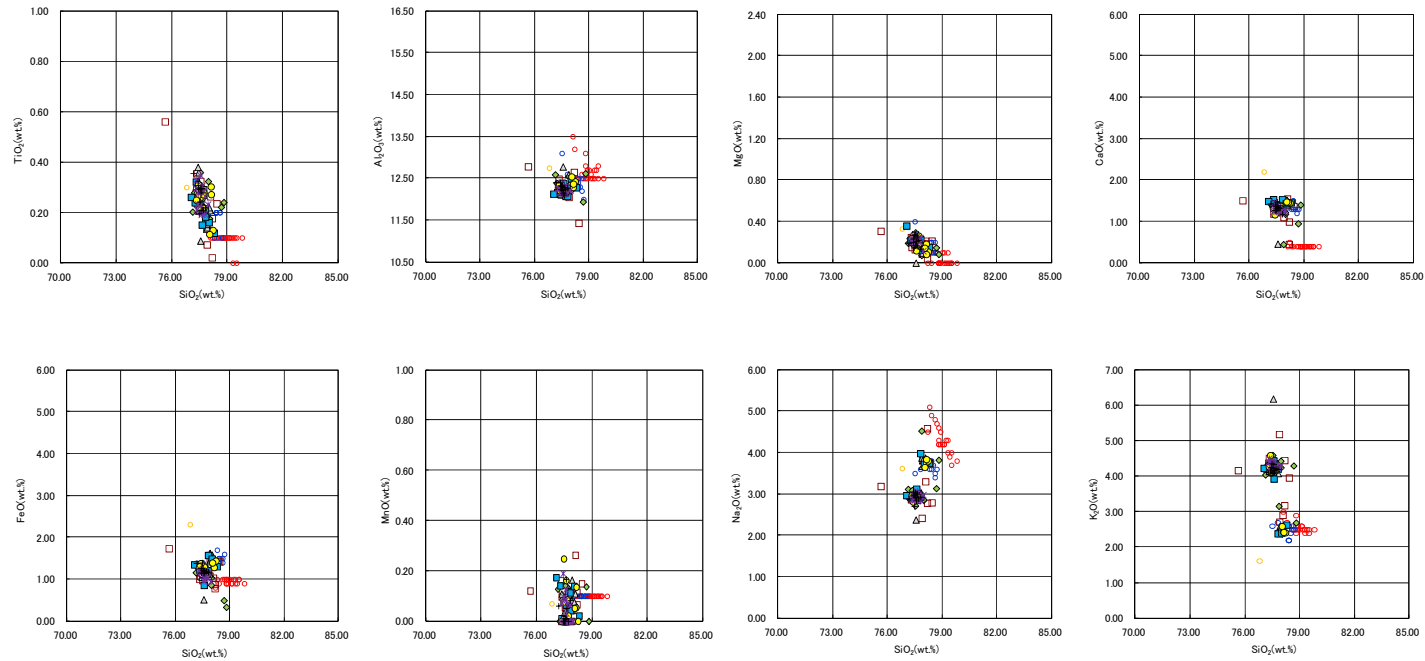
(参考) 洞爺火山灰 (Toya) の屈折率 (町田・新井, 2011より)

略号	特徴	火山ガラス	斜方輝石	角閃石
Toya	バブルウォールタイプ・ハミスタイプの火山ガラス主体	1.494-1.498	1.711-1.761 (1.758-1.761, 1.712-1.729 bimodal)	1.674-1.684

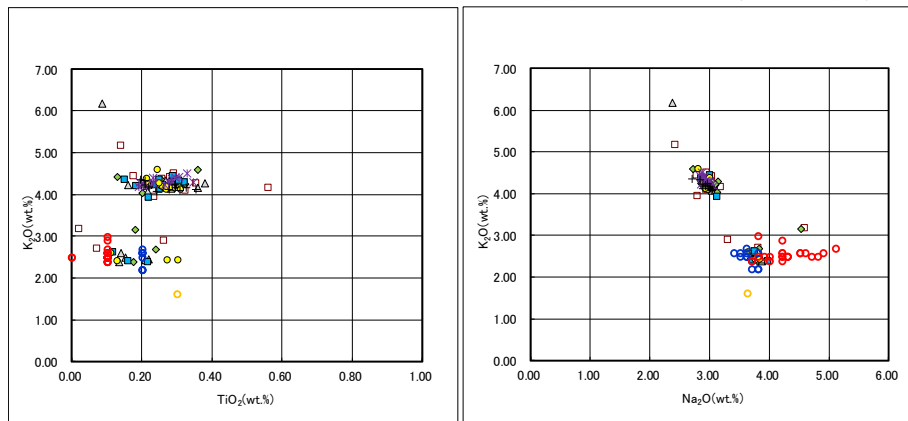
1.5.1 敷地における地質調査結果

①-4 C地点 (C-2トレンチ) (4/8)

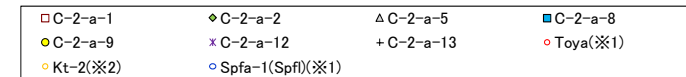
一部修正 (H29/12/8審査会合)



C-2-a 火山ガラスの主元素組成 (ハーカー図)



C-2-a 火山ガラスのK₂O-TiO₂図 (左図), K₂O-Na₂O図 (右図)

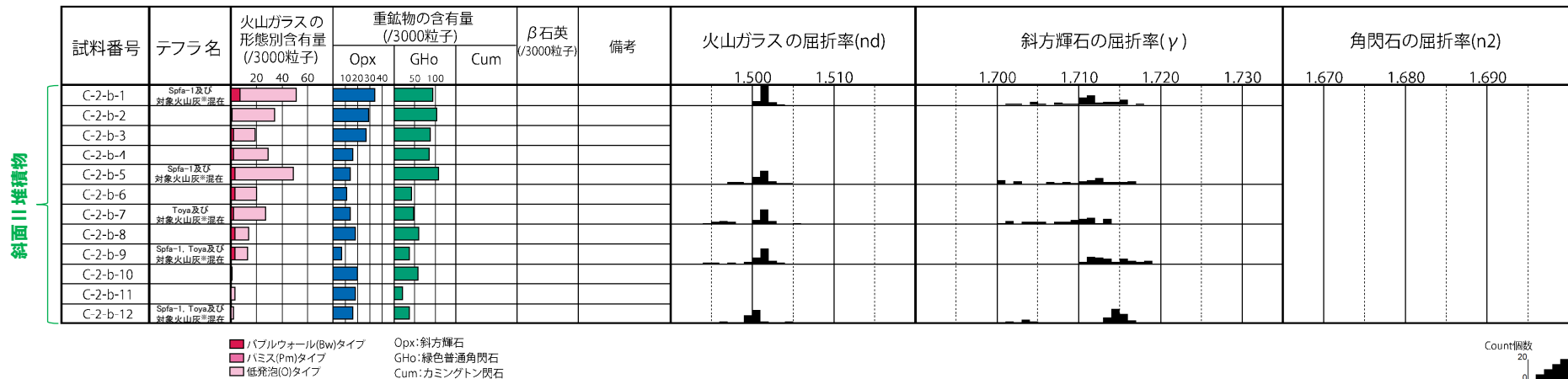


※1 町田・新井 (2011), ※2 青木・町田 (2006)

1.5.1 敷地における地質調査結果

①-4 C地点 (C-2トレンチ) (5/8)

一部修正 (H29/12/8審査会合)



C-2-b 火山ガラス及び重鉱物分析結果

※岩内平野南方に位置する老古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)に対比される火山灰を「対象火山灰」と呼称している。模式地において、本火砕流堆積物から、フィッショントラック法年代測定値0.19±0.02Maを得ている。

(参考) Spfl及びSpfa-1の屈折率 (町田・新井, 2011より)

略号	特徴	火山ガラス	斜方輝石	角閃石
Spfl	バブルウォールタイプ・ハミスタタイプの火山ガラス主体	1.500-1.503	1.730-1.733	1.688-1.691
Spfa-1	ハミスタタイプの火山ガラス主体	1.501-1.505 (1.502-1.503)	1.729-1.735	1.688-1.691

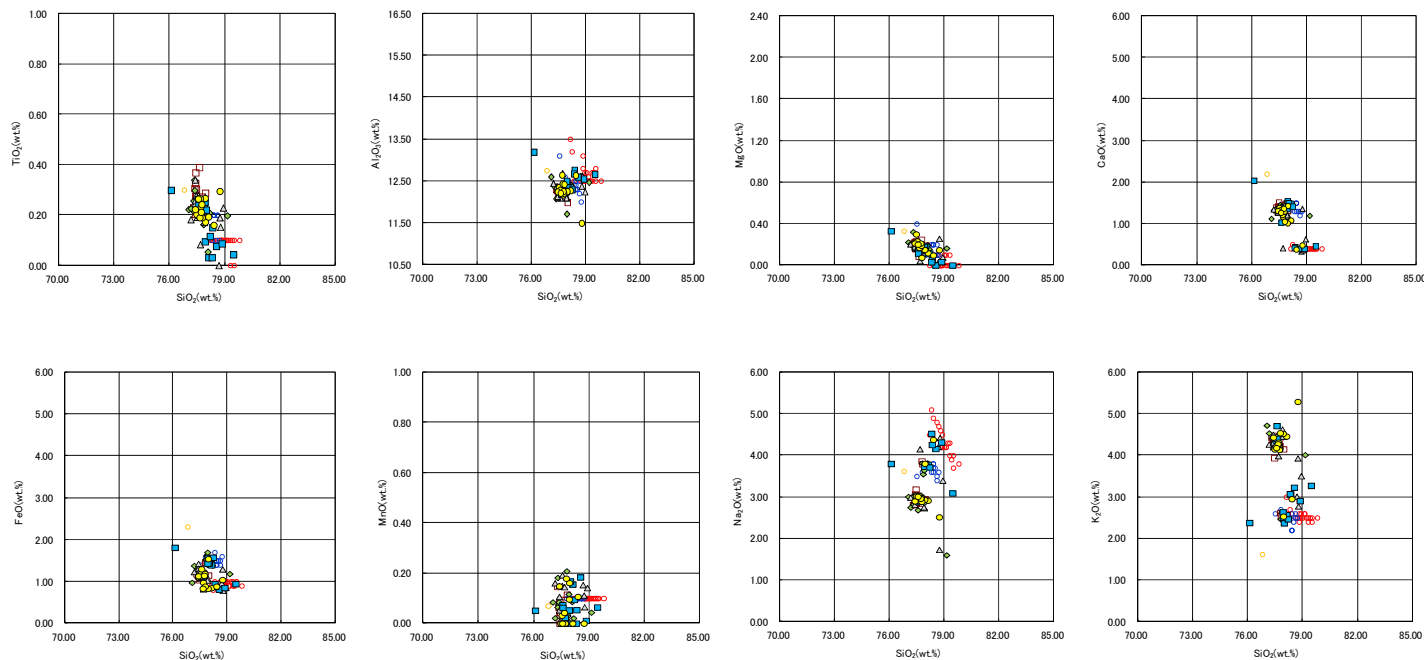
(参考) 洞爺火山灰 (Toya) の屈折率 (町田・新井, 2011より)

略号	特徴	火山ガラス	斜方輝石	角閃石
Toya	バブルウォールタイプ・ハミスタタイプの火山ガラス主体	1.494-1.498	1.711-1.761 (1.758-1.761, 1.712-1.729 bimodal)	1.674-1.684

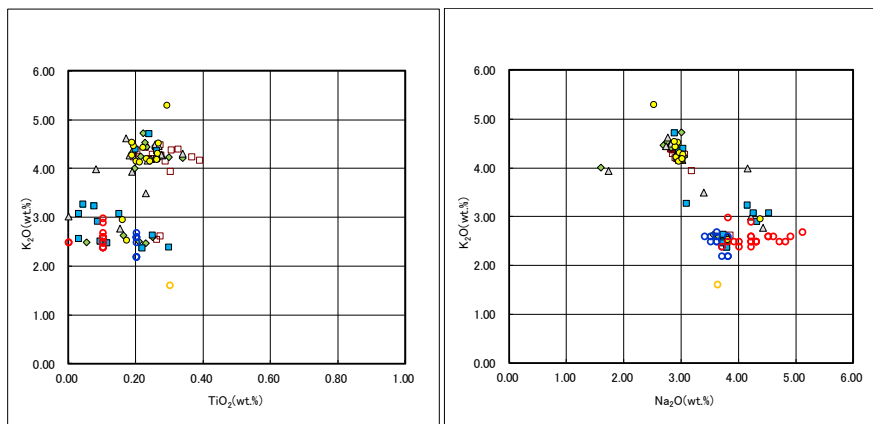
1.5.1 敷地における地質調査結果

①-4 C地点 (C-2トレンチ) (6/8)

一部修正 (H29/12/8審査会合)



C-2-b 火山ガラスの主元素組成 (ハーカー図)



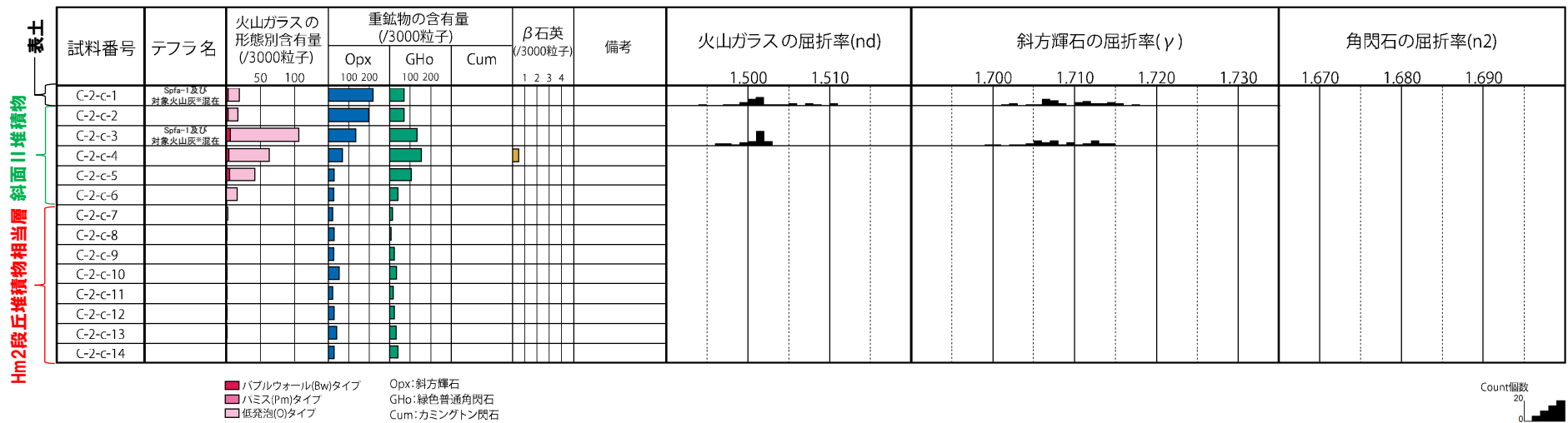
C-2-b 火山ガラスのK₂O-TiO₂図 (左図), K₂O-Na₂O図 (右図)

※1 町田・新井 (2011), ※2 青木・町田 (2006)

1.5.1 敷地における地質調査結果

①-4 C地点 (C-2トレンチ) (7/8)

一部修正 (H29/12/8審査会合)



C-2-c 火山ガラス及び重鉱物分析結果

※岩内平野南方に位置する老古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物 (火砕流堆積物) に対比される火山灰を「対象火山灰」と呼称している。模式地において、本火砕流堆積物から、フィッシュトラック法年代測定値0.19±0.02Maを得ている。

(参考) Spfl及びSpfa-1の屈折率 (町田・新井, 2011より)

略号	特徴	火山ガラス	斜方輝石	角閃石
Spfl	バブルウォールタイプ・ハミスタタイプの火山ガラス主体	1.500-1.503	1.730-1.733	1.688-1.691
Spfa-1	ハミスタタイプの火山ガラス主体	1.501-1.505 (1.502-1.503)	1.729-1.735	1.688-1.691

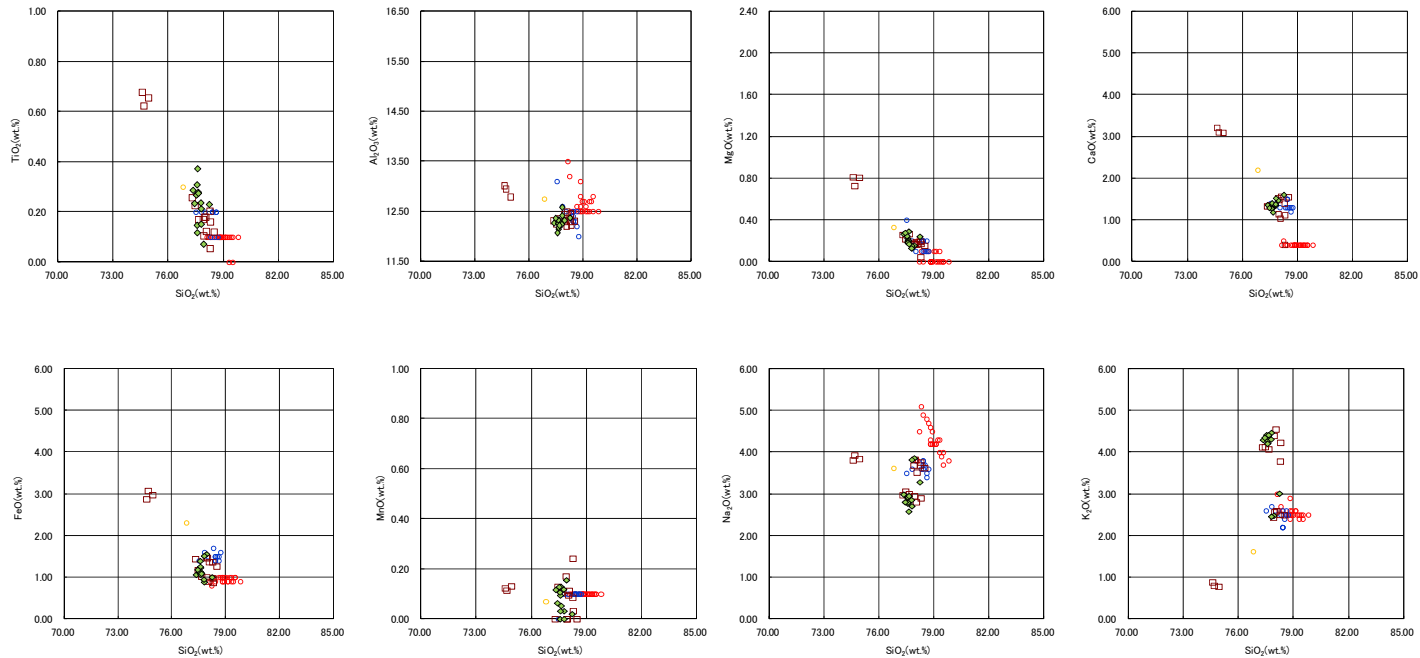
(参考) 洞爺火山灰 (Toya) の屈折率 (町田・新井, 2011より)

略号	特徴	火山ガラス	斜方輝石	角閃石
Toya	バブルウォールタイプ・ハミスタタイプの火山ガラス主体	1.494-1.498	1.711-1.761 (1.758-1.761, 1.712-1.729 bimodal)	1.674-1.684

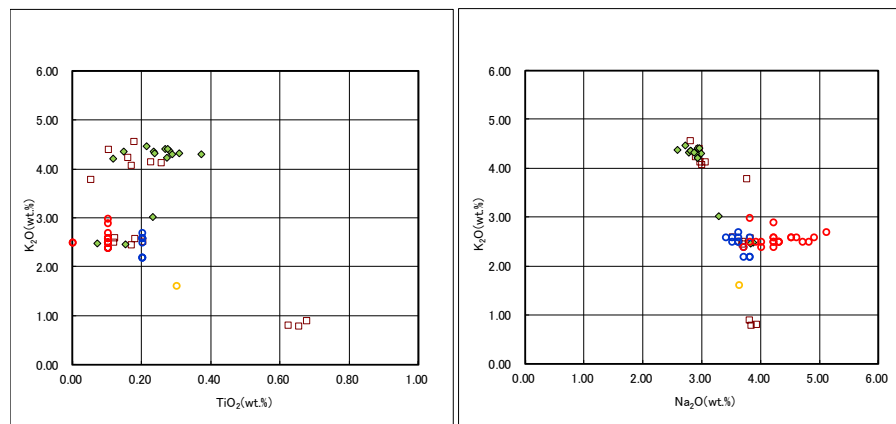
1.5.1 敷地における地質調査結果

①-4 C地点 (C-2トレンチ) (8/8)

一部修正 (H29/12/8審査会合)



C-2-c 火山ガラスの主元素組成 (ハーカー図)



C-2-c 火山ガラスのK₂O-TiO₂図 (左図), K₂O-Na₂O図 (右図)

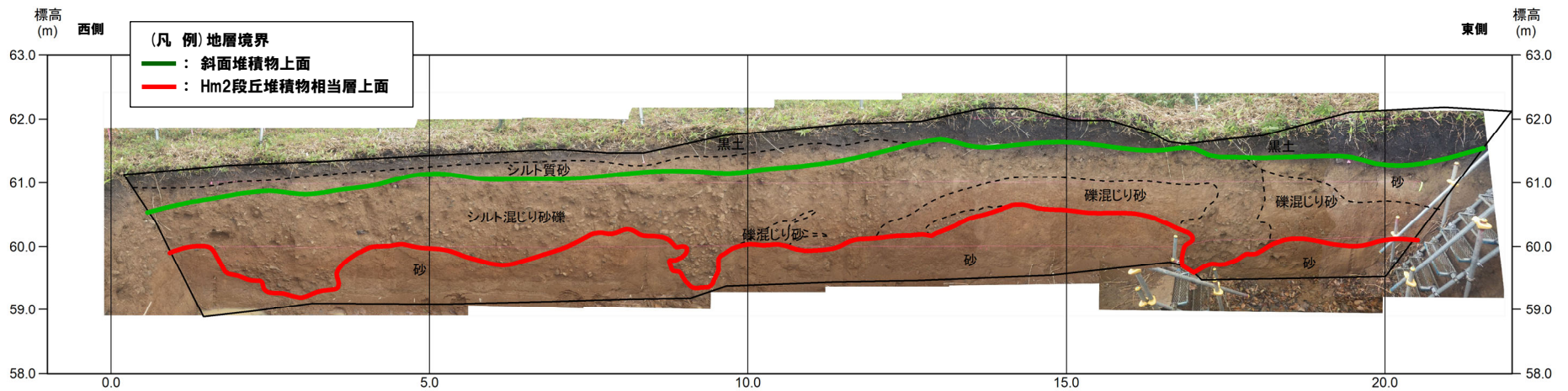
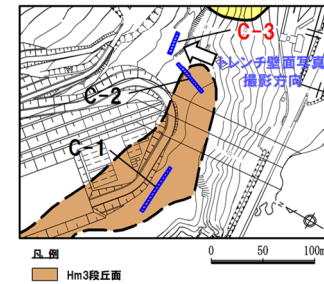
□ C-2-c-1 ◆ C-2-c-3 ○ Toya(※1) ○ Kt-2(※2) ○ Spfa-1(Spfl)(※1)

※1 町田・新井 (2011), ※2 青木・町田 (2006)

1.5.1 敷地における地質調査結果

①-5 C地点 (C-3トレンチ) (1/8)

再掲 (H31/2/22審査会合)

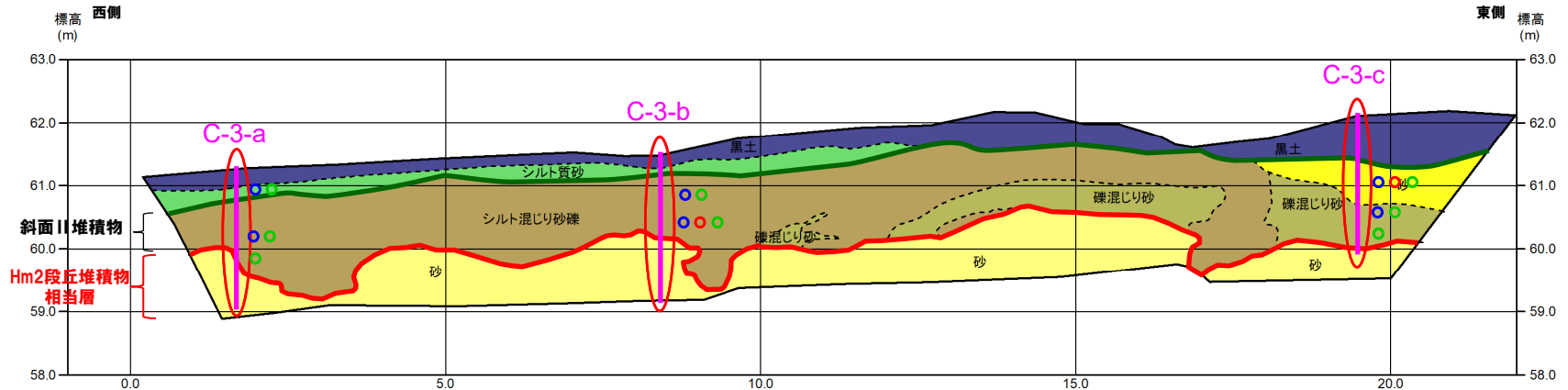


トレンチ壁面写真 (C-3)

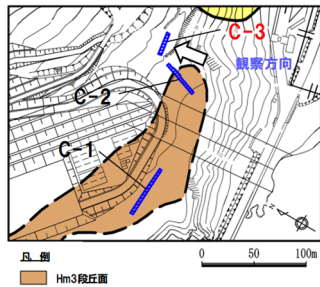
1.5.1 敷地における地質調査結果

①-5 C地点 (C-3トレンチ) (2/8)

一部修正 (H31/2/22審査会合)



トレンチ壁面スケッチ (C-3)



(凡例) 調査項目

- : 測線 (C-3-a, C-3-b 及び C-3-c)
- : 火山ガラス及び重鉱物分析実施箇所

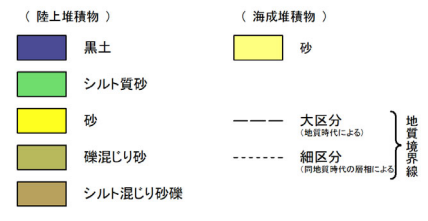
(凡例) 地層境界

- : 斜面堆積物上面
- : Hm2段丘堆積物相当層上面

(凡例) 火山ガラス分析結果

- Spfa-1
- Toya
- 対象火山灰*

【凡例】

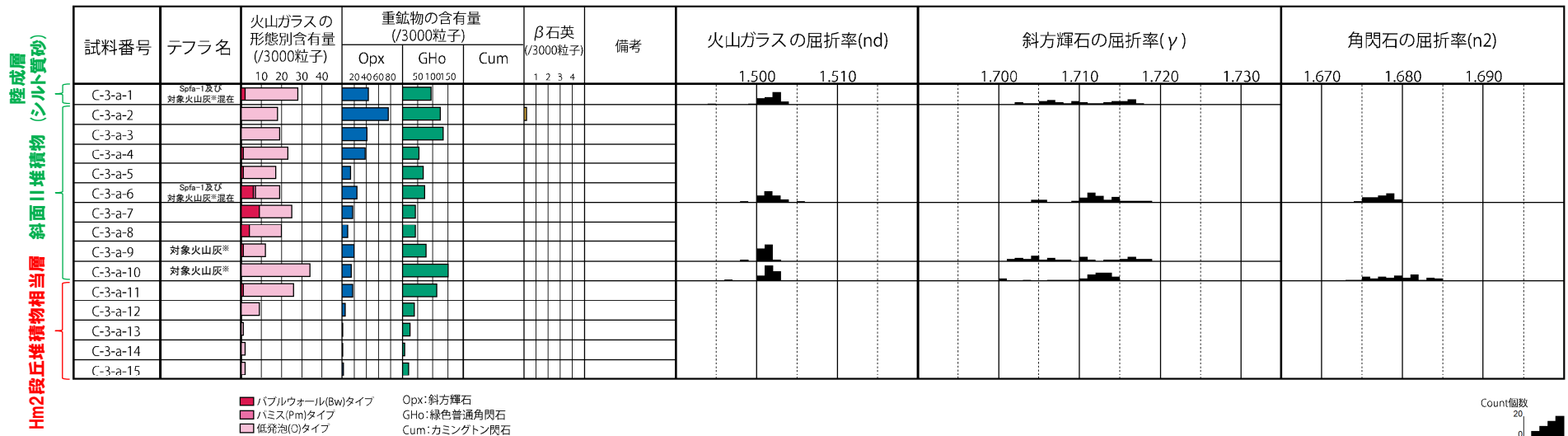


※岩内平野南方に位置する老古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)に対比される火山灰を「対象火山灰」と呼称している。模式地において、本火砕流堆積物から、フィッショントラック法年代測定値 $0.19 \pm 0.02\text{Ma}$ を得ている。

1.5.1 敷地における地質調査結果

①-5 C地点 (C-3トレンチ) (3/8)

一部修正 (H29/12/8審査会合)



C-3-a 火山ガラス及び重鉱物分析結果

※岩内平野南方に位置する老古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)に対比される火山灰を「対象火山灰」と呼称している。模式地において、本火砕流堆積物から、フィッショントラック法年代測定値0.19±0.02Maを得ている。

(参考) Spfl及びSpfa-1の屈折率 (町田・新井, 2011より)

略号	特徴	火山ガラス	斜方輝石	角閃石
Spfl	バブルウォールタイプ・ハミスタイプの火山ガラス主体	1.500-1.503	1.730-1.733	1.688-1.691
Spfa-1	ハミスタイプの火山ガラス主体	1.501-1.505 (1.502-1.503)	1.729-1.735	1.688-1.691

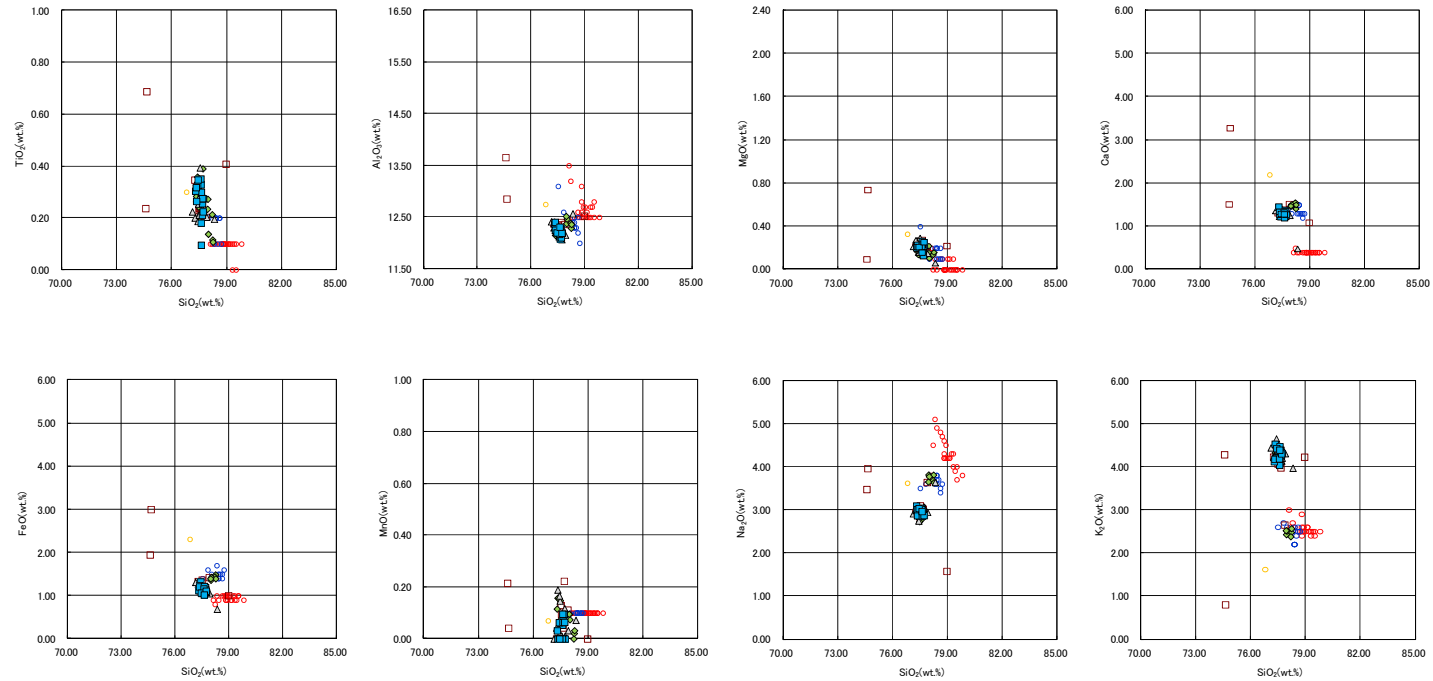
(参考) 洞爺火山灰 (Toya) の屈折率 (町田・新井, 2011より)

略号	特徴	火山ガラス	斜方輝石	角閃石
Toya	バブルウォールタイプ・ハミスタイプの火山ガラス主体	1.494-1.498	1.711-1.761 (1.758-1.761, 1.712-1.729 bimodal)	1.674-1.684

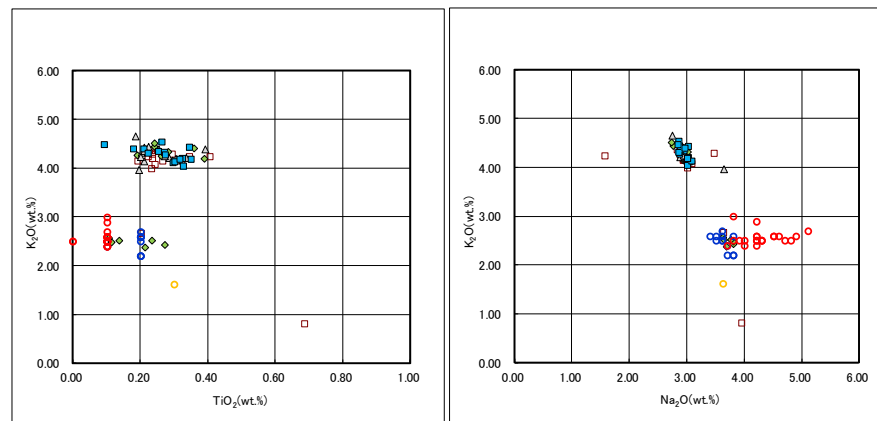
1.5.1 敷地における地質調査結果

①-5 C地点 (C-3トレンチ) (4/8)

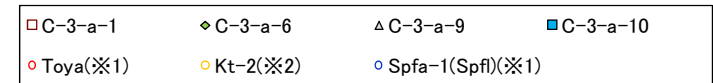
一部修正 (H29/12/8審査会合)



C-3-a 火山ガラスの主元素組成 (ハーカー図)



C-3-a 火山ガラスのK₂O-TiO₂図 (左図), K₂O-Na₂O図 (右図)

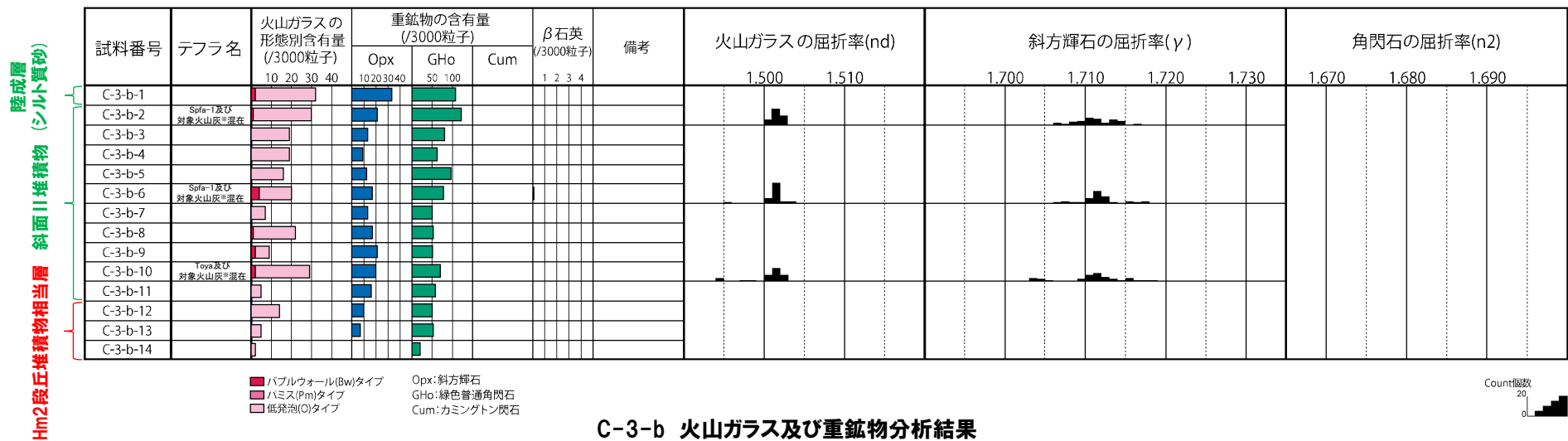


※1 町田・新井 (2011), ※2 青木・町田 (2006)

1.5.1 敷地における地質調査結果

①-5 C地点 (C-3トレンチ) (5/8)

一部修正 (H29/12/8審査会合)



C-3-b 火山ガラス及び重鉱物分析結果

※岩内平野南方に位置する老古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)に対比される火山灰を「対象火山灰」と呼称している。模式地において、本火砕流堆積物から、フィッショントラック法年代測定値0.19±0.02Maを得ている。

(参考) Spfl及びSpfa-1の屈折率 (町田・新井, 2011より)

略号	特徴	火山ガラス	斜方輝石	角閃石
Spfl	バブルウォールタイプ・ハミスタタイプの火山ガラス主体	1.500-1.503	1.730-1.733	1.688-1.691
Spfa-1	ハミスタタイプの火山ガラス主体	1.501-1.505 (1.502-1.503)	1.729-1.735	1.688-1.691

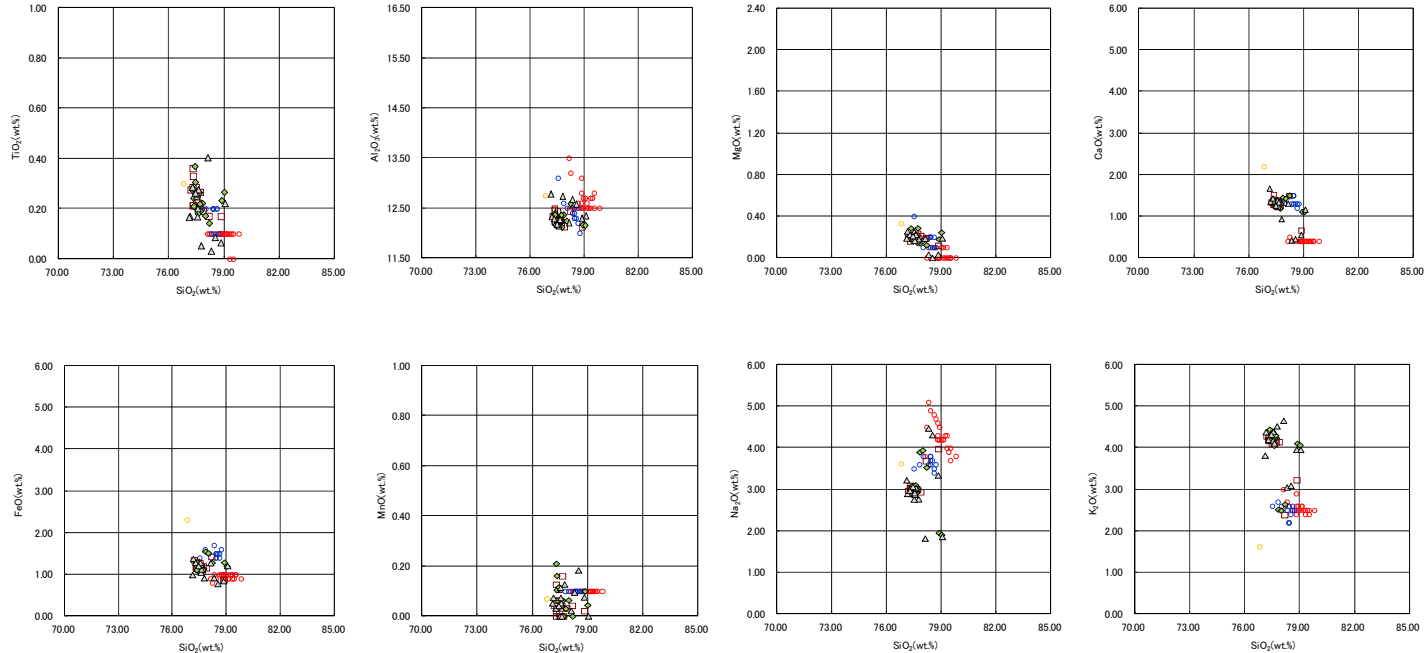
(参考) 洞爺火山灰 (Toya) の屈折率 (町田・新井, 2011より)

略号	特徴	火山ガラス	斜方輝石	角閃石
Toya	バブルウォールタイプ・ハミスタタイプの火山ガラス主体	1.494-1.498	1.711-1.761 (1.758-1.761, 1.712-1.729 bimodal)	1.674-1.684

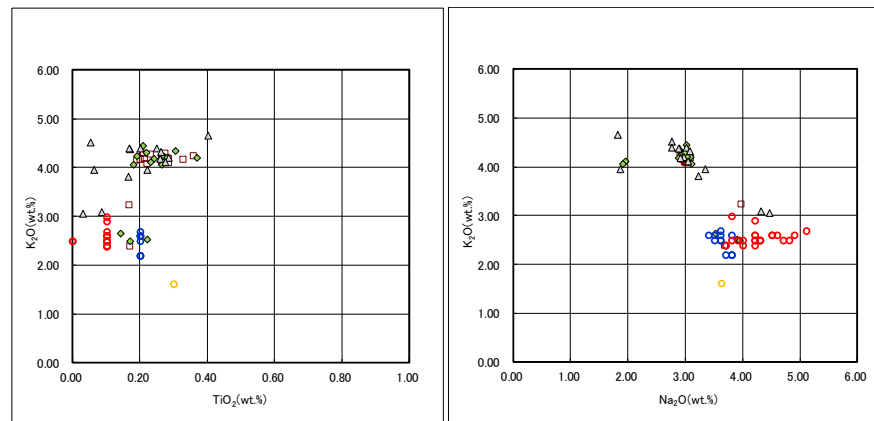
1.5.1 敷地における地質調査結果

①-5 C地点 (C-3トレンチ) (6/8)

一部修正 (H29/12/8審査会合)



C-3-b 火山ガラスの主元素組成 (ハーカー図)



C-3-b 火山ガラスのK₂O-TiO₂図 (左図), K₂O-Na₂O図 (右図)

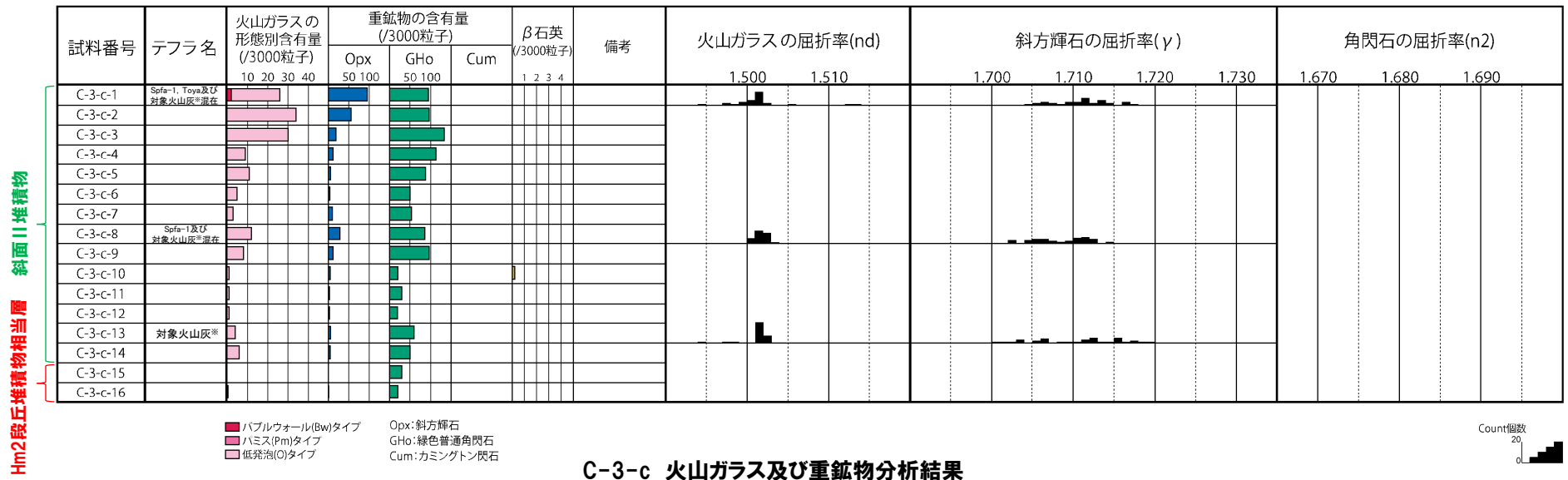
- | | | |
|------------|------------|--------------------|
| □ C-3-b-2 | ◇ C-3-b-6 | △ C-3-b-10 |
| ○ Toya(※1) | ○ Kt-2(※2) | ○ Spfa-1(Spfa)(※1) |

※1 町田・新井 (2011), ※2 青木・町田 (2006)

1.5.1 敷地における地質調査結果

①-5 C地点 (C-3トレンチ) (7/8)

一部修正 (H29/12/8審査会合)



※岩内平野南方に位置する若古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)に対比される火山灰を「対象火山灰」と呼称している。模式地において、本火砕流堆積物から、フィッショントラック法年代測定値0.19±0.02Maを得ている。

(参考) Spfl及びSpfa-1の屈折率 (町田・新井, 2011より)

略号	特徴	火山ガラス	斜方輝石	角閃石
Spfl	バブルウォールタイプ・ハミスタタイプの火山ガラス主体	1.500-1.503	1.730-1.733	1.688-1.691
Spfa-1	ハミスタタイプの火山ガラス主体	1.501-1.505 (1.502-1.503)	1.729-1.735	1.688-1.691

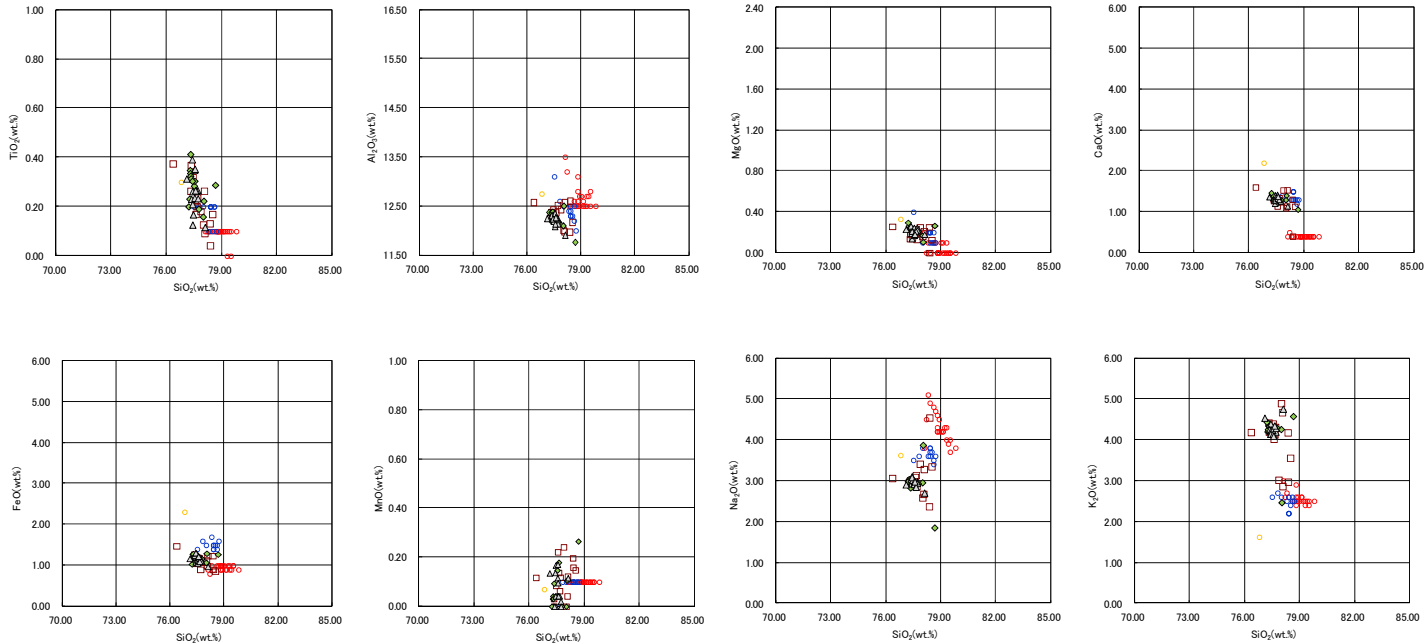
(参考) 洞爺火山灰 (Toya) の屈折率 (町田・新井, 2011より)

略号	特徴	火山ガラス	斜方輝石	角閃石
Toya	バブルウォールタイプ・ハミスタタイプの火山ガラス主体	1.494-1.498	1.711-1.761 (1.758-1.761, 1.712-1.729 bimodal)	1.674-1.684

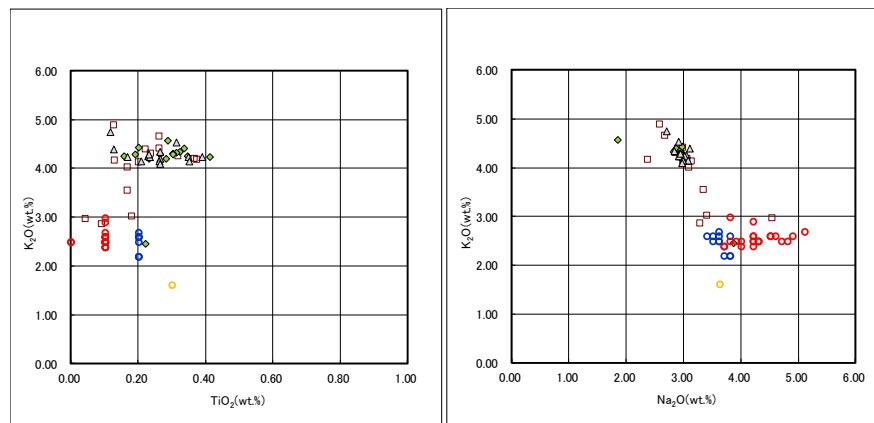
1.5.1 敷地における地質調査結果

①-5 C地点 (C-3トレンチ) (8/8)

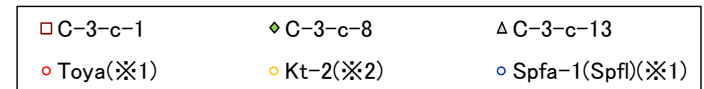
一部修正 (H29/12/8審査会合)



C-3-c 火山ガラスの主元素組成 (ハーカー図)



C-3-c 火山ガラスのK₂O-TiO₂図 (左図), K₂O-Na₂O図 (右図)



※1 町田・新井 (2011), ※2 青木・町田 (2006)

余白